令和４年度「愛媛大学教育改革促進事業（愛大教育改革ＧＰ）」

「コロナ禍における法文学部学生の『被災』記録の収集、保存」成果報告書

愛媛大学法文学部

２０２３年３月

目　　次

学部長挨拶
　愛大教育改革 GP 成果報告書の発行にあたって
法文学部長　井口　秀作　……（１）

代表挨拶
　GP プロジェクトの目的と経緯
GP プロジェクト代表　福井　秀樹　……（２）

【第１部】コロナ禍における法文学部学生への調査結果
コロナ禍における法文学部の被災記録の収集と保存Ⅴ　……（３）
コロナ禍における法文学部の被災記録の収集と保存Ⅵ　……(21)
コロナ禍における法文学部の被災記録の収集と保存Ⅶ　……(43)
コロナ禍における愛媛大学法文学部「基礎外国語」の教育実践　……(81)
コロナ禍における法文学部留学生の被災記録の収集と保存　……(99)
コロナ禍における授業提供体制の変化と学生意識……（135）
コロナ禍における法文学部学生による座談会記録の一部　……（147）

【第２部】調査結果を受けて教育コーディネーターの意見
　法文学部におけるコロナ禍の学生生活への影響と今後の課題
法文学部　人文学履修コース　水野　　卓　……（153）
　法文学部におけるコロナ禍の学生生活への影響と今後の課題
法文学部　法学・政策学履修コース　泉　日出男　……（154）
　法文学部におけるコロナ禍の学生生活への影響と今後の課題
法文学部　グローバル・スタディーズ履修コース　楢林　建司　……（155）

【第３部】コロナ禍の学生支援と他大学の様子
　法文学部相談室におけるコロナ禍の学生生活
愛媛大学法文学部カウンセラー　栗原　美幸　……（157）
　就職活動の変遷と就職支援における今後の課題
教育学生支援部就職支援課　岡　　靖子　……（158）
　福岡大学法学部におけるコロナ禍の学生生活への影響：
愛媛大学法文学部との比較の試み
福岡大学法学部　小佐井良太　……（159）

愛大教育改革 GP 成果報告書の発行にあたって

法文学部長　**井　口　秀　作**

本年度も愛大教育改革 GP「コロナ禍における法文学部学生の『被災』記録の収集、保存」成果報告書を発行する運びとなりました。本プロジェクトは、「コロナ初年度」とも言いうる2020年度に法文学部戦略経費に基づき、「コロナ禍」における法文学部学生の被害、被災の記録を収集・保存することを目的として、学生アンケートや座談会等の活動を開始し、愛媛大学法文学部論集などでその成果を公表してきました。2021年度以降は、愛大教育改革 GP に採択され、活動を続けています。

「コロナ対応は極めて難しく、正解はない」。これが、学部の執行部の一員として3年間コロナ対応に関わってきた者の一人として、強く感じることです。「安全が最優先」ということについては誰も異論はありませんが、それは「目標」ではなく「前提」に過ぎません。この「前提」の中で、いかにして教育・研究活動を継続させていくかが、問われ続けてきました。

今振り返ると、新型コロナウイルス感染拡大が直撃した2020年度の学年始まりの時期、授業開講を2週間遅らせ、その後も全面的に遠隔授業を行い、全学生の登学を禁止するとともに、教職員も原則として在宅勤務となり、学内から人が消えた時期もありました。「未知のウイルス」に対する「安全が最優先」の判断ではありましたが、そこには、「少し我慢すれば、また直ぐに元の状態に戻れる」という、今考えれば何の根拠もない、願望に近い想定があったように思います。その願望は見事なまでに打ち砕かれました。

愛媛大学全体としては、BCP ステージを設定し、警戒レベル毎に活動指針が示されてきました。しかし、その指針を機械的適用すればスムーズに対応できるというものではなかったということも、この3年間で分かったことであります。「実態に合わせる」という趣旨で BCP の見直しも何度かなされ、現時点（2023年2月）では、学内で段階の異なる3つのステージが同時に適用されるという奇妙な事態が生じています。これも、コロナ対応の難しさを示す証左の一つだろうと思います。特に、既に「大人」であるとともに、学外ではそれぞれに異なる様々な生活・活動の基盤をもつ学生に対して、「コロナ禍」において大学としてどのように対応すべきなのかは、これまでも、これからも課題であり続けています。

現在、「新型」という修飾語が陳腐に思えるほど、コロナウイルスの存在が当たり前の日常になりつつあります。そして、学生時代をほとんど「コロナ禍」で過ごした学生が、大学を卒業し社会に旅立っていきます。そうであるからこそ、学生が、それぞれの時点で、何を感じて、どう考えていたのかを、記録として残しておくことの意義は大きいとい考えられます。

いよいよコロナ4年目に突入し、感染症法上の位置づけも季節性インフルエンザと同じ「5類」に移行し、新たなステージに入ります。だからといって、コロナ前の日常が直ぐに戻ってくるわけでもありません。そのような中で、本成果報告書の成果を、法文学部の今後のコロナ対応に活かしていきたいと思います。

GP プロジェクトの目的と経緯

GP プロジェクト代表　**福　井　秀　樹**

新型コロナウイルス感染症の蔓延により世界中の教育提供体制が激変してはや3年となりました。コロナ禍において、愛媛大学の学生および教員はどのような困難に直面し、どのように対処してきたでしょうか。この経験から、私たちはどのような教訓を引き出し、コロナ禍における「学部運営」「学生支援」「教育」の改善に活かすことができるでしょうか。

本報告書は、以上のような問題意識のもとに、学生・教員を対象とするアンケート／インタビュー／座談会等を通じて実施している、令和4年度愛媛大学教育改革促進事業（愛大教育改革 GP）「コロナ禍における法文学部学生の『被災』記録の収集、保存」の調査成果を取りまとめたものです。

本事業の実施担当者（下記参照）は、2020年度から法文学部戦略経費プロジェクト「コロナ禍における法文学部学生の教育上および生活記録の収集、保存」（代表：青木理奈・鈴木靜）の一環として、コロナ禍における法文学部学生の被害・被災の記録の収集・保存を目的に、学生アンケートや座談会等を実施してまいりました。

本事業の目的は第1に、この法文学部戦略経費プロジェクトによる先行調査成果を土台として、法文学部学生の生活上の被害実態、法文学部教員の緊急時対応等の記録・分析を積み重ね、データとして蓄積することにあります。本事業の第2の目的は、こうして蓄積された記録・分析の成果を学部構成員の間で共有し、コロナ禍における、また、近い将来の発生が予想される南海トラフ大地震等の大規模自然災害時における学部運営、学生支援、教育提供体制の検討等の手がかりの一つとしてご活用いただくことにあります。

現在（2023年2月7日）に至るまで感染者数それ自体の増減は続いているものの、ワクチン接種の進展、致死率・重症化率の低下を受け、わが国でも2022年10月11日以降、すべての帰国者・入国者について、原則として入国時検査を実施せず、入国後の待機、待機期間中のフォローアップ、公共交通機関不使用等が求められないこととなりました。さらに2023年1月27日には、新型コロナウイルスの感染症法上の位置付けを2023年5月8日から季節性インフルエンザと同じ「5類」とするという政府の決定が公表されました。マスク着用も緩和される方針です。

今後は、コロナ禍ですっかり定着した感のあるマスク着用、遠隔授業などとそれらをめぐる方針の変更が大学教育のあり方に及ぼす影響等についても、継続的な調査が必要になるかもしれません。本事業の調査成果が、コロナ禍への対応を考える上だけでなく、ウィズコロナ、アフターコロナの学部運営、学生支援、教育提供体制の検討等にも参考資料としてご活用いただけることがあれば、本事業実施担当者にとって望外の喜びです。

本事業の実施担当者（50音順）

青木　理奈
石坂　晋哉
太田　響子
小佐井良太
鈴木　　靜
十河　宏行
池　　貞姫
中川　未来
福井　秀樹

【第１部】

コロナ禍における法文学部学生への調査結果

コロナ禍における法文学部の被災記録の収集と保存Ⅴ

― 2021年度学生座談会報告書 ―

青木理奈・鈴木　靜・福井秀樹
小佐井良太（福岡大学法学部）・石坂晋哉・太田響子
池　貞姫・十河宏行・中川未来

1．はじめに

新型コロナウイルスの感染蔓延の長期化は、大学生にどのような影響をもたらしているのだろうか。新型コロナウイルス感染蔓延は、多くの人にとって予期しえなかった深刻かつ長期にわたる未曽有の災厄である。愛媛大学も、急速に進む感染拡大に対応して、教育提供体制が激変して3年目を迎えようとしている。

今回の新型コロナウイルスのような全世界的規模で起きている災厄について、記録や教訓を収集、保存し、継承していけば、それは、次なる災厄への備えになるだろう。なにより、今のコロナ禍において刻一刻と事態が変わっていく中、時系列で保存できるよう、記録はコロナ禍の初期から継続的に収集することが重要であると考えている。

本プロジェクトは、今回の未曽有の事態に際し、法文学部学生の生活上の被害実態を明らかにするとともに、法文学部の緊急時対応および遠隔授業等実施に係る記録を収集し、データベース化することを最終目的とする。

これまで、愛媛大学法文学部の学生を対象としたアンケート2020年度の実施[1)]、2021年度の実施[2)]のほか、学生手記を収集・分析[3)]、座談会を開催[4)]することによ

1）青木理奈・鈴木靜・福井秀樹・小佐井良太・石坂晋哉「コロナ禍における法文学部の被災記録の収集と保存Ⅰ―学生を対象としたアンケート調査の単純集計結果―」『愛媛大学法文学部論集』第50号（社会科学編），pp.37-68.2021年2月.

2）青木理奈・鈴木靜・福井秀樹・小佐井良太・石坂晋哉・太田響子・池貞姫・十河宏行・中川未来「コロナ禍における法文学部の被災記録の収集と保存Ⅳ―2021年度学生を対象としたアンケート調査の純集計結果―」『愛媛大学法文学部論集』第52号（社会科学編），pp.19-54.2022年2月.

り、コロナ禍初年度からの学生生活を分析し記録として保存してきた。

今回の調査は、2年続いたコロナ禍での大学生活で問題となった点、改善できる点、良かった点などをテーマとする座談会形式で行った。教員も座談会に加わり、学生の積極的な語りを引き出すことにより、コロナ禍における大学生の実態の解明――特に学修状況や生活状況の把握――を試みた。

２．対象と方法

本調査の対象は、法文学部の学部生であり、調査日時、出席者は以下の通りである。

⑴　座談会および参加者の概要

日　　時：2022年2月22日㈫　10：00－12：30
開催形態：オンライン（Zoom ミーティングを使用）
出席学生：10名（男性4名、女性6名）

ID（昨年度 ID）	学年	性別	昼夜間主の別	コース
A	1回生	女性	昼間主	
B	1回生	男性	夜間主	
C	2回生	女性	昼間主	グローバル
D（C）	2回生	女性	昼間主	法政
E（I）	3回生	女性	昼間主	人文
F	3回生	女性	夜間主	法政
G	4回生	男性	昼間主	法政
H	4回生	男性	夜間主	人文
I	4回生	男性	昼間主	グローバル
J（M）	4回生	女性	昼間主	留学生

3）青木理奈・鈴木靜・福井秀樹・小佐井良太・石坂晋哉「コロナ禍における法文学部の被災記録の収集と保存Ⅲ－2020年度学生手記の分析－」『愛媛大学法文学部論集』第51号（社会科学編）, pp.93-111.2021年9月.

4）青木理奈・鈴木靜・福井秀樹・小佐井良太・石坂晋哉「コロナ禍における法文学部の被災記録の収集と保存Ⅱ－2020年度学生座談会報告書－」『愛媛大学法文学部論集』第51号（社会科学編）, pp.117-138.2021年9月.

なお、1回生は、所属コース振り分けは行われていない。また、（　）内のIDは、昨年度も参加した学生のID番号である。

⑵　座談会の共通テーマ

今回の座談会では、「コロナ禍における大学生活について」を共通テーマにし、以下の3点につき学生に発言を求めた。①1年を通じて大学生活はどうであったか、②昨年度と比べてどうであったか、③今後、大学へ望むこと、将来に向けて今頑張っていること、コロナ禍が収束したらやりたいことなどである。

⑶　倫理的配慮について

本調査において、対象者には、以下の内容を口頭で伝え、倫理的に配慮した。座談会冒頭において、本調査の趣旨を明確に伝え、論文等で公表すること、録音することを依頼し同意を得ている。本稿での発言は全て匿名とし、公表する発言内容は、事前に学生それぞれに確認している。学生が発言内容について削除を求めた場合には、応じている。

３．オンライン座談会の内容

以下の発言は文脈が変わらない範囲で整えている。なお、冒頭の趣旨説明、教員や学生の自己紹介、重複する発言や感想、最後の教員からの挨拶等は省略している。司会は、法文学部教員が行っている。

―１年を通じて、大学生活はどのように感じられたか。

学生G（男性・4回生・昼間主）：就職活動があったが、公務員志望だったので勉強する時間が長かった。就職活動の不安、勉強の進捗状況、公務員の説明会等、他の人がどの程度情報を得ているのかということが分からず不安があった。友達ともなかなか会えない状況なので、不安を話す機会が少なかった。不安などを話し合う機会がもっと欲しかったなと思うときが、去年より多いと感じた1年間だった（なお、H、I同意見）。

学生H（男性・4回生・夜間主）：実家が県外で、帰省し就職活動をしていたので遠隔授業は非常にありがたかった。対面授業だったら受けられなかった授業も多かったので、そういう配慮があったおかげで何とか単位を取れて卒業できるので、大学に非

常に感謝している。

学生 I（男性・4回生・昼間主）：民間企業を中心に就職活動をした。県内でもオンラインでの説明会、面接が結構あったが、オンラインだったおかげで企業まで行かずに行うことができ、幸運だった。授業はほぼゼミしか履修していなかったが、ゼミはオンラインで話し、特に支障はなかった。プライベートな面に関しては、今年はコロナ感染者数に波があったと思う。多かったり、時には0人のときもあったりしたが、0人のときだとその範囲、場所、人数を考慮して遊びに行った。感染者の人数が多いときだと家の中で自分の時間を過ごしたり、メリハリをつけて、それなりに1年楽しむことはできたのかなと思っている。今年1年特に何か困ることなくそれなりに楽しめたと思う。

学生 J（女性・4回生・昼間主・留学生）：4年生で授業はゼミしかなく授業が少ないことで、リモート授業も慣れた（学生 E 同意見）。また資格の試験、大学院入試に関する準備をしたが、その時間は充実していた。

学生 E（女性・3回生・昼間主）：この1年大きく分けて4つのクォーターにわけて生活を振り返る。第1クォーターで運動不足で、ぎっくり腰になり結構大事になったが、授業は遠隔時だったので、家から履修できて助かった。第2クォーターから夏休みぐらいにかけて、結構コロナの感染者数も増えた時期で、デルタ株で「やばい、やばい」みたいになっていたのですごく不安な時期だった。実家に住んでいることもあり、友達ともどこまで会っていいかわからず、ふさぎ込んでいた時期だった。後期からは、就職活動時期になり、東京や関西方面の企業を受けている。毎回、企業まで面接に行かなくて良かったり、オンラインで参加できたところは非常に手軽になって良かった。反対に、先日対面での面接があり、飛行機で移動したが、松山に帰ってきてPCR 検査を受け、陰性の結果が出るまでホテル泊をした。大変な時期だった。

学生 F（女性・3回生・夜間主）：今年1年、できる限り大人数の場所に行きたくないと思っていたので（実家ということもあり）、授業の形態も対面でない授業を探すためにシラバスを念入りにチェックした。大学の友達との交流は去年に引き続いて少なく、SNS だけの繋がりが多い。コミュニティはアルバイト先ぐらいだったので就職活動とか情報交換もアルバイト先で全部済ませてしまった。周りがどれぐらい進んでるかという情報交換の場所があまりなかったと感じて、不安に思っている。

学生 C（女性・2回生・昼間主）：オンライン授業自体の形態には慣れたので、授業に関して負担は特別なかった。私が入学してからコロナの影響でオンラインの授業が2年間続いているので、対面の授業もあまりなく、ゼミぐらいだったので、正直大学に通っている感覚が今でもあまりしない。大学生活を満喫している感じは正直ない。学校の行事であるとか部活動も所属しているが、それも思うように活動もできず、もどかしい。その制限がある中でも、部活動のメンバーとの関わり、アルバイト先での活動、経験での充実感はそれなりにあった。この制限された状況の中でも、自分の周りの人たちがそれぞれ考えて、自発的に行動しているのを見て、自分は何もできてないという焦りを感じている部分もあった（学生 D 同意見）。

学生 D（女性・2回生・昼間主）：法政コース必修科目「社会科学リテラシー」[5] のガイダンスが対面授業だった。後期は10月の頭からは対面授業が2科目あり、12月で対面授業が大幅に増えてからは6科目、全体の半分ほどが対面授業になった。私は対面の方がモチベーションが上がるのと、一人暮らしで大学から家が近いのでさほど大学に行くのが苦じゃないので、対面授業の方がいい。ずっとオンラインだったので、学生らしさは後期になって感じた。夏ぐらいにサークルに入った。しかし、活動もそこまで盛んではなく、交友関係は広がっていない。

学生 A（女性・1回生・昼間主）：今年初めての大学生活だったが、初めての大学生活だったからこそ大学とはこんなものだっていう印象で特に大学に対して不満や不安はなかったのが、この1年の印象である。大学の修学支援システムなど情報が充実していて、特に情報不足を感じることはなかった。授業に関して言えば、個人的に選択肢を広げるために英語の教員免許を取るための勉強を始めた。そのカリキュラムに沿って履修登録をして、科目数が多くて苦しい1年を過ごしてしまい、視野を広げたかったのにかえって関心が狭まってしまった、苦しかったという気持ちがある。夏季休業は9月に検定試験があったので、1か月間にわたり勉強した。現在も自分がしたい勉強をしている。長期休暇で比べると2021年の9月の1カ月と今2022年の2月では、今のほうが集中力が非常に低下していると思う。E さんが運動不足の話をしていたが、私も運動不足で集中力が低下していると思う。ほかの人と関わらない分自主性を問われて

5）愛媛大学法文学部法学・政策学コース2回生向けの専門科目。授業の目的は、社会の維持や社会問題解決に必要な社会科学的概念・手法に対する知識と理解力の基礎を身に付け、履修コースでの学習の素地を得ることにある。2021年度の具体的内容は、法学・政策学コースの履修やゼミ選択など全体に関わることだった。法律学、経済学、政治学分野の4人の教員が、具体的テーマに基づき法学・政策学的なアプローチについて講義を行った。

生活していると思う。そのなかで自分の悪いところも見え、苦しんで、自分の嫌なところがどんどん見えてくる1年だった（学生Ｆ同意見）。

学生 B（男性・1回生・夜間主）：1回生ということで最初は大学生の友達ができるかなどの不安があり、数少ない対面授業がある中で高校の同級生を介して友達ができたことはすごく良かった。遠隔授業が多かったので自分の時間を作れる機会が多く、空いた時間をすごく有意義に過ごすことができた。大学に対する不満は特になく、充実した生活を送ることが出来た。

―遠隔授業での教材提供の質は、昨年と比べてどうであったか。今年入学した1回生の皆さんは、教材としての動画や資料をどのように感じたか、不満はなかったか。

学生 C：2年目になるので、オンラインの授業、講義自体には慣れて（2回生以上の学生ほとんどが同意見）余裕ができて自分の時間を少しずつ作れるようになった。増えた時間で自分が講義中に気になったことを調べたり、学びを深めることができた。去年受けた Moodle の授業では、先生からの課題を私たちがこなして終わる授業が多かったと思うが、今年は、先生からの投げかけがあり、その後、学生が返したものにもう一段階返してくださる授業が多かったので、対面の授業に近づいた形式のものが増えた気がする。講義の質など、去年よりたくさん工夫してくださっていると感じた。講義時間については、提供される動画が全部で合わせて1時間だったとしても、15分ごとなど何らかのセクションごとに分けてくれるとよい。後から復習するときも、気になっていたところが後から調べられる。また、テスト勉強をするときにも、やりやすくなる。後期の授業で良かったのは、同窓会科目の「社会と人間」[6] だった。コロナ禍で人に会うのが難しいなか、社会人から話を聞ける機会が貴重だった。

学生 D：昨年との違いは、専門科目の対面授業が可能になったことが大きく、学生らしいと思った。

学生 F：良かった授業は「民法」。レジュメや動画が分かりやすかった。遠隔授業で非同期型だったので動画配信だった。動画は倍速でも聞ける配慮があり良かった。

6）愛媛大学法文学部学科共通の専門科目。授業の目的は、法文学部卒業生から学生生活での経験談（就職活動等）を伺い先輩方との語り合いを通して、大学生活や卒業後の社会生活を自ら考え設計する契機を得ることである。2021年度は、13職種の法文学部卒業生が、大学卒業後の実体験をもとに職業生活や生き方について講義を行った（遠隔同期型授業で実施）。

学生 H：良かった授業は「心理学概論」。Moodle 上に動画や参考資料のリンクがあり、即座にクリックしてサイトに飛べる。こういう面は遠隔授業のほうが有利だと感じた。対面授業の際に印刷した用紙が渡されるが、遠隔授業の際にはそれがない。無駄がなくなったのもいい点だと思う。

学生 A：大学生になって授業を受けて感じたのが、ICT とかオンライン教育をしたからといって、現代的な教育になるわけではないと感じた。パソコンを使う時間が増えて、現代的な勉強の仕方をしているような気がする一方で、使っているツールのみが現代的な気がしていた。大学の教室でしているような授業を、無理やり Moodle 上でやっている気がしていた。ある授業では1時間半の動画を見て、動画とは全く別の課題をする授業があった。1時間の授業内容を要約しながら、または教員からの課題に取り組みながら視聴できる授業は苦ではなかった。一方、1時間半の動画をただ見るのは辛かった。動画を倍速設定にして聞くこともできるが、倍速にしていたことが教員に知られ、そのことで評価が悪くなるのか不安だった。そのため倍速にして聞くことはできなかった。

学生 E：昨年は、Moodle を使う授業と修学支援システムで連絡がくる授業等が混在していた。今年は、それが改善されればいいと期待していた。しかし、今年も先生ごとに異なっていた。加えて、修学支援システムから、就活ガイダンスのお知らせや、授業アンケートのお知らせが沢山あり、そのなかに授業の連絡が混じってくる。非常に分かりづらい。私個人としては Moodle の方を連絡手段として一元化してくれた方がよい。授業を受けるべき時間に確認するし、その場で必要な情報が整理されているのでわかりやすい。「朝鮮言語文化特講」は、Moodle のフォーラム機能（受講生が意見や質問を入力すると、登録している全員もその内容を確認することができる）を活用しているが、良いツールだと思う。フォーラムを使って、受講生みんなで話し合うことができて、最後に先生からの総括がある。ほかの授業でも、フォーラムも活用してほしい。

学生 F：昨年は、遠隔授業のうち同期型授業で利用する Zoom の招待メールとかを、授業直前の1日前に送ってくる先生がいた。しかも、その時に受講生は、その授業を同期型でやることを初めて知る感じだった。授業の時間帯に、すでにアルバイトの予定を入れていたこともあり、何回か授業に出席できなかった。授業形態の連絡を直前によこさないよう考慮してほしいと思いアンケートにも書いた。今年度は、そのような直前の連絡がなくなったのが良かった。

学生 G：昨年度は遠隔授業に慣れていかなければいけないことに対してのストレスや不安があった。今年はある程度慣れてきて、慣れてきたと同時に、いつまでこの状態が続くんだとも思った。学生の感想を、次回の授業でその一部を紹介してくれたのがあった。遠隔だと一人で授業を受けている気分になることが多いので、他の人のコメントを紹介してくれると、同じようにほかの人も一緒にこの授業を受けているのだなと分かって良かった。「社会保障法」の授業では、コメント欄に、授業内容について意見を出す機会があった。意見を書いてみると授業内容も理解できるし、教員が学生の意見を授業に反映させてくれたりした。こういうことで、遠隔授業のストレスがだいぶ軽減されたように思う。

学生 J：印象的だった授業は英語に関する授業だ。その先生は自分の声を録音して、スライドにつけて動画にしてくれた。留学生なので一度聞いただけでは理解しにくい内容を、何回も復習できるのが良かった。留学生なので、日本語も上手ではない。日本語の講義が全て理解できるわけではない。質問したくても、対面授業の場合は恥ずかしいし難しい。ある授業で、その先生はいつも最後に質問の時間をくれて、他の人が退出してから質問できるので、とても良かった。

―交友関係や日常生活については、どのような変化があったか。

学生 A：もちろん高校生から大学生という点ではかなり大きく変わったが、私は実家に住んでいるので、家族との関わりや友達、友人関係は大きくは変わらなかった（学生 B 同意見）。

学生 C：少し慣れてきて趣味も増えた。オンライン用のイヤホンを買ったり iPad を買ったり、自分の学習環境が良くなるような周辺機器を揃えた。

学生 E：交友関係は完全に2回生のときより狭くなった。1回生より2回生、2回生より3回生という感じで狭くなった。生活リズムが、これまでとはかなり変わっているし、それも人それぞれに異なる。正直、今年もオンライン授業ばかりだったので、2回生の方が話したように、3回生の私たちも友達はかなり減ったと思っている。

学生 F：昨年に比べて自粛ムードも若干緩まってきてる感じがしている。その分、就職活動でもコロナ禍でも学生時代に力を入れたことを聞かれたり、またコロナ禍だからこそ何か始めましたか？と、質問されているような気がした。A さんも言ってた

が、コロナ禍で、何もできてない自分が嫌になる。自粛はしなければいけないけど、何か自主的な行動をしなければならないのではないか。ほかの人たちは行動を起こしていて、いつの間にか自分だけが置いていかれているのではないかという感覚になった。昨年よりも、コミュニティが狭くなり、精神的な面でちょっと不安定になることが増えた。

学生 G：昨年度は生活リズムが大きく崩れてしまった。今年は、同じ環境の中でも、生活リズムが崩れないよう情報収集をし、工夫をした。今年は、コロナで得た知識や経験を今後の人生でどう生かせるかということを比較的よく考える年になった。

学生 H：生活面で言えば、人がいないところで散歩をした。たとえば、松山城とか総合公園とかに一人で行くことが増えた。E さんも言っていたが、私も運動しなくなってまずいなって思った。

学生 I：昨年と比べて大きな変化は特にないが、コロナ禍前に比べると、大学が勉強するだけの場所になってしまった。授業で友達と会って少し話したり、授業が終わってから「次授業あるの？」とか「学食行こう」っていう何気ない会話がなくなってしまった。前向きに捉えると、友達と気軽に会えたり、話したりが当たり前じゃない、大切にしようと思うようになった。就職活動でコロナ禍でも「何をしてましたか」など聞かれるのも、コロナ禍に入ってからの変化だと思う。今年に入って、愛媛大学でも感染者が増え、友達もコロナになったりし、身近に感じる機会が多かった。コロナ禍に入って遠隔で授業をしたことも、そうしたことを友達と話したりしたことも、仕事に就く前に経験できたことも、前向きに言えば良かったと思う。

―今後、大学へ望むことはどのようなことか。

学生 C：授業を遠隔でするか対面でするかの連絡は、できるだけ前もって教えてほしい。以前、3限の授業なのにお昼過ぎに今日は対面と連絡があり、実家から1時間ぐらい自転車でかかるので、大変だった。

学生 B：正直なことを言うと自分がやりたいタイミングでできる非同期型授業が私にはあっていた。今後とも、出来ることならば非同期型授業を中心にして欲しい。

学生 D：私は対面授業の方が好きなタイプ。大学は、コロナが流行りだしたら遠隔に

切り替えるのは早いが、反対に感染者数が収まっているときに、対面授業に切り替えるのは遅いと思う。対面授業ができる時期に早めに対面授業に戻してほしい。遠隔の授業のなかには、その授業時間までにMoodleに教材をアップロードしてくれない先生がいる。学生からは言いにくいので、先生は授業時間までにアップロードすることを厳守してほしい。対面でも遠隔でも、授業の最初に、その前の回に出た学生の質問、感想を取り上げて、先生がコメントを言ってくださるのはよかった。他の人の意見を知ることができるのは貴重で、今後も続けてほしい。

学生G：この3月で卒業する。後輩のために大学に求めることは、こうした座談会で出た学生の意見を授業に生かしてもらいたい。

学生H：私は夜間主コースだが、昼の時間バイトができなくなったので昼の時間に授業を入れることが多くなった。その結果、本来必要な夜間の単位が足りず、このままでは卒業できないと言われた。単位不足等は、学期初めに毎回メールで教えてもらえたら有難い（学生I同意見）。

学生I：キッチンカーを大学に呼んでいたことをニュースで見て、素敵だなと思った。コロナの影響で学食が閉まっている期間は、一人暮らしの人は助かると思うし、ニュースで取り上げられたら愛媛大学自体が良いアピールになると思った。この座談会も他コース、他学年と交流できるのはすごく素敵だと思う。

学生J：充実した学生生活を送れるように経済的な支援だけではなく、生活的な支援も充実してほしい。大学で友達が作れる機会が増えるような遠隔交流会などが増えるといい。

学生E：来年以降、大学側に考えてほしいことがある。それはインターンシップに関わること。一つ目は、事前指導の連絡時期を工夫してほしい。事前指導を履修することが必須だが、その連絡が遅すぎる。結果的に事前指導を受けることができたのだが。また、事前指導の内容は適切なものとは思えなかった。スーツはこういう風に着ましょうとか、ハガキはこう書きましょうとか。私は就職活動を早めに始めているが、コロナで就職活動の方法も激変しているため、ハガキなんて1回も書いたことがない。そういうギャップがあった（学生F同意見）。また、事前指導とインターンシップの関係の指示もわかりにくかった。事前指導を受けないと、企業のインターンシップが受けられないことがあるとの説明があったが、それが私の希望している企業

なのかどうかがわからず、不安になった。詳細な説明が欲しかった。もう一つが、大学から配布される「キャリア形成ハンドブック」について。入学時に配布されるが、私は就職活動を始める3回生になってから読んだ。とてもためになる内容だと思う。入学時でなく、就職活動を始める3回生で配布するようにしたら良いと思う。他にも就職支援について要望がある。就職面接もオンラインが増えている。オンライン面接の際には、顔が明るく映るライトを用意することが重要になってきている。こうした新たな状況に対応する情報をえる機会が、大学にはない。そのために、学生間で情報格差がでていると思う（学生Ｆ同意見）。

学生 F：この座談会に初めて参加した。普段のコミュニケーションが少なくなっているので、久しぶりに様々な人と話した。こうしてオンラインで、マスクなしで、互いの顔を見て話すことで、「自分には意外とこんな良いところがあったんや」と気づける機会になったのがよかった。今後、他人と接することが乏しい1～2回生には、様々な人と交流できる機会を増やしてほしい。自分自身を肯定的に捉える機会になるし、自分の意見を話すことは恥ずかしいことじゃないと気づく。そうした機会を設けてあげてほしい。インターンシップに関しては、事前指導の有無ややり方に振り回されてしまったが、大事なのはインターンシップが始まってからだと思う。インターンシップの事後指導も受けたが、事後指導をする意味あるのかなという内容で不満だった。事前指導、事後指導を受けることは単位修得のために不可欠なのだから、そのあり方を見直してほしい（学生Ｅ同意見）。

―将来に向けて頑張っていること、コロナが収束したらやりたいことはどのようなことか。

学生 A：今年1年の反省点である視野を狭めすぎたことを転換しようと思って、いろいろなことに目を向けるようにしている。人権問題を前から勉強しているが、今後は国際的なものに目を向けたいと思って、コロナが収束したら、世界的な遺産巡り、難民キャンプ、今問題を抱えている場所に行きたいと思っており、そのために外国語の勉強をしている。ほかには、収束したら広い世代の人と交流を持ち、人脈を広げたい。

学生 B：趣味の一つとしてサッカー観戦があって、今は、県外は行きづらくて、家から中継を見ることしかできていない。コロナ禍が収束したら、県外の現地に行って観戦したい。

学生 C：将来に向かって頑張っていることは、英語、中国語、手話等、言語の勉強。勉強を続けて自分の選択肢、可能性を広げたい。コロナが収束したら、語学力を生かして、海外に行きたい。

学生 D：3月に TOEIC を受けようと思っているので、その勉強をしている。ほかには、コロナ禍で家で過ごす時間が増え、K-POP にハマったので、韓国語の勉強をしている。最近は世界遺産の本を図書館で借りたりしているので、収束したら海外旅行に行きたい。

学生 G：3回生の夏にイタリアとスペインに行く予定で貯金をしていたがコロナ禍になって行けなかったので、海外旅行をしたいと思っている。就職したらなかなかヨーロッパの方は行く時間がとりづらいと思うが。

学生 H：コロナが落ち着いたら、また四国旅行に行きたい。

学生 I：コロナ禍に入ってから、愛媛県内で遊ぶことが増えた。私は愛媛出身だが、より愛媛の良さを知ることができた。コロナ禍が収束してやりたいことは、シンプルに友達とコロナを気にせず遊べたらいい。マスクせず、人混みに行っても全然気にしないような生活が送れたらいい。ほかの人が言うように、海外旅行にも行きたい。

４．おわりに

本研究では、生の声がきける座談会を開催することで、コロナ禍における大学生の実態を明らかにし、学修状況や生活状況を把握した。

遠隔授業開始から2年が経過し、オンライン授業自体には慣れたものの学年によっての違いも見えてきた。

1回生はコロナ禍での大学生活だと割り切っていたためか不満、不安は比較的少ないように感じられる。しかし、自分の時間を上手に使うことに苦労し、集中力の低下や自分のできていないところに目が行ってしまい、結果、自己肯定感の低下を感じることもあったとする発言が複数見られた。ただ、大学生活をスタートするにあたり情報不足を感じることはさほどなかったとの発言からは、この間の大学の対応に一定の改善がみられたことの証左とも言えるのではないだろうか。

2回生は、遠隔には慣れたものの大学に通っているという感覚は今でもなく、サークル等の活動も思うように出来ずもどかしいという思いや、制限がある中でもうまく

活動している周りと比べてしまい、焦りを感じている部分もあったことがうかがわれる。入学時からコロナ禍だった学年であり、コロナ禍の影響を一番受けている。今後も心理面も含めた支援が必要だと考えられる。

さらに、3、4回生は、インターンシップや就活に力を入れた一年を過ごしており、大学生活自体には大きな不安を感じず、遠隔授業のメリットを活用し、自分の生活とのバランスを考えていたことがうかがわれる。就活に関して友達と情報交換できなかった不安は共通してあるものの、どこまで対面を重視しているかによって、個人差がでている。また、座談会中に生活に「メリハリをつけて過ごした」と発言していた学生がいたが、状況の変化に応じて工夫して過ごした学生は、不安や不便さをそれほど感じない傾向にあるのかもしれない。さらに就職活動や大学院進学等に力を注ぐことで、大学生活を充実させていると感じているようにも思われる。

遠隔授業の質に関しては、2～4回生すべてにおいて、2020年度と比べ肯定的な意見が多く、具体的に良かった授業やその内容なども述べられた（後掲の速報版）。とりわけ、学生からの質問に対する教員のレスポンスに関しては、学生が授業に主体的に取り組む姿勢を強化する効果を生み出している。

また、遠隔非同期（オンデマンド）型授業で提供された講義動画について、「倍速でも聞ける配慮があり良かった。」という意見と、「倍速にしていたことが教員に知られ、そのことで評価が悪くなるのか不安だった。そのため倍速にして聞くことはできなかった。」という意見が見られた。これらは、講義動画に限らず普段から動画の「倍速視聴」を日常的に行っている世代の実感と実態を反映した意見と思われる。講義動画の再生スピードを上げて視聴する受講スタイルが直ちに「遠隔授業の質」の低下を招くとまでは言い難いものの、複数の講義動画の同時視聴が問題となった他大学の例もあることから、今後は講義動画の視聴方法を含めた受講ルールを教員の側で予め明確な形で学生に提示しておくことも課題の一つと言えよう。

今回、昨年度に引き続きオンライン座談会を開催したが、学生たちはオンライン上での発言や意見交換について、慣れとともにスキルアップをしているように思われる。昨年度の座談会では、画面をオフにして顔を映し出さないことを希望する学生も多かった。そのため、発言が遠慮がちになると同時に、共通したテーマを話し合っているにもかかわらず、それぞれの発言が噛み合わないと感じられるところもあった。しかし今年度に至っては、参加者全員が画面をオンにして顔を映し出すことにためらいがなく、それぞれ積極的な意見や経験が語られ、他の参加学生の意見に対して、賛同の意を示す場面や、同様の自身の経験を語るといった様子が数多く見られた。最後の感想でも、ほぼ全員から、座談会の参加に対して肯定的な意見が寄せられ、他学年他コースのことを知ることができた喜びや、話すことでモヤモヤが解消されたり、参

加してみると、意外と話したいことがあると気づく機会になったり、経験を語り合い、共感しあうことで、支え合っていると感じた時間になったようだ。

昨年度に引き続き共通している点は、運動不足により体調を崩した学生がいたことであり、家に居続ける状況が心身両面にもたらす影響を改めて確認することができた。全国的にコロナ禍が長期化している中で、愛媛大学は、2022年4月より原則的に対面授業に切り替え、さらに、6月23日からは大学の BCP レベルもほとんどが最低レベルの「ライトイエロー」になっており、With コロナの段階に入ったとして、教育提供体制の切り替えを行っている。このように感染状況の程度や長期化に伴って、大学の教育環境は今後も大きく変化し続ける可能性がある。こうした教育環境の変化が学生にもたらす影響には、予測できない部分が多い。例えば、2022年度前学期（とりわけ4月）には、対面授業の増加に起因する疲労を訴える学生も少なくなかった。教育提供体制の変化が、学生にどのような影響を与えるのか、引き続き注視し、学生側の物理的・心理的負担の軽減を図る必要もあるだろう。今後、他学部や他大学との比較をしつつ、学生の心理的な変化に注目して、引き続き調査をしていきたい。

謝辞

今回、この座談会に携わって頂きました法文学部の教員、ならびに参加してくださいました法文学部学生の方々に感謝の意を表します。

また、この研究は、令和3年度法文学部戦略経費、令和3年度愛媛大学教育改革促進事業（愛大教育改革GP）及び JSPS 科研費19K21723の助成金交付により研究が遂行されたものです。

【資料】速報版（2022年3月14日、法文学部教職員へ送信）

コロナ禍における法文学部学生による座談会記録の一部
ー2022年度の授業設計や授業内容の参考のためにー

令和3年 GP 愛大教育改革 GP 法文学部プロジェクト
代表　福井　秀樹
実施担当者　青木　理奈　石坂　晋哉　太田　響子　小佐井良太
鈴木　　静　十河　宏行　池　　貞姫　中川　未来

令和3年愛大教育改革 GP 法文学部プロジェクト「コロナ禍における法文学部学生の『被災』記録の収集、保存」では、2022年2月22日㈫ 10時から12時にかけ、法文学部生10人に集まってもらい、オンライン座談会を開催しました。学年や性別、コース、昼夜間主に大きな偏りがないように留意して、参加学生を募りました（とりまとめは鈴木、青木、司会は小佐井）。座談会の場で、学生から出た発言の一部について、ご紹介します。コロナ禍が長期化するなかで、2022年度の授業設計の参考情報としてお知らせすることが趣旨です。ここで出た学生の意見、発言がすべてではなく、また先生方からも異なるご意見もあろうかと思います。しかしコロナ禍で、なかなか学生と直接話す機会が十分に取れないなかで、座談会で得られた学生の貴重な意見をご覧いただく価値はあると考えました。

お手すきのおりにご一読いただけましたら、GP プロジェクト一同の励みとなります。

1　この1年間の大学生活はどうだったか

遠隔授業開始から2年たち、「オンライン授業にも慣れた」と発言する学生が多かった。また、「周りの人たちが、（コロナ禍の）制限された状況でも自発的に行動しているのを見て、焦りを感じる」の発言も複数あったのが特徴的である。

後期から就職活動を始めている3回生からは、「後期は、就職活動を始めた。東京、関西など（感染状況が深刻な地域）の企業を志望。オンラインで面接等できることはよかった」一方、首都圏で行われる対面面接もあり、その際には松山についてから PCR 検査を受け陰性を確認するまでは、移動できなかった経験も話された。また、「就職活動で、コロナ禍で何をしてきたかを聞かれると、何もできていない自分が嫌になった。自粛を守っていたら、いつの間にか置いて行かれるような気になった」と不安な気持ちをかかえている発言もあった。

入学時点から遠隔授業が主だった2回生からは、「後期は対面授業が2科目あり、12月で対面授業が増えてからは、半分くらいは対面授業になった」ことを喜ぶ発言も見られた。1回生からは、「数少ない対面授業で、高校の同級生を介して友達ができた」との発言があった。

また、ほとんどの学生から、友達に会える機会が少なくストレスを感じた発言があり、なかには「大学が本当に勉強するだけの場所になってしまった」（4回生）の発言も見られた。

2　遠隔授業の進め方や教材提供の仕方はどうだったか。

⑴　昨年度に比べて良かったこと

2回生以上のほとんどの学生から、「遠隔授業の質は、去年と比べて上がっていると思う」と肯定的な意見があった。

1）授業の進め方や教材提供の仕方

- 良かった授業は「民法」。レジュメや動画がわかりやすい。倍速でも聞ける配慮もあった（3回生）。
- 良かった授業は「心理学概論」。動画や参考資料のリンクがあり、即座にクリックしてそのサイトに飛べる（4回生）。
- 「朝鮮言語文化特講」は、Moodle の「フォーラム」機能を使っている。ほかの学生の意見を見られるので、皆で話し合う雰囲気があって、良いツールだと思っている（3回生）。
- 良かった授業は「社会と人間」。コロナ禍で人に会うのが難しいなか、社会人から話を聞ける機会が貴重だった（2回生）。
- 良かった授業は「社会保障法」。授業の進め方について学生の意見を聞いてくれ、授業に反映させてくれた（4回生）。
- 良かった授業は「英語」。教員がスライドに自分の声で録音して流してくれるので、繰り返し視聴できるのが良い（4回生）。
- 同期型は、退室せず残っていたら質問できるのが良い。対面授業の時に、質問は恥ずかしい（4回生）。

2）動画教材の長さや工夫

- 適切な動画の長さについて、同じ1時間半でも、先生が内容を要約しながら課題を進めるのはやりやすかった（1回生）。
- 講義の動画時間の長さについても、工夫をしている先生がいる。全部で合

わせて1時間が1時間だったとしてもその15分ごととか、何かセクションごとに分けている。復習するときも、わかりやすい。テスト勉強の際にも、勉強しやすい（2回生）。

3）教員からのレスポンス

- 課題で授業内容の感想を書いたり質問を提出したりすると、次の回に先生から、感想に対するレスポンスがあったり、動画や必要な資料を追加して送ったりしてくれるのがよかった（4回生）。
- 学生の感想を、次回の授業でその一部を紹介してくれたのがあった。普段、自宅で1人だけで授業を受けているので、他の人のコメントを紹介してくれていると、同じようにほかの人も一緒にこの授業を受けているのだなとわかってよかった（4回生）。
- 対面でも遠隔でも、学生の感想等を取り上げて、先生がコメントを言ってくださるのがいい。他の人の考えを知ることができるので、今後も続けて欲しい（2回生）。

⑵ 次年度以降に改善してほしいこと

- 1時間半の動画を視聴した後、別な内容についてレポートを書いた。提出する授業は、動画教材と課題がリンクしておらず戸惑った、負担に感じた（1回生）。
- Moodle で連絡が来る授業と、修学支援システムで連絡がくる授業が混在していた。今年はその点が改善されることを期待したが、今年もバラバラでわかりにくい（3回生）。
- 同期型や対面授業になるかどうか直前まで連絡がこないのは困る。直前の連絡で対面や同期型であると知るものもあった（3回生）。
- 事前指導を受けないとインターンシップに参加できないと連絡が来るが、詳細が分からない（3回生）。
- インターンシップの事前指導と事後指導のあり方を見直してほしい（3回生、複数）。
- 遠隔授業の時に、授業時間までに教材が上がっていないときが困る。1週間ほど遅れたことがあり、学生からはそのことを伝えにくい。先生は期限を守ってほしい（2回生）。

３　大学に望むこと、要望など

- 大学は遠隔に切り替えるのは早いが、対面に切り替えるのは遅い。もう少し早くならないか（2回生）。
- 入学時、キャリア形成ハンドブックが配られたが、もう少し後の方が良い。内容が良いので、就活等が現実味を帯びた学年の方が役に立つ。就職支援も、オンラインの面接が増えているので、そういう情報や支援をしてくれるといい。オンライン面接用に、顔を照らすライトを使っているが、就職支援課はそういう情報を教えてくれるといい（3回生）。
- 学期のはじめに、履修状況や要卒単位についてメール等で指示があるとよい。担当教員から言われるが、やはりわかりにくい。修学支援システムや Moodle を活用できないか（4回生）。

  ※なお、教育支援課法文学部チームによれば、卒業用件確認票は学期ごとに修学支援システムから送られています。学生が見落としている可能性があります。今後、必要に応じて、先生方は学生にその旨をお伝えください（GP による追記）。
- 大学は経済的な支援だけでなく、生活上の支援も充実させてほしい。ここでいう生活上の支援は、友達を作ることができる機会を増やすような機会を増やしてほしいという意味（4回生）。

コロナ禍における法文学部の被災記録の収集と保存Ⅵ

― 2021年度学生手記の分析 ―

青木理奈・鈴木　靜・福井秀樹
小佐井良太（福岡大学法学部）・石坂晋哉・太田響子
池　貞姫・十河宏行・中川未来

1．はじめに

新型コロナウイルスの感染拡大は、大学生にどのような影響をもたらしているのだろうか。新型コロナウイルス感染蔓延は、多くの人にとって予期しえなかった深刻かつ長期にわたる未曽有の災厄である。愛媛大学も、急激な感染拡大に伴い、教育提供体制が激変して3年目を迎えようとしている。

今回の新型コロナウイルスのような全世界的規模で起きている災厄について、記録や教訓を収集、保存し、継承していけば、それは、次なる災厄への備えになるだろう。なにより、長期化するコロナ禍において、時系列で保存できるよう、継続的に記録・収集することが重要であると考えている。本プロジェクトは、未曽有の事態に際し、法文学部学生の生活上の被害実態を明らかにするとともに、法文学部の緊急時対応および遠隔授業等実施に係る記録を収集し、データベース化することを最終目的とする。これまで愛媛大学法文学部の学生を対象とし、アンケートを2020年度[1)]と2021年度[2)]に実施し、学生手記を収集・分析[3)]、座談会を開催[4)]してきた。

1）青木理奈・鈴木靜・福井秀樹・小佐井良太・石坂晋哉「コロナ禍における法文学部の被災記録の収集と保存Ⅰ―学生を対象としたアンケート調査の単純集計結果―」『愛媛大学法文学部論集』第50号（社会科学編），pp.37-68.2021年2月.

2）青木理奈・鈴木靜・福井秀樹・小佐井良太・石坂晋哉・太田響子・池貞姫・十河宏行・中川未来「コロナ禍における法文学部の被災記録の収集と保存Ⅳ―2021年度学生を対象としたアンケート調査の純集計結果―」『愛媛大学法文学部論集』第52号（社会科学編），pp.19-54.2022年2月.

3）青木理奈・鈴木靜・福井秀樹・小佐井良太・石坂晋哉「コロナ禍における法文学部の被災記録の収集と保存Ⅲ―2020年度学生手記の分析―」『愛媛大学法文学部論集』第51号（社会科学編），pp.93-111.2021年9月.

本稿は、学生たちの生の声を聞くため、手記を収集し分析した。これを通じて、コロナ禍における大学生の実態を探求し、学修状況や生活状況を理解することに努めた。そして、学生自身の細やかな心情の動き・変化が現れている部分に特に注目し、研究ノートとして一部抜粋し、その特徴を明らかにしつつコロナ禍の貴重な記録として保存することにした。

２．対象と方法

2021年10月22日～12月28日の間、愛媛大学法文学部の学生を対象に、「コロナ禍における法文学部学生の学修・生活への影響について」手記を募集した。具体的には、「コロナ禍での大学生活や日常生活を1,200字程度にまとめてください。」と依頼した。その結果、20件の手記が寄せられ、そのうち趣旨に沿う回答は19件であった。本稿では、この19件を分析対象としている。

２－１．対象者の属性

対象者の属性[5)]は、以下の表に示すとおりである。

ＩＤ	性別	2021年度学年	コース	昼夜間主の別
2	女性	3回生	法政	夜間主
3	男性	3回生	ＧＳ	昼間主
4	男性	3回生	人文	昼間主
6	女性	4回生	法政	昼間主
10	女性	2回生	法政	昼間主
11	女性	2回生	人文	昼間主
12	女性	2回生	人文	昼間主
13	男性	2回生	法政	昼間主
14	女性	3回生	法政	昼間主

4）青木理奈・鈴木靜・福井秀樹・小佐井良太・石坂晋哉「コロナ禍における法文学部の被災記録の収集と保存Ⅱ－2020年度学生座談会報告書－」『愛媛大学法文学部論集』第51号（社会科学編）, pp.117-138.2021年9月.

5）愛媛大学法文学部には、昼間主・夜間主コースがある。更に、昼間主では2回生から、3つの所属コース（法学・政策学履修コース［法政］、人文学履修コース［人文］、グローバル・スタディーズ履修コース［GS］）に分かれ、夜間主では2回生から、2つの所属コース（法学・政策学履修コース［法政］、人文学履修コース［人文］）に分かれる。なお、手記を提供した2021年12月段階では、1回生は所属コースの振り分けは行われていない。

15	女性	2回生	法政	昼間主
16	女性	3回生	ＧＳ	昼間主
18	女性	4回生	人文	昼間主
19	男性	1回生		昼間主
20	男性	2回生	ＧＳ	昼間主
21	女性	3回生	ＧＳ	昼間主
22	男性	3回生	法政	昼間主
23	男性	4回生	法政	夜間主
24	男性	4回生	法政	昼間主
25	男性	2回生	法政	昼間主

なお、ID18までの学生は、昨年度も手記を提供した学生であり、同一 ID としている。

２－２．分析方法

手記の分析を行うにあたっては、基本的にクリッペンドルフの内容分析手法（クリッペンドルフ、1989）を用いた。また、この分析手法を用いた学生のレポート分析に関する先行研究、森・大橋（2008）に多くの示唆を得ている。具体的には、以下の手順により分析を行った。

１）手記内容を文脈毎に全て抽出する。

２）文脈の内容により記録単位を作成する[6]（抽出した文脈をまとめる）。

３）類似性のある記録単位に基づき、サブカテゴリー名を付ける。

４）同様の作業（類似するサブカテゴリーをまとめ）をし、カテゴリー名を付ける。

３．倫理的配慮

調査対象者の学生には、研究の趣旨について書面による説明を行い、手記を提出した学生は研究への協力を承諾している。本稿では、プライバシーの保護のため個人名は特定されないように配慮している。

6）記録単位とは、文脈毎に抽出した文章をさらにまとめたものである。例）「授業形態が変わり、大学に行く機会がなくなった。」という文脈は、「通学頻度の減少」という記録単位とした。

４．結果の概要

本研究では、テキスト化された手記を文脈毎にまとめ、それら文脈内容により記録単位を作成した。その結果、記録単位数は371件になった。

次に、文脈内容の類似性に従って分類したところ、10個のカテゴリーに分類することができた（表1）。カテゴリーのうち、「友人関係」に関しては、大学が遠隔授業になり通学できなくなったことによる影響を記述している場合と、日常生活で外出の自粛が続いたことによる影響を記述している場合とに分けて整理した。さらに、10個のカテゴリーを類似性に基づいて3つのコアカテゴリーに分類し、それぞれ「大学生活」、「日常生活」、「その他」とした。以下、コアカテゴリーごとに分析していく。

表1　類似する記録単位から分類した10カテゴリー　N＝371件

コアカテゴリー		カテゴリー	
大学生活	194	1. 授業関係	152
		2. サークル・部活動	24
		3. 友人関係	18
日常生活	129	4. 行動面	66
		5. 友人関係	27
		6. 経済面	20
		7. 家族関係	9
		8. 体調面	7
その他	48	9. インターンシップ・就活	39
		10. 留学	9

４－１．「大学生活」に関する内容分析

表2 「大学生活」に関する内容分析結果　N＝194件

カテゴリー		サブカテゴリー		類似記録単位群	
授業関係	152	遠隔授業	107	A 授業に関する疑問・不満・改善案	46
				B 昨年度と変わらないが、慣れた	29
				C 時間や場所が自由に使えた	17
				D 自分に向いている	8
				E 授業の理解が深まった	7

授業関係		対面授業	29	A 対面が増えた	11
				B 対面が良い、対面で学習意欲がでた	7
				C 遠隔と対面の併用への不満、疑問	5
				D 遠隔の方がいい、対面への不安	3
				E 遠隔と対面、どちらも一長一短ある	3
		教員との関係	9	A 相談でき、心強い	8
				B 会ったことのない先生へ連絡するには勇気がいる	1
		昨年度の振り返り	7	A 遠隔授業でトラブルがあり慣れなかった	5
				B 精神的に不安定だった	2
サークル・部活動	24	対面活動に対する記述	17	A 計画的な活動ができない	10
				B 対面での活動が増えた、増えそうだ	7
		学生の気持ち	7	A 引継ぎ等、役割を全うしたい	4
				B 活動できないもどかしさや怒り	3
友人関係	18	友人が作れた	7	A ゼミ等の対面授業や SNS で学生同士の関わりが増えた	7
		友人が作れない	5	A 交友関係が広がっていない	5
		学生の気持ち・心情	4	A 周りの言動に嫌悪感を抱いた	3
				B 友達ができて嬉しい	1
		現実に対する記述	2	A 不安を話し合った	1
				B 学生同士の Zoom 会議等に積極的に参加した	1

「大学生活」に関しては、3個のカテゴリーと10個のサブカテゴリーに分類することができた。このうち、カテゴリーについては類似記録単位の多い順に「授業関係（152件）」、「サークル・部活動（24件）」、「友人関係（18件）」だった。

「授業関係（152件）」のサブカテゴリーの内訳は、「遠隔授業（107件）」、「対面授業（29件）」、「教員との関係（9件）」、「昨年度の振り返り（7件）」であった。類似記録単位群で最も多かったのは「授業に関する疑問・不満・改善案（46件）」であり、「昨年度と変わらないが、慣れた（29件）」、「時間や場所が自由に使えた（17件）」と続いた。遠隔授業に関して不満や改善を求める声は50件近く存在するものの、遠隔授業2年目となり慣れたためか、昨年度よりも遠隔授業に対して肯定的な意見が多く見られた。

「サークル・部活動（24件）」のサブカテゴリーの内訳は、「対面活動に関する記述（17件）」、「学生の気持ち（7件）」であった。類似記録単位で最多のものは「計画的な活動ができない（10件）」であり、次に「対面での活動が増えた、増えそうだ（7件）」が続く。学生はサークル活動・部活動の再開を求めているものの、依然として制限が課せられた中での活動を余儀なくされ、活動停止が繰り返されることに対する苛立ちがうかがえる。

「友人関係（18件）」のサブカテゴリーの内訳は、「友人が作れた（7件）」、「友人が

作れない（5件）」、「学生の気持ち・心情（4件）」、「現実に対する記述（2件）」であった。最も多かった類似記録単位は「ゼミ等の対面授業やSNSで学生同士の関わりが増えた（7件）」であり、「交友関係が広がっていない（5件）」、「周りの言動に嫌悪感を抱いた（3件）」が続いた。

４－２.「日常生活」に関する内容分析

表3　「日常生活」に関する内容分析結果　N＝129件

カテゴリー		サブカテゴリー		類似記録単位群	
行動面	66	変化あり	23	A アルバイトを始めた、増やした、資格勉強をした、忙しい	12
				B 外出・規制のためらい、不安が薄れた	6
				C 優先したいことがあるためアルバイトを辞めた、減らした	5
		学生の気持ち	22	A 生活・趣味を楽しみたい、資格に挑戦したい	11
				B まだ感染への不安や外出へのためらいがある	7
				C 他人の行動に矛盾や怒りがある	4
		デメリット	11	A 望んだ活動、帰省ができなかった	8
				B アルバイトの感染リスクが高い	3
		変化なし	5	A 不便なこともなく不満がない、家の中でも快適に過ごせている	5
		メリット	5	A 時間に縛られることなく、好きな活動ができて良かった	5
友人関係	27	交流増加・変化	12	A 友人が増えた、交流が広がった	7
				B 交流方法の変化（ゲーム、SNS、電話等）	5
		変化なし	8	A コロナ禍以前より増減なく変わっていない	8
		学生の気持ち	5	A オンラインでマナーの悪い人がいた、増えた	3
				B 大学でなくても友人は作れる	1
				C コロナ禍で友人がつくれる人を尊敬している	1
		交流減少	2	A 友人と疎遠になった	2
経済面	20	影響あり	11	A 収入がない、減少して厳しい	7
				B 大学から臨時支援金を得た	4
		影響なし	9	A 収入等安定（増加）し、困ったことはない	9
家族関係	9	コミュニケーションの増加	4	A 会話が増えた、家族との時間が増えた	4
		学生の気持ち	3	A 親へ感謝、安心感を感じる	3
		現実に対する記述	2	A 定期的に帰省・ビデオ通話などで交流をとっている	2
体調面	7	不調	4	A 精神的な変化、気分の波があった	3
				B ワクチンの副反応に苦しんだ	1
		安定	3	A 精神的に安定していた	2
				B 運動を始めて精神的に良い影響があった	1

「日常生活」に関しては、5個のカテゴリーと16個のサブカテゴリーに分類された。類似記録単位は「行動面（66件）」が群を抜いて多く、「友人関係（27件）」、「経済面（20件）」、「家族関係（9件）」、「体調面（7件）」が続いた。

「行動面（66件）」のサブカテゴリーでは、「変化あり（23件）」が最も多く、「学生の気持ち（22件）」、「デメリット（11件）」、「変化なし（5件）」、「メリット（5件）」の順に続く。最も多かった類似記録単位は「アルバイトを始めた、増やした、資格勉強をした、忙しい（12件）」であり、続いて「生活・趣味を楽しみたい、資格に挑戦したい」であり、対面授業が少ないことで生じた空き時間の活用に前向きな姿勢が目立った。

「友人関係（27件）」のサブカテゴリーの内訳は、「交流増加（12件）」、「変化なし（8件）」であり、最も多かった類似する記録単位は「コロナ禍以前より増減なく変わっていない（8件）」であり、次いで「友人が増えた、交流が広がった（7件）」、「交流方法の変化（ゲーム、SNS、電話等）（5件）」と続いた。

「経済面（20件）」のサブカテゴリーの内訳は、「影響あり（11件）」、「影響なし（9件）」、であり、最も多かった類似する記録単位は「収入等安定（増加）し、困ったことはない（9件）」で、次いで「収入がない、減少して厳しい（7件）」であった。

「家族関係（9件）」のサブカテゴリーの内訳は、「コミュニケーション増加（4件）」、「学生の気持ち（3件）」、「現実に対する記述（2件）」であり、最も多かった類似する記録単位は「会話が増えた、家族との時間が増えた（4件）」だった。

「体調面（7件）」のサブカテゴリーの内訳は、「不調（4件）」、「安定（3件）」であり、最も多かった類似する記録単位は「精神的な変化、気分の波があった（3件）」、次いで「精神的に安定していた（2件）」であったが、体調面についての記述が21件あった昨年度に比べて、全体的に自分の体調に関しての記述が少なかった。

４－３．「その他」に関する内容分析

表４　「その他」に関する内容分析結果　N ＝48件

カテゴリー		サブカテゴリー		類似記録単位群	
インターンシップ・就活	39	影響あり	16	A オンラインでの便利さ、金銭的なメリット	9
				B 活動が制限された、中止になった	4
				C オンラインになり不便、職場の雰囲気が分からない	3
		学生の気持ち	10	A 焦り、不安、戸惑い、残念な気持ち	6
				B 努力し、チャンスをつかみたいという前向きな気持ち	3
				C 上手く活動できず残念な思い	1

インターンシップ・就活		現実に対する記述	13	A 感染対策が行われた、工夫をした	4
				B 中止になったインターンシップの代替措置があった	3
				C 公務員試験や大学院受験の勉強をした	3
				D 積極的に参加した、活動した	3
留学	9	渡航中止だった	9	A 今後渡航できることを期待しつつ、渡航できない時のことも考えたい	4
				B 中止になりショック	3
				C オンライン交流会へ参加した	2

「その他」に関しては、2個のカテゴリーと4個のサブカテゴリーに分類された。類似記録単位は「インターンシップ・就活（39件）」、「留学（9件）」だった。

「インターンシップ・就活（39件）」のサブカテゴリーの内訳は、「影響あり（16件）」、「学生の気持ち（10件）」「現実に対する記述（13件）」であり、最も多かった類似する記録単位は「オンラインでの便利さ、金銭的なメリット（9件）」であった。

「留学（9件）」のサブカテゴリーは一つで、「渡航中止だった（9件）」であり、最も多かった類似する記録単位は「今後渡航できることを期待しつつ、渡航できない時のことも考えたい（4件）」とする記述だった。

５．分析と考察

今回の手記で、類似する記録単位数が最も多かったのは、「大学生活」コアカテゴリー中の「授業関係」カテゴリー（152件）であった。2020年度手記と異なる点は、2020年度手記では全員が遠隔授業について触れていたが、2021年度手記では3名の学生が授業について触れていなかったことである

１）大学生活に関する内容分析

今回の手記の「授業関係」（152件）では、対面授業になった時期もあり、遠隔と対面の両方の向き不向きに関する記述や、併用することに関する記述がみられた。

類似記録単位数が最も多かったものは、昨年度同様、授業を行う教員への不満や改善を求める意見（46件）だったものの、肯定的な記述（61件）の方が多くなったのが特徴的である。これは、学生自身が遠隔授業に慣れてきたことや、遠隔授業の特徴を活かし専門科目の理解が深まったことや、通学時間が存在しないことから自由時間を捻出しやすかったことも影響している。

互いに高めあえる、励ましあえる友人が傍にいないのは、難しい内容の授業や疲れている日々を一緒に乗り越える友人がいる場合と比べるとやはり寂しさを感じます。しかしながら、「場所又は時間を選ばない」「通学時間・準備時間の削減」には昨年同様かなりメリットを感じました。

……

昨年同様あまり人混みに行くことはありませんが、心の余裕をもって余暇を楽しむようになりました。(ID6)

私は一回生で対面が主な授業形態を体験したことがないため、現在のような遠隔が主な学習については正直なところ、特に不満に感じたことはありません。逆に、往復の通学時間がかからず、それに伴う身支度の必要もないため拘束時間が減り、自由に使える時間が増えて便利に感じています。母に資格取得を勧められていたため、自由時間を使って取得することもできました。また、講義動画を何度も見返すことが出来るのが遠隔の満足度を向上させています。大学の講義は難易度が高く、憲法などの講義は何度も見返したり一時停止して学習したかったので、遠隔はその需要を満たしてくれ、困ることはありませんでした。(ID19)

前年と比べて PC やオンライン授業の受講方法に慣れ、自分のキャパシティが超えないように調節しながら受講ができているので、課題に追われることもなく安心して授業を進められていると思います。(ID15)

対面授業の再開を待ち望んでいた学生は、対面授業へ移行したことにより、学習意欲が高まったと実感している様子である。

対面の感想を述べるなら、まず感じたのが、教員との無言の意思疎通の重要性だ。それは、講義の中でわからない単語が出た時、受講者全体が声を出したりはしないが、少し雰囲気が変わり、少しして教員がその雰囲気を感じ取り、その単語の解説が始まる。といったものであり、この意思疎通は、Zoom の講義ではなかなか発生しないものであり、チャットなどで送っても、気づかれるのに時間を要してしまう。もうひとつ感じたことは、音である。Zoom などの講義で聞こえる音はイヤホンをしていることもあって自分の周りの微かな音と、Zoom での発言者によるものだけである。しかし、対面では、同じ講義を履修している人たちから発せられる字を書く音や、教科書などをめくる音が聞こえてくる。この音から生まれる一体感は、遠隔では得られない学習意欲をそそる。この2つの要素は、遠隔の講義で決して感じられるものではなく、対面によってしか得られない、学習にとって貴重かつ重要なものだと思う。(ID13)

一方で、遠隔授業と対面授業のそれぞれ長所、短所に気づき、対面授業の再開後も遠隔授業も継続してほしいとの希望を示す記述も見られた。

遠隔2年間という時間を過ごし、遠隔も対面も一長一短で、現時点ではどちらの方がいいとは言い切れないと感じました。(ID2)

個人的には、遠隔非同期型の授業が多かったのはむしろ良かったと感じている。興味のある講義をとりたいが公務員講座が夜の時間帯にあり、またアルバイトや勉強の時間を確保する必要があった身としては自分のペースで学習ができるのはありがたいものだった。だが、対面授業が無かったほうがいいのかと言えばそうではなく、友人と会い話す機会にもなることから対面授業がいくつかあったことも良いことだったと思う。(ID14)

オンラインだからこそよりよくなる授業は相変わらず楽しく受けています。例えば、学生同士の意見交換の場では匿名だからこそ正直な本音が言えたり、攻めた発言も出来るので、顔も名前も見えないこの授業形態での醍醐味だと思います。

ですがやはり、非同期だとリアルタイムでの意見交換が出来なかったり、提出日を見逃して課題が提出できなかったり、伝えたい事がうまく伝わっていなかったりなどの失敗が多いと感じるので、ほとんどの授業は対面で行う方が良いだろうなと思います。

……

今年の第4Q から全面対面授業になるとのお知らせがきましたが、半分楽しみ、半分不安です。対面授業になると授業の面白さも増すと思いますが、今まで自由に使えていた時間が突然拘束されるようになるので、タイムマネジメントに力を入れて、精神的にも身体的にも過ごしやすいスケジュールを組む必要があると強く感じます。(ID12)

大学に通いながらも、実家で授業を受けることができることに、この上ない便利さを感じた。コロナ禍以前は考えられなかったことだ。これから実現することはないかもしれないが、学生が遠隔か対面かを選択できる授業が増えれば、より快適な日常生活を送ることができると思う。(ID22)

さらに、遠隔授業の後、対面授業だった場合など、通学・移動時間が入ることによる弊害を記述する学生もおり、遠隔授業と対面授業の併用の課題が指摘された。

後期はバイトとサークルの予定にオンライン授業と対面授業の移動時間や準備時間が加わって、前期よりかなり忙しくなったように感じました。学内に設置されている自習室を利用するほど時間が切羽詰まっているわけではなく、20分では少し間に合わないな、と感じることがよくありました。(ID15)

対面式と遠隔式が並行して行われているので、大学内で遠隔授業を受けなければ、講義に間に合わないという人もいるのではないかと思う。(ID24)

「サークル・部活動」に関しては、少しずつ対面での活動が出来るようになったことの喜びと充実した気持ちの記述が書かれている一方で、計画していた活動が変更を余儀なくされることへのもどかしさや強い憤りを表す記述が見られた。

2回生になって規制が少し緩和した今、サークルのある日には積極的に参加するようにしています。運動をする機会が出来て健康的な生活を送れるようになり、先輩や後輩との交流も増えました。昨年は外出自粛でずっと家に閉じこもっていたので、家の外でたくさんの人とスポーツができるということが嬉しくて、サークル活動が再開してからはかなり充実した生活が送れていると思っています。(ID12)

サークル活動に関して、強化練習や合奏が終わった後のモチベーションが上がっている時に限ってサークル活動が禁止されたり、学内・学外の活動に学生生活支援課から許可が下りず断念した活動がいくつかあり、仕方のないことではありますが「タイミング悪いな」と思うことが何度かありました。サークル活動に限ったことではありませんが、以前、学長から「愛媛県では感染拡大は抑えられていますが、東京では感染が急増している」といったコメントがあり、東京や東京周辺から来ている学生がいることも理解していますが、東京都で感染拡大しているから愛媛県でもあらゆる活動を禁止するといった内容だったので、「そんなことを言っていてはいつまでも活動を全面再開できないのではないか」と不安に感じました。(ID15)

新入生歓迎が思うようにいかず、主に歓迎シーズンとなる期間にはビラの配布が禁止された（今、活動再開になってもこのビラの配布についてはブース以外の措置は行われておらず、ビラの余りについて考えているところである）。●●部の部長として何ができるか考えた際に多くの zoom 説明会を開催し、大学内や大学外の機関が開催する部活動紹介に参加し、また (最終的に2回の開催だったが) 見学者を交えた大学構内●●会を行うなどをしたが、今となってはこれらが正解だったのかどうか分からない。今も、部活動の課題はある。書面上は●●●●●●●●に行くことができるようにはなっているが感染対策が本当にできるのか疑問で実施はしていない。また、他の部活動との連携は難しく、●●●●も請け負いづらいところがある。

ちなみに、指定地域に行ったにもかかわらず待機無しで部活動を行った人間に対しては我々学生団体が一時停止という影響を受けたため恨んでいるところもある。(ID14)

私は入学前から●●部に入部することを決めており、入学早々入部したのですが、練習ができず、体が動かせず、歯がゆかったです。さらに、新歓がなかったことが大きく響きました。自分が入部できても同回生の人が入部せず、結局、友達ができないといった状況でした。(ID25)

特筆すべきは、サークル・部活動の活動が2年間中止されたため、活動ができないまま後輩へ引き継ぎせざるを得なかった学生の心情についてである。学生自身が活動出来なかった戸惑いを持ちつつ、後輩へと活動をスムーズに引き継ぎたいとの前向きな気持ちが記述されていた。

サークルは昨年から●●●ボランティアに所属しています。

……

コロナ前の活動が●●●●など実際に現地に行かなければできない事だったため入学当初から本格的な活動を行うことはできませんでしたが、これからは本来の活動を行うことができそうです。しかし、●●●ボランティアの実働メンバーは1、2回生であるため、活動内容の引継ぎが課題となっています。今年は例外として3回生の先輩が実働メンバーに残って下さいましたが、1、2回生が未だに本来の活動を行っていないため、来年への引継ぎが上手くいくように積極的に活動したいと考えています。(ID11)

サークル活動に関しては、依然として厳しい活動制限を設けられており、対面活動を再開するための複数の書類を何度も提出しているが、次の段階に円滑に進むことができていないのが現状だ。私たち3回生の活動期間が有限であることを踏まえて、今後も活動していく後輩たちがスムーズに活動に取り組めるよう自分の果たすべき役割を全うしたい。(ID21)

大学生活での「友人関係」については、昨年度に比べ対面授業を通じて学生同士の関わりも増えたことを喜ぶ記述が目立った。なかには、いまだ交友関係が広がっていない学生もいたものの、昨年度のような不安で孤独な気持ちを吐露する深刻な様子は見られなかった。

一方で、友人や他の学生の態度に否定的な記述も見られた。対面での交流が増えたことにより、直接顔を突き合わせることができる人間関係の中での反応とも言えるのではないか。また、コロナ禍をきっかけに、SNS を含む交流方法が多様化してきている。そのような中で、SNS での発言を含め、他人の言動に苦言を呈しているのかもしれないことを想像すると、コミュニケーションの難しさを感じる一面でもあるように思われる。こうした学生心理については、今後も継続的に検討していきたい。

ゼミに関しては、去年は一年を通して2、3回しか同級生らと顔を合わせる機会が無かったが、今年の第3クォーターは大学側で対面授業の規制緩和がなされ、毎回対面で授業を受けた。私にとってはゼミが唯一の対面授業であったため、水曜日はなんだか特別な曜日だった。全ゼミ生での顔合わせも夏に実施され、同期のゼミ生とはほぼ毎週会っているため去年よりも距離が縮まり、授業前に世間話をするまでになった。ゼミならではの交友関係を築くことができ非常に嬉しい。(ID21)

講義や大学生活に文句ばかり言うにもかかわらず自分では行動を積極的にしようとせず、また講義の課題を出し忘れるにもかかわらず締め切りに文句を言うなどの人がいた。友人ができにくいことは承知の上だが、全く人と関わろうとしないにもかかわらず「友人ができない」と言われても正直困る…と思うし、講義にも先生の人間性はあることは分かるが、自分の我儘だけが通用する世間ではないとも思う。(ID14)

2)「日常生活」に関する内容分析

「日常生活」に関する記述では、「行動面」(66件)のうち、類似記録単位は「アルバイトを始めた、増やした、資格勉強をした、忙しい(12件)」が最多であり、「生活・趣味を楽しみたい、資格に挑戦したい(11件)」が続く。遠隔授業、主に非同期

（オンデマンド）型授業の実施により、学習する時間帯を自ら設定できるため、授業以外の自由になった時間が増え、資格の勉強をしたり、アルバイトを始めたり、旅行などの趣味を楽しんだり、自身の成長のための挑戦を試みるなどの記述が増えた。アルバイトの開始が本来求められる授業内容の理解を妨げることになっていないかなどの懸念はあるが、総じて学生は大学生活以外においても、前向きな姿勢を持ちつつあると評価できる。

授業が非同期だと時間を自由に使えるので、その時間でアルバイトをたくさんしました。授業があると絶対できないような時間帯のバイトなど、非同期ならではの貴重な体験がたくさんできて、アルバイト先で友達もたくさん増えて、他大学の人たちとの交流も出来ました。（ID12）

まだまだこれからもコロナとの生活は続くと思われるし、オミクロンなる型も現れていると聞く。ただ、緩和はされつつあり当初のころよりは動きやすくなっているのもまた事実であるから、私の趣味である「食」や「旅行」も含めて節度を保ちつつ生活していきたいと思う。（ID14）

今後、with コロナの時代の中で成長が出来る人は逆境をチャンスと捉えて努力することが出来る人だと思うため、私も、今の私にできることをじっくりと考えながら挑戦を続けたい。（ID16）

一方で、一部の学生からは、望んでいる活動が出来なかったことへの記述や、自治体等による感染拡大防止対策の緩和が行われたものの、自身への感染の不安から外出をためらう心境や、アルバイト先での感染リスクへの不安、家族の事情等により行動を自粛せざるをえない状況に対して腹立たしさや矛盾を感じている学生も複数存在していた。

コロナの感染者に関して、私は大学生よりも社会人が飲み歩いているせいで感染者数が増えているような印象があったので、身勝手な大人のせいで、なぜ大学生がここまで活動制限されなければならないのだろうと、腹立たしい気持ちになった時期もあります。また、小、中、高、社会人はとっくに対面に移行しているのに、いつまでたっても大学はオンラインが基本で、なんだかなとも、今年の夏あたりは思っていました。（ID2）

私は、温泉施設の清掃アルバイトをしていた。コロナ禍になったことで、不特定多数の人間が裸になって集まる場所で働くことに、少し不安はあった。マスクもしていない客が使い終えたタオルを無防備に触るのは、正直、気持ち悪いと感じていた。会社からは気休めにもならない程度の消毒液が1回だけ配られた。これでは、いつ感染したとしても仕方がない環境であると感じていた。こうしたことは私に限ったことではなく、多くの大学生は、アルバイトとして感染リスクの高い場所で働くことを余儀なくされていると思う。大学での感染リスクは下がったのに、日常生活での感染リスクはむしろ上がったかもしれない。(ID22)

両親に関しては、二人とも医療従事者なのだが、特に母親に関しては去年同様同居家族以外との食事禁止の規制を引き続き課されているため、それに対して自分が友人との食事会に参加するのを躊躇う気持ちが現在ある。(ID21)

日常生活での「友人関係」について、昨年と友人数や付き合いの程度について「増減なく変わっていない（8件）」旨の記述が最多であったが、「友人が増えた、交流が広がったという記述も同程度（7件）」の件数が見られた。また興味深い記述として、「友人との交流が接触しない交流方法に変化した（5件）」との記述が複数見られた。

学校の外でたくさん友達ができ、コミュニティがどんどん広がっていきました。一番大きかったのはアルバイトです。授業が非同期だと時間を自由に使えるので、その時間でアルバイトをたくさんしました。授業があると絶対できないような時間帯のバイトなど、非同期ならではの貴重な体験がたくさんできて、アルバイト先で友達もたくさん増えて、他大学の人たちとの交流も出来ました。(ID12)

今年の新入生は Twitter や Instagram で交流を図ろうとする学生が昨年度以上に多かったと感じている。(ID14)

実家に帰ったときは必ず地元の友達と遊ぶのですがそれができなくなり、友達との距離が遠くなった気がしました。その分逆に、電話をすることが多くなりました。オンラインのゲームをいっしょにやりながらや、お酒を飲みながらなど携帯を使って遊ぶことが多かったです。大学での友達とも、コロナ禍以前はカラオケや居酒屋などで遊んでいたのですが、そのような遊びはできなくなり、地元の友達同様に電話をすることが多くなりました。(ID23)

経済面では、アルバイト等で収入が安定している学生がいる一方で、昨年度に引き続き経済的に厳しい生活をしている学生もおり、臨時奨学金や愛媛大学が行っている「学生等の学びを継続するための緊急給付金」を取得することで、就職活動や資格取得のための資金に役立てている旨の記述がみられた。

> 去年と同様苦しい状況を強いられたように思います。両親共働きではあるものの、父親は自営業、母親は契約社員と基本的に収入が安定しているわけでもないため、時には平均月収を下回ってしまうこともございました。
> ……
> 私は新たに塾のアルバイトを始めることができました。理由としては私が英語を教えたいとかねてより思っていたためです。実は以前から塾講師のアルバイトを探してはいたのですが、実際問題コロナ禍によって塾講師が飽和状態にあったため、今年の9月まで約半年間無職の状態でした。
> ……
> 私は5万円の臨時奨学金もいただけたため、ありがたく就職活動に利用させていただいております。(ID3)

> 8月に新型コロナウイルス感染症対策緊急支援金として5万円給付して頂き、来月も再度5万円の給付をして頂くことが決定している。この支援金を活用させて頂き、資格取得のための資金に充てることが出来た。新型コロナウイルスの影響でアルバイトの収入が減少したため、目標としていた資格の取得は諦めていたが、大学からの支援を受けることが出来たため、資格試験に挑戦することが出来、この一年間で、二つの資格を取得することが出来た。(ID16)

家族関係では、家族との交流が深まったとの記述が複数見られた。具体的には、家族との会話が増えたことや、帰省が可能になったこと、帰省できない時もビデオ通話を通じて交流していること、そして両親への感謝が書かれているものもあり、肯定的な記述が目立った。

> GW やお盆、長期休みには実家に帰っている。また、愛媛にいるときは1週間に1、2回ビデオ電話をしている。一人暮らしを始めて、その日何があったかなど、親に色々話していたんだなと気づいた。実家に帰った日は、自分でもこんなにお喋りだったっけと思うくらい、ずっと何か話している。(ID10)

これまでのコロナ禍を振り返ってみると、コロナ前に比べて家族との時間が確保出来たり、ゆっくり今後の人生について考える時間を取れたり、めまぐるしく時間が過ぎていた時には得られなかった時間を得ることが出来ている。コロナ禍は、自分の人生の歩みのスピードを少し緩めて、自分自身を改めて考え直すことが出来る良い機会にもなったと思う。**(ID16)**

「体調面」（7件）については、記述が21件あった昨年度に比べて、約3分の1に減少している。全体的に学生自身の体調に関しての記述が減少している。これらは何を意味するのか。2020年度の手記では、感染拡大に伴う緊急事態宣言の発令による自粛生活の推奨、自粛の一部解除が繰り返されたことにより、心身ともに体調を崩しがちになる旨の記述が多く、なかには「昼間の飲酒」にも言及している学生が存在した。今回（2021年度）の手記では、体調が良いとか回復していると書かれているわけでなく、体調に関しての記述が、ほぼみられない。コロナ禍での制約を伴う生活が2年目を迎え、ある程度、諦めの思いもあってか、これを受け入れているのかもしれない。そして、記述されていた体調面で、今回新たに加わったことは、ワクチン接種による副反応に関する記述だった。ある学生の手記では、書かれた手記の大部分がワクチン接種についての内容だった。

2回目は前回の通りスムーズに接種を終えることができ、接種当日は全く副反応が出ませんでした。いつも通りに就寝したのですが、翌朝5時頃、あまりの頭痛で目が覚めました。スマホの画面を見るのもしんどくて、時刻を確認するのが精一杯でした。枕元に飲み物と体温計と洗面器を用意しておかなかったことを後悔しました。10時までの5時間程、39度後半から熱がずっと下がらず、死にそうな思いで耐えました。時には40度を超え、渇きと頭痛で酷い有様でした。声もなかなか出せず、早朝だったので家族に呼びかけるのも辛くて、やっと水を持ってきてもらえたのは6時頃でした。自宅生だったので家族の手が借りられましたが、これが一人暮らしだったらと思うとぞっとします。朝食におかゆとコーンスープと林檎を持ってきてもらったのですが、計6回に分けて睡眠を挟みつつ、3時間ほどかけて食べました。あまりの頭痛とだるさと息苦しさとで、お手洗いに立つのも眠りにつくのも至難の業でしたが、極力寝るよう努めました。10時を過ぎて38度台に落ち着いてからは一気に楽になりました。頭痛やだるさは残っていましたが、それ以前が地獄のようだったので随分ましでした。**(ID18)**

３）「その他」に関する内容分析

「インターンシップ・就活」に関しては、オンラインでの就職面接等の便利さや、自宅で受けられるために交通費がかからないと経済的な利点を書いている者がいる一方で、諸活動が制限されたことにより、インターンシップ先の企業の雰囲気がわから

ないままだった無念さや、目前に迫る就職活動への不安が書かれているものが見られた。

> 就職活動面については、私としては逆に追い風の影響を受けたように思います。というのも、私が一番有利であると感じたのは Web 形式の説明会やセミナー、面接などが主流となったことで、わざわざ遠方まで行かずに就職活動が完結するようになったということです。こうしたコストパフォーマンスの高い就職活動が可能となったことで、都会や地方関係なく有益な情報にアクセスすることができ、その差をある程度は埋めることができたように思います。もちろん対面形式のインターンシップへの参加に関しては少々難儀ですが、オンラインで就職活動が完結することから移動にお金がかからないため、その分ここぞというタイミングで就職活動にお金が使えるというのはかなりポジティブな点であると認識しております。(ID3)

> この夏、二つの企業の対面インターンシップへの参加を予定していた。しかし急激な感染者数増加に伴い、大学の方から対面のインターンシップへの参加を自粛するように指示が出された。代替措置として Web インターンシップを実施してくれた企業もあったためそのおかげで参加できた企業もあったが、対面のインターンシップに比べ活動内容が制限されたり、企業によっては参加自体が難しかったりしたため、円滑に就職活動を進めることは出来なかった。また、企業の方と直接顔を合わせることも出来ず、実際の職場の雰囲気等を知ることも難しかった。(ID16)

留学については、国内外の感染状況の深刻さから、実現は困難であるとの認識が大きかったのか、渡航の目途が立たない事実を受け入れ、他のことにも挑戦しようとしている姿勢が見受けられた。

> 国外との交流という面ではとても不便なのではないかと推測される。こういった移動の制限とは反対に、グローバル化はますます進んでいて、私達はこれからどのように経済活動を行うのかということを考えざるを得ないし、それを踏まえた上で身の振り方を決める必要があると痛感している。(ID4)

コロナウイルスによって留学や海外渡航が中止になりました。そのため海外の大学との交流がオンラインで行われるようになったため、私は海外の大学生と繋がるために学部内でのオンライン交流会などに積極的に参加するようになりました。しかしながら、オンラインと対面での交流では対面での留学の方が楽しいような気がしました。もちろん海外の人と交流することはとても楽しくて、さらに留学や海外渡航をしたいという気持ちが高まりました。(ID20)

6．今後の課題

本研究は、コロナ禍の学生生活を理解するために、愛媛大学法文学部学生によって書かれた手記を分析したものである。分析対象とした手記は、法文学部全学生のわずかな数に過ぎず、また、時々刻々と変化する状況で、1年間を通じて学生のプロセスや変化を捉えることはできていない。また、手記を寄せてくれる学生は、元々、「積極的・活動的・前向き」な学生である可能性も否定できない。さらに、「積極的・活動的・前向き」でなければならないという、ある種の「過剰適応」が起きていないかどうか、公表は匿名であるものの、所属学部へ提供することに対して、他者評価を気にしている場合も留意しておく必要があるかもしれない。

上記を考慮しても、総じて分析対象とした手記からは、コロナ禍でも、葛藤しつつもたくましく、またしなやかに、さらに試行錯誤しながら、大学生活を過ごしている学生の経験や思い等が浮かび上がってくる。そして、その一部を整理しこの場で公表できたことは、意義あることであると自負している。とりわけ、昨年度と比較することにより、学生の気持ちや行動の変化を把握することができたと考えている。

振返ると、新型コロナウイルス感染症の蔓延が始まった2020年度は、講義のほとんどをオンライン（遠隔授業）で行わざるを得ず、学生も教職員も新たな授業形態に戸惑い続けた一年であった。学生にとっては、遠隔授業により学ぶこと自体が大きなストレスであり、遠隔授業の長期化とともに、友達らと交流機会を持てないなかで孤独感を強めて行ったことが、手記のなかで辛い出来事として記述されていた。

本稿でとりあげた2021年度の手記では、コロナ禍での学生生活は2年目を迎え、新たな授業形態に慣れてきたこと、遠隔授業の非同期型授業のコンテンツの質の改善、さらに対面授業も時期によっては再開したこともあり、大学生活全般にわたって肯定的な内容も目立つようになった。2022年2月に実施した学生座談会でも、対面授業を希望する声とともに、好きな時間に自分のペースで学ぶことを可能とする非同期（オンデマンド）型授業の「快適さ」を訴える声や、今後も継続を求める声が一定数見ら

れた[7)]。これらは手記と座談会の発言に共通することで、今年度の特徴は、趣味や資格を取るための勉強等、大学の授業以外のことに目を向ける時間と気持ちの余裕が学生に感じられることである。しかし、法文学部全体の中ではこのような前向きな方向に転じられていない学生もいることを心に留めておく必要もあるだろう。それと同時に、このような学生の声が、対面授業への回帰が進む中でどのように変化していくのか。今後も継続的に調査を行い、学生の様々な意識や行動の変化を把握していきたい。

謝辞

手記を寄せてくれた法文学部学生の方々ならびに手記募集に携わって頂きました法文学部の教員に感謝の意を表します。また、この研究は、令和3年度法文学部戦略経費、令和3年度愛媛大学教育改革促進事業（愛大教育改革 GP）及び JSPS 科研費19K21723の助成金交付により遂行されたものです。

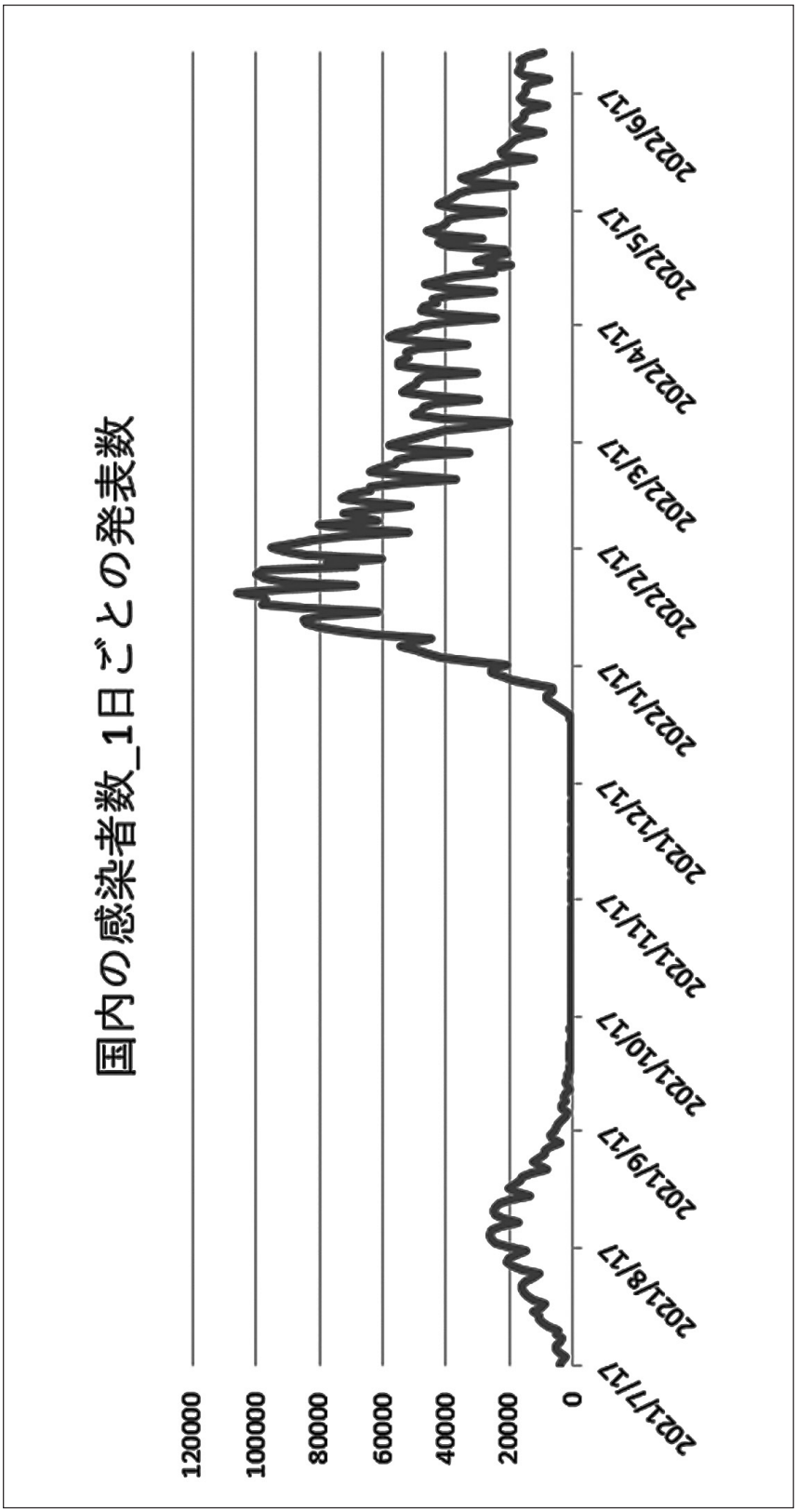
参考文献

1）クリッペンドルフ（1989）『メッセージ分析の技法：「内容分析」への招待』（三上俊治・椎野信雄・橋元良明訳）勁草書房 .

2）森ウメ子，大橋千栄子（2008）「手記から学ぶ病児の理解ー学生の読後感レポートからの分析ー」，『太成学院大学紀要』10,121–131.

7）青木理奈・鈴木靜・福井秀樹・小佐井良太・石坂晋哉・太田響子・池貞姫・十河宏行・中川未来「コロナ禍における法文学部の被災記録の収集と保存Ｖ－2021年度座談会報告書－」『愛媛大学法文学部論集』第53号（社会科学編）, pp.133-150. 2022年9月.

付録：図Ａ　国内の感染者数　1日ごとの発表数（NHK まとめ）
国内の感染者数 1日ごとの発表数（NHK まとめ）（2022年6月28日閲覧）
出所：https://www3.nhk.or.jp/n-data/opendata/coronavirus/nhk_news_covid19_domestic_daily_data.csv



コロナ禍における法文学部の被災記録の収集と保存Ⅶ

― 2022年度学生を対象としたアンケート調査の単純集計結果 ―

Collection and Preservation of Records of Disaster Experiences of Students, Faculty and Staff in the Faculty of Law and Letters, Ehime University during the Coronavirus Pandemic（Ⅶ）: A summary statistics of a questionnaire survey of students in Academic Year 2022–23

青木理奈・鈴木　靜・福井秀樹
小佐井良太（福岡大学法学部）・石坂晋哉・太田響子
池　貞姫・十河宏行・中川未来

１．はじめに

2020年度から、本プロジェクトでは新型コロナウイルスの感染拡大に伴う愛媛大学法文学生への影響について、アンケート等を通じて具体的な被害や葛藤、適応するプロセスの一端を明らかにしてきた。2022年11月末現在、新型コロナウイルス感染症蔓延は収束の兆しを見せていない。しかし全国的にも大学のコロナ禍対応は、大きな変化を迎えている。愛媛大学も同様であり、2022年4月から原則対面による授業に切り替えられている。

コロナ禍前の教育提供体制に戻りつつあるとはいえ、コロナ禍以前にはなかったストレスを抱えて生活していることが推測される。たとえば、学生らは教室ではマスクを着用し、1日に何度も手指消毒を行い、教室の換気を常に気にせざるを得ない。何より2年間にわたる遠隔授業から原則対面授業への切り替えは、学生にとっては生活サイクルの激変を意味する。通学時間が増えること、授業時間は高校までに比べ長時間であり、慣れるまでは集中力を保持し、理解すること自体がストレスになることも考えられる。また専門演習等では、他の学生と議論すること等も経験が求められるこ

とであり、慣れるまではストレスを感じるかもしれない。入学以降に遠隔授業しか経験してこなかった学生には、原則として対面授業への切り替えは、喜ばしいことばかりではなく、不安や葛藤、新たなストレスを抱えることになっていると推測される。

こうした影響や変化に着目し、本プロジェクトは今年度も愛媛大学法文学部学生を対象とし、アンケート調査を実施した。そもそも本プロジェクトは、今回の新型コロナウイルスのような全世界的規模で起きている災厄について、記録や教訓を収集、保存し、継承していくことを目的としている。今回のような長期化するコロナ禍において、時系列で保存し、継続的に記録・収集することが重要であると考えている。これまで愛媛大学法文学部の学生を対象とし、アンケートを2020年度①と2021年度②に実施し、学生手記も2年間分収集・分析③④、さらに座談会⑤⑥も2年間開催してきた。

本調査では、コロナ禍における大学生の実態を継続的に探求し、今年度の学修状況や生活状況への影響を把握することを目的とする。そして、今年度のコロナ禍における学生生活の記録として保存し、その一部につき公表する。

２．新型コロナウイルス感染対策期における愛媛大学法文学部での授業実施について

⑴　愛媛県における新型コロナウイルス感染状況と愛媛大学の対応

実質的には「新型コロナ3年目」となった2022年度は、新型コロナウイルス対策の特別措置法に基づく緊急事態宣言が発令されることはなかったものの、夏頃には全国的に「オミクロン株」の大流行が見られた。愛媛県においても、かつてない感染者数を数え、保健・医療体制のひっ迫を回避するため引き続き県独自の警戒態勢がとられるなど、依然として予断を許さない状況が続いた。一方で、「ウィズコロナ」の日常生活という観点から、それまでの2年間と比べ県民の行動制限は緩められる傾向も見られた。

愛媛大学のBCP（事業継続計画）ステージは、令和4（2022）年1月14日に「ライトイエロー」から「オレンジ」に引き上げられたが、6月23日に「ライトイエロー」に引き下げられた（2022年11月25日現在）[1)]。この間、愛媛大学では2022年4月～6月に学生・教職員等に対するワクチンの職域追加接種（3回目）が実施された[2)]。

1）愛媛大学関係者のコロナウイルス感染者数（累計）は、令和4（2022）年11月20日までに学生等1,175人、教職員507人、合計1,682人であると公表されている。

2）また、国の事業として、新型コロナウイルス感染症の影響で困窮する学生等を支援するため創設された「学生等の学びを継続するための緊急給付金」の募集（給付額10万円）が実施された（申請不要分：令和3年12月10日支給、第1次申請締切：令和4年1月12日、第2次申請締切：令和4年2月16日）。

⑵　愛媛大学法文学部の学生数

2022年11月現在の愛媛大学法文学部の学部生数、大学院生数は、以下のとおりである。学部生合計は1,608人、大学院生数は34人である。学部生の内訳は、昼間主法学・政策学履修コースが337人、昼間主人文学履修コースが366人、夜間主法学・政策学履修コースが147人、夜間主人文学履修コースが182人、グローバルスタディーズ履修コースが190人（昼間主のみ）であり、改組前の旧総合政策学科の昼間主が1人、夜間主が1人、昼間主人文学科が1人である。大学院生の内訳は、人文社会科学研究科院生が31人、改組前の法文学研究科院生が3人である。学部生と院生のうち、留学生は18人である。

⑶　愛媛大学法文学部における授業実施状況

愛媛大学法文学部は、2020年度前学期の第1クォーター期間から第2クォーター期間の授業形態は、遠隔授業を実施し、対面授業は行わなかった。2020年度後学期の第3クォーター期間から第4クォーター期間の授業形態は、対面授業を可能な限り開講するとともに、遠隔授業も実施された。

2021年度前学期の第1クォーター期間から第2クォーター期間の授業形態は、「遠隔授業を積極的に行いつつも、感染防御対策を徹底しながら、対面授業も可能な限り開講」することとしていたが、4月22日から「（特例的な授業を除き）遠隔授業のみ」に変更された。この結果、演習系科目を中心に対面授業とし、段階的に講義系科目も対面授業に拡大した。後学期の第3クォーター期間（9月24日～12月3日）は「遠隔授業を基本とするが、徹底した感染防御対策のもと対面授業も可能な限り開講」とされ、第4クォーター期間（12月4日～3月31日）は「徹底した感染防御対策のもと対面授業を実施」した。

2022年度前学期からは、一部（共通教育「学問分野別科目」）を除き、原則対面授業となっている。

３．対象と方法

本アンケート調査の対象者は、法文学部の学生であり、調査期間は、2022年10月20日～11月7日である。

調査方法は、インターネットでの無記名自記式アンケートを採用した。プロジェクトに所属する教員から学生へ周知するとともに、教育支援課法文学部チームから法文学部の学生へ一斉送信による周知を行った。集まった回答は、590人であった。重複回答は0件であり、590人のデータ全てが有効回答であった。

アンケート内容は、⑴ 回答者の属性について7項目、⑵ 対面及び遠隔授業においての学修面が13項目、⑶ フィールドワークや、部活・サークル等の課外活動面1項目、⑷ 長期化するコロナ禍での生活面が7項目、合計28項目から構成されている。アンケートの回答は必須とする選択方式の項目と、必須ではない自由記述の項目を作成した。また、今年度は2020年度から継続している法文学部の調査項目及び、新型コロナウイルス感染症の大学生への影響に関するアンケート調査結果（Murta and Orito, 2022）を参考にしつつ、社会共創学部の研究プロジェクト組織との共同で質問票を設計し、調査を実施した[3)]。アンケートを資料1に示す。

４．倫理的配慮

本調査において、対象者に対する倫理的配慮を以下のようにした。

⑴　不必要な負荷や負担への配慮：回答は任意でありかつ匿名である。対象者に不必要な負荷や負担は生じない。

⑵　個人のプライバシー保護への配慮：匿名で回答する。アンケート結果についても守秘義務を厳守し、個人のプライバシーを厳重に保護する。

⑶　協力拒否への不利益への配慮：回答は任意であり、回答後に対象者が回答内容について削除を求めた場合には、即座に応じる。協力拒否への不利益は生じない。

⑷　調査協力への理解や同意：担当教員からの説明およびアンケート冒頭に調査協力への理解を求める。

その他、アンケート作成において、個人情報が含まれないようにした。参加者には調査の趣旨が十分伝わるように冒頭に説明を書いた上で、参加は任意であることを説明し、アンケートに回答し送信された時点で同意とした。

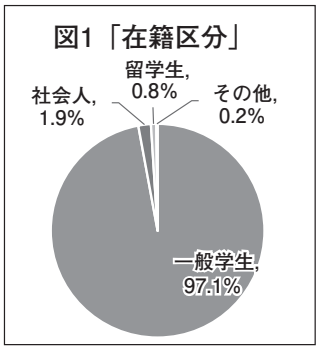
５．結　果

本調査は、⑴ 回答者の属性、⑵ 学修面について、⑶ 課外活動面について、⑷ 生活面について、学生の状況を把握した。

3）同時期に愛媛大学社会共創学部でも同様のアンケート調査が行われており、その結果は折戸ら（2023）に公表予定である。

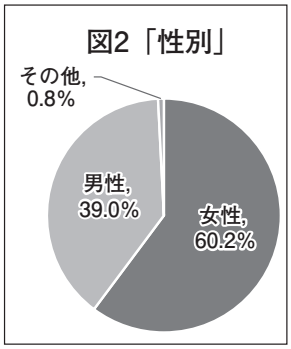
⑴　回答者の属性

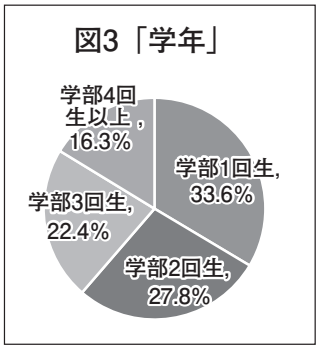
1）回答者590人の在籍区分（身分）は、「一般学生」573人（97.1％）、「社会人」11人（1.9％）、「留学生」5人（0.8％）、「その他」1人（0.2％）である（図1）。



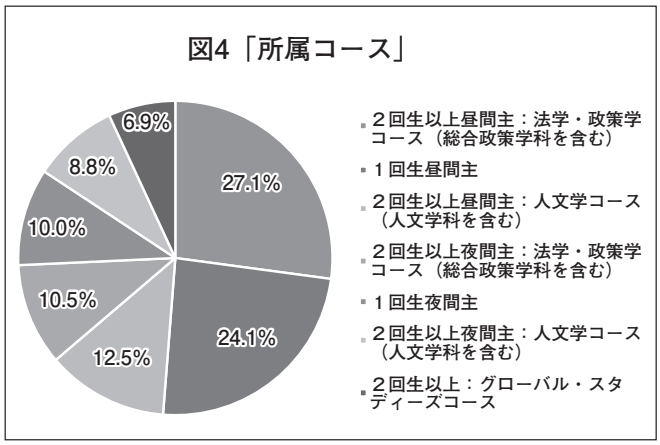
2）性別は、「男性」230人（39.0％）、「女性」355人（60.2％）、「その他」5人（0.8％）である（図2）。

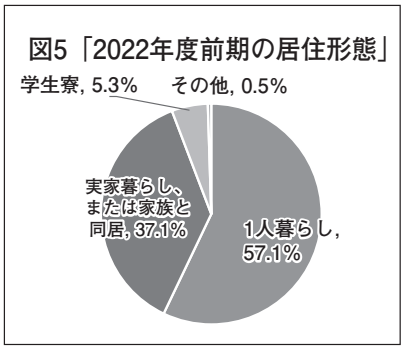
3）学年は、「学部1回生」198人（33.6％）、「学部2回生」164人（27.8％）、「学部3回生」132人（22.4％）、「学部4回生以上」96人（16.3％）、「大学院1回生」0人、「大学院2回生以上」0人である（図3）。





4）所属コースは、「1回生昼間主」142人（24.1％）、「1回生夜間主」59人（10.0％）、「2回生以上昼間主：法学・政策学履修コース（総合政策学科を含む）」160人（27.1％）、「2回生以上夜間主：法学・政策学履修コース（総合政策学科を含む）」62人（10.5％）、「2回生以上昼間主：人文学履修コース（人文学科を含む）」74人（12.5％）、「2回生以上夜間主：人文学履修コース（人文学科を含む）」52人（8.8％）、「昼間主：グローバル・スタディーズ履修コース」41人（6.9％）である（図4）。

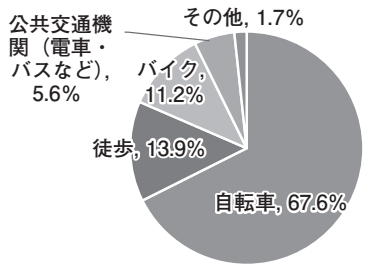




5）2022年度前期の居住形態は、「1人暮らし」337人（57.1％）、「実家暮らし、または家族と同居」219人（37.1％）、「学生寮」31人（5.3％）、「その他」3人（0.5％）である（図5）。

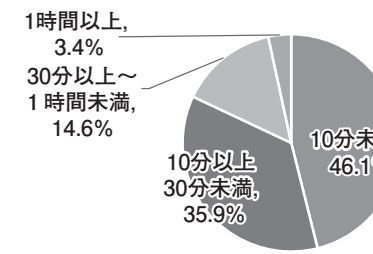
6）最もよく利用する通学の手段は、「公共交通機関（電車・バスなど）」33人（5.6％）、「徒歩」82人（13.9％）、「自転車」399人（67.6％）、「バイク」66人（11.2％）、「その他」10人（1.7％）である（図6）。

図6「最もよく利用する通学の手段」



7）片道の通学時間は、「10分未満」272人（46.1％）、「10分以上30分未満」212人（35.9％）、「30分以上～1時間未満」86人（14.6％）、「1時間以上」20人（3.4％）である（図7）。

図7「片道の通学時間」



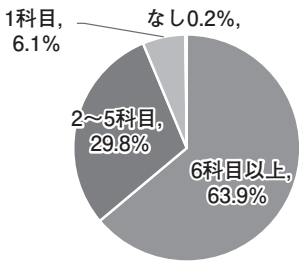
⑵　学修面について

前期（1Q / 2Q）における法文学部と共通教育の遠隔授業について単純集計の結果を示す。なお、1科目の講義形態で、授業形態（対面・遠隔）が混在している科目の場合は、回数が多かった方を選択してもらった。

1）対面授業

「対面での授業は何科目ありましたか」の質問に対し、「1科目」36人（6.1％）、「2～5科目」176人（29.8％）、「6科目以上」377人（63.9％）、「なし」1人（0.2％）である（図8）。

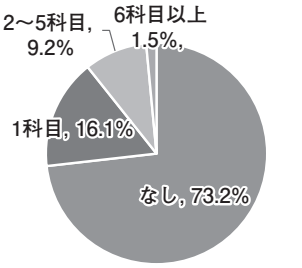
図8「対面授業数」



2）Zoom を用いた同期型授業数

「Zoom 等の同期型授業は何科目ありましたか」の質問に対し、「1科目」95人（16.1％）、「2～5科目」54人（9.2％）、「6科目以上」9人（1.5％）、「なし」432人（73.2％）である（図9）。

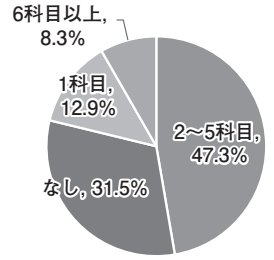
図9「zoom等の同期型授業数」



3）Moodle を用いた非同期型授業数（動画配信型）

「Moodle を利用した動画配信型の非同期型授業は、何科目ありましたか」の質問に対し、「1科目」76人（12.9％）、「2～5科目」279人（47.3％）、「6科目以上」49人（8.3％）、「なし」186人（31.5％）である（図10）。

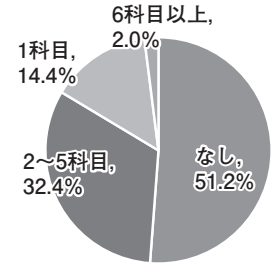
図10「Moodleを用いた非同期型授業数」



4）Moodle を用いた非同期型授業数（PPT・PDF ファイル等の資料のみ）

「Moodle を利用した資料（PPT ファイルや PDF ファイル）のみの非同期型授業は、何科目ありましたか。」の質問に対し、「1科目」85人（14.4％）、「2～5科目」191（32.4％）、「6科目以上」12人（2.0％）、「なし」302人（51.2％）である（図11）。

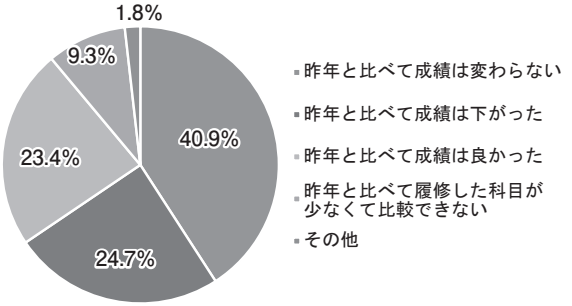
図11「修学支援システムやメールを利用した非同期型授業数」



5）前期の成績に対する学生の主観

「昨年までと比較して、前期の成績（単位取得数、評価）はいかがでしたか」の質問に対し、「1回生なので昨年と比べられない」201人（34.1％）を除く389人の回答は、「昨年と比べて成績は良かった」91人（23.4％）、「昨年と比べて成績は変わらない」159人（40.9％）、「昨年と比べて成績は下がった」96人（24.7％）、「昨年と比べて履修した科目が少なくて比較できない」36人（9.3％）、「その他」7人（1.8％）である（図12）。

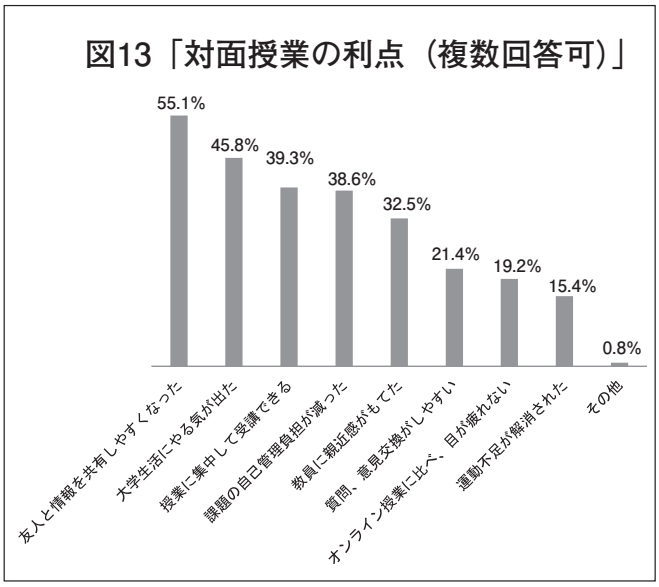
図12「昨年と比較した前期の成績（学生の主観）」



6）対面授業の利点

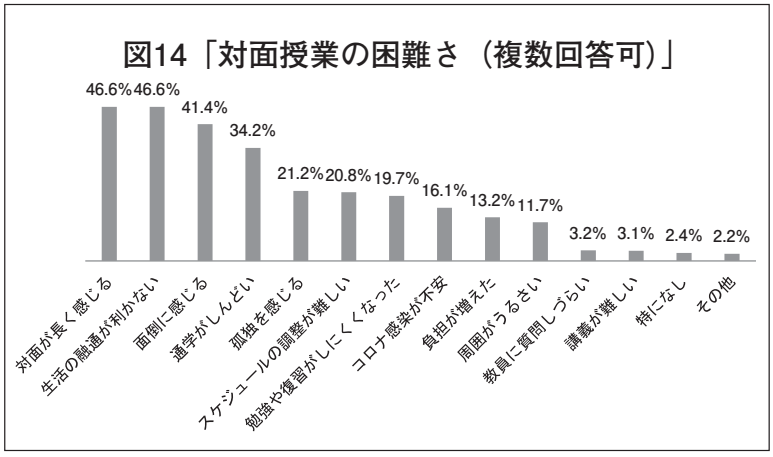
今年度に新設した設問であり、「原則、対面授業を受けるようになって良かったことを教えてください（複数回答可）」と尋ねた。その結果、「友人と一緒に授業を受けられ、授業や大学生活に関する情報を共有しやすくなった」325人

（55.1％）が最も多く、「生活にメリハリがつき、大学生活にやる気が出た」270人（45.8）が続く。以下、「授業に集中して受講できる」232人（39.3％）、「課題の提出頻度が少なく、課題の提出期限や進捗を自己管理する負担が減った」228人（38.6％）、「教員の顔・表情・声が分かり、教員に親近感がもてた」192人（32.5％）、「教員や他の学生への質問、意見交換、グループディスカッションがしやすい」126人（21.4％）、「オンライン授業に比べ、目が疲れない」113人（19.2％）、「運動不足が解消された」91人（15.4％）と続く。また、「特になし」6人（1.0％）、「その他」5人（0.8％）である（図13）。



7）対面授業の困難さ

今年度に新設した設問である。「原則、対面授業を受けるようになったことで困ったことを教えてください（複数回答可）」の質問に対し、「対面での授業が長く感じる」275人（46.6％）、「空コマや移動時間があるため、時間の融通が利かなくなった」275人（46.6％）が同数で最も多く、「移動に時間がかかり、面倒に感じる」244人（41.4％）、「毎日、通学することが体力的にしんどい」202人（34.2％）、「大学にあまり友人、知人が多くないため、孤独を感じる」125人（21.2％）、「1日にオンラインと対面の講義が混在するため、受講環境やスケジュー



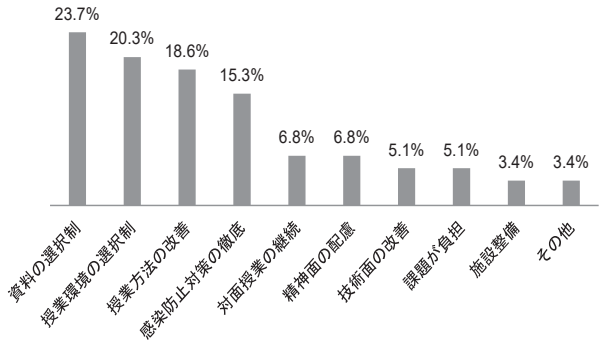
ルの調整が難しくなった」123人（20.8%）、「資料や動画を繰り返し見ることができなくなり、勉強や復習がしにくくなった」116人（19.7%）、「新型コロナウイルスの感染を不安に感じる」95人（16.1%）、「グループディスカッションや討論が増え、負担に感じる」78人（13.2%）、「周囲の学生がうるさく感じる」69人（11.7%）、「教員が丁寧に対応してくれない、教員に質問しづらい」19人（3.2%）、「講義内容の難易度が高すぎる」18人（3.1%）が続く。また、「特になし」14人（2.4%）、「その他」13人（2.2%）である（図14）。

8）大学や教員への要望

今年度に新設した質問である。「原則として対面授業になった状況で、大学や教員に希望することがあれば、自由にお書き下さい。」の自由記述項目に対し、得られた回答（複数回答有）は64件であった。

分類した結果、Moodle、YouTube に授業内容、資料をあげてほしい、紙媒体でほしいといった「資料の選択制」を希望する声が14件（21.9%）と最も多く、必要に応じて遠隔授業も受けられるようにしてほしいといった「授業環境の選択制」を希望する声が12人（18.8%）に続く。さらに、対面ならではの良さの発揮を求める「授業方法の改善」11件（17.2%）、マスク着用、換気、収容人数等を徹底して欲しいといった「感染防止対策の徹底」の声が9件（14.1%）が続く。さらに少数意見になるが、「対面授業の継続」4件（6.3%）、そして、学生の気持ち等を気にかけて欲しいといった「精神面の配慮」を求める声が4人（6.3%）、マイクの音量・スクリーン投影、出欠システム等の教員側の「技術面の改善」が3人（4.7%）、「課題が負担」3人（4.7%）、大学内にて Zoom で発言ができる部屋が欲しいといった「施設整備」2人（3.1%）、「その他」2人（3.1%）が続く（図15）。具体的な回答を資料2に示す。

図15「大学や教員への要望」

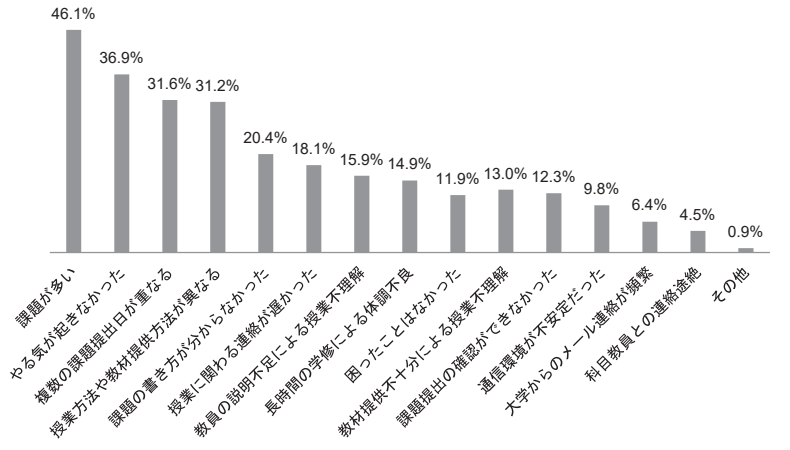


9）遠隔授業の困難さ

「遠隔授業を受ける上で、困ったことを教えてください（複数回答可）」の質問に対し、「遠隔授業がなかった」61人（10.3%）を除く529人の回答は、「課題

やレポート提出の回数が多かった」244人（46.1％）が最も多く、回答者の過半数に近い割合である。続いて「非同期の講義はいつでも受講できるため後回しになり、やる気が起きなかった」195人（36.9％）、「複数の科目の課題やレポート提出日が重なった」167人（31.6％）、「授業科目により授業形態や教材提供方法が異なり、分かりにくかった」165人（31.2％）、「課題やレポートの書き方が分からなかった」108人（20.4％）、「大学や担当教員からの授業に関わる連絡が遅かった」96人（18.1％）、「教員による説明が少なく、授業内容を理解できなかった」84人（15.9％）、「長時間の学修により、目や肩が疲れ、体調が悪くなった」79人（14.9％）、「困ったことはなかった」70人（13.2％）、「教材の提供が不十分で、授業内容を理解できなかった」69人（13.0％）、「課題の提出状況を確認できなかった」65人（12.3％）、「通信環境の関係で、同期型の授業受信が不安定だった」52人（9.8％）、「大学や担当教員からのメール連絡が頻繁であった」34人（6.4％）、「科目教員と連絡がつかなかった／つきにくかった」24人（4.5％）、「その他」5人（0.9％）である（図16）。

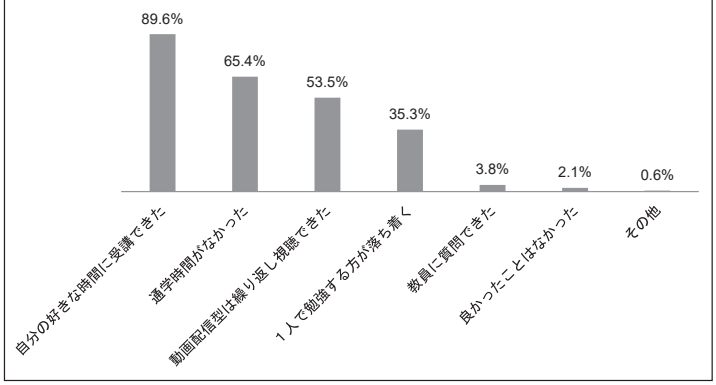
図16「遠隔授業の困難さ（複数回答可）」



10）遠隔授業の利点

「遠隔授業を受ける上で、良かったことがあれば教えてください（複数回答可）」の質問に対し、「遠隔授業がなかった」61人（10.3％）を除く529人の回答は、最も多かっ

図17「遠隔授業の利点（複数回答可）」

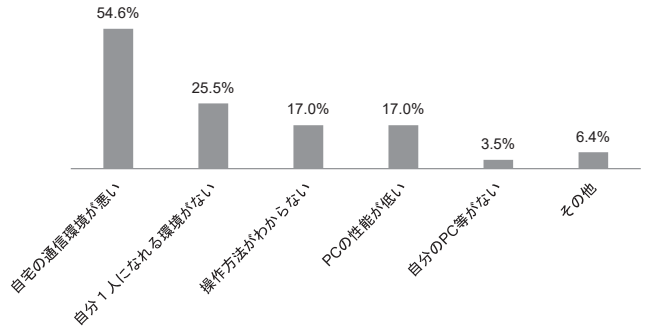


たのは「自分の好きな時間や場所で受講できた」474人（89.6%）であり、回答者の約9割もが選択している。続いて「通学時間がなかった」346人（65.4%）、「動画配信型の教材を繰り返し視聴できた」283人（53.5%）、「1人で勉強する方が落ち着く」187人（35.3%）が選択され、少数意見では「教員に質問できた」20人（3.8%）、「良かったことはなかった」11人（2.1%）、「その他」3人（0.6%）が見られた（図17）。

11）遠隔授業を受ける際の障害

「遠隔授業を受ける上で障害になっていたことはどのようなことですか（複数回答可）」の質問に対し、「特になし」387人（65.6%）が最も多かった。その上で、「特になし」と「遠隔授業がなかった」62人（10.5%）を除く141人の回答を見ると、「自宅の通信環境が整っていなかった（通信速度が遅い等も含む）」77人（54.6%）が最も多く過半数を越した。続いて「自分1人になれる部屋（環境）がなかった」36人（25.5%）、「Moodle などの操作方法がわからなかった」24人（17.0%）、「自分のパソコン（スマホ、タブレット含む）の性能が低かった」24人（17.0%）が見られた。少数意見では、「自分のパソコン（スマホ、タブレット含む）がなかった」5人（3.5%）、「その他」9人（6.4%）が見られた（図18）。

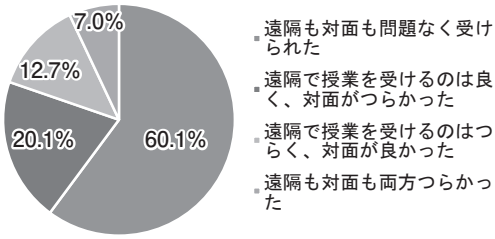
図18「遠隔授業を受ける際の障害（複数回答可）」



12）授業を受けていた時の気持ち

今年度に新設した質問である。「対面授業や遠隔授業について、あなたの考えに近いものを教えてください」に対し、遠隔授業がなかった48人（8.1%）を除く542人の回答は、「遠隔も対面も問題なく受けられた」326人（60.1%）が最も多く約6割を示した。続いて、「遠隔で授業を受けるの

図19「授業についての考え」



は良く、対面がつらかった」109人（20.1%）、「遠隔で授業を受けるのはつらく、対面が良かった」69人（12.7%）、「遠隔も対面も両方つらかった」38人（7.0%）である（図19）。また、学年ごとのクロス集計結果は、表1の通りである。

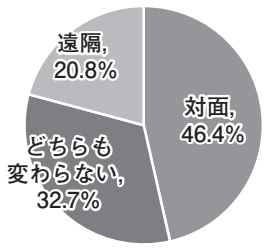
表１　授業形態による学生の主観と学生との関係

		３．学年を教えてください。				
		学部１回生	学部２回生	学部３回生	学部４回生以上	合計
遠隔で授業を受けるのはつらく、対面が良かった	人数	13	15	23	18	69
	%	6.6%	9.1%	17.4%	18.8%	11.7%
遠隔で授業を受けるのは良く、対面がつらかった	人数	36	48	17	8	109
	%	18.2%	29.3%	12.9%	8.3%	18.5%
遠隔も対面も問題なく受けられた	人数	131	88	57	50	326
	%	66.2%	53.7%	43.2%	52.1%	55.3%
遠隔も対面も両方つらかった	人数	15	8	9	6	38
	%	7.6%	4.9%	6.8%	6.3%	6.4%
遠隔授業がなかった	人数	3	5	26	14	48
	%	1.5%	3.0%	19.7%	14.6%	8.1%
合計	人数	198	164	132	96	590
	%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

13）授業の理解度

今年度に新設した質問である。「全体的に授業の理解度に関して、遠隔と対面のどちらのほうがよかったですか」に対し、「対面」274人（46.4%）が最も多く、「どちらも変わらない」193人（32.7%）、「遠隔」123（20.8%）が続く（図20）。

図20「授業の理解度」



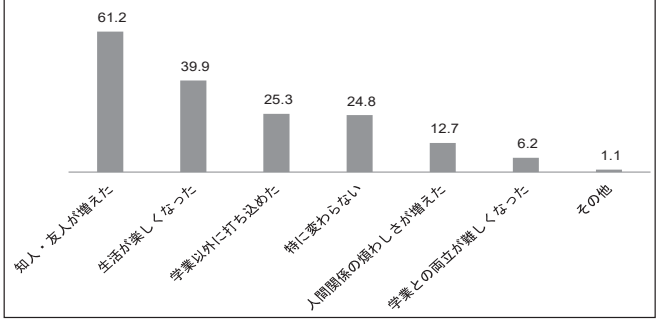
⑶　課外活動面について

フィールドワークや、部活・サークル活動について単純集計を示す。

1）課外活動での影響について

今年度に新設した質問である。「フィールドワークや部活・サークル活動において、どのような影響がありましたか（複数回答可）」に対し、「フィールドワークを行わなかった、または、部活・サークルに所属

図21「課外活動への影響」



していない」219人（37.1％）を除く371人の回答は、「学内（外）で知人・友人が増えた」227人（61.2％）が最も多く回答者の6割を越した。続いて「身体を動かせたり、仲間と活動することができ、生活が楽しくなった」148人（39.9％）、「学業以外で打ち込むことが見つかった」94人（25.3％）、「特に変わらない」92人（24.8％）、「人間関係の煩わしさが増えた」47人（12.7％）、「活動に時間をとられ、学業との両立が難しくなった」23人（6.2％）、「その他」4人（1.1％）である（図21）。

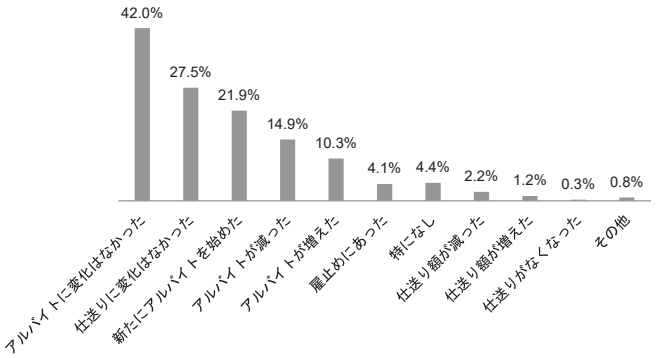
⑷ コロナ禍の生活面について

長期化するコロナ禍での生活面について単純集計の結果を示す。

1）経済的影響

「2022年4月以降も感染拡大の波がある中で、どのような経済的な影響がありましたか」の質問に対し、「アルバイトに入る回数や時間に変化はなかった」248人（42.0％）、「保護者からの仕送りに変化はなかった」162（27.5％）と、変化がなかったとする回答が上位を占めた。続いて「新たにアルバイトを始めた」129人（21.9％）と経済的に良い影響が続く。さらに「アルバイトに入る回数や時間が減った」88人（14.9％）、「アルバイトに入る回数や時間が増えた」61人（10.3％）が続き、少数意見ながら「アルバイト先が休業したり、雇止めにあった」24人（4.1％）、「特になし」26人（4.4％）、「保護者からの仕送り額が減った」13人（2.2％）、「保護者からの仕送り額が増えた」7人（1.2％）、「保護者からの仕送りがなくなった」2人（0.3％）、「その他」5人（0.8％）と続いた（図22）。

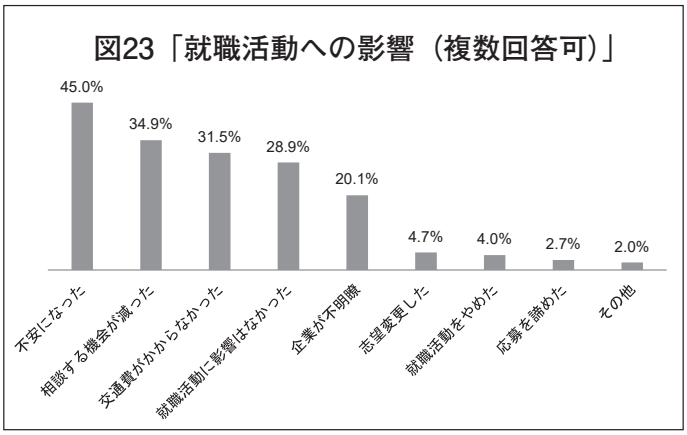
図22「コロナ禍の経済的影響（複数回答可）」



2）就職活動への影響

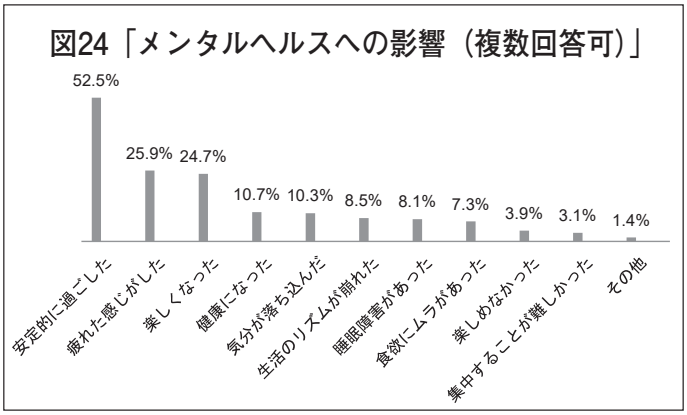
今年度に新設した質問である「就職活動（インターンシップは除く）にどのような影響がありましたか（複数回答可）」に対し、「4回生以上ではない、または

就職活動はしていない」441人（74.7%）を除く、149人の回答は、「自分以外の人の就活状況がわからず、不安になった」67人（45.0％）が最も多かった。続いて「人と会う機会が減ったため、就職活動について相談する機会が減った」52人（34.9%）、「選考がオンライン化され、交通費がかからず、地理的に遠い会社も選択肢に入れることができた」47人（31.5%）、「就職活動に影響はなかった」43人（28.9%）、「選考がオンライン化され、採用担当者や企業のことがあまりよくわからなかった」30人（20.1%）が続く。少数意見としては「志望業界を見直した（変更した）」7人（4.7%）、「就職活動をやめた」6人（4.0%）、「希望していた企業や自治体の応募を諦めた」4人（2.7%）、「その他」3人（2.0%）が見られた（図23）。



3）メンタルヘルスへの影響

今年度に新設した質問「原則、対面授業になって、メンタルヘルスにどのような変化がありましたか（複数回答可）」に対し、「通常と変わらず、安定的に過ごした」310人（52.5％）」が最も多く回答者の過半数にあたる。続いて「疲れた感じがした、または気力がなかった」153人（25.9%）、「コミュニケーションが活発になり、楽しくなった」146人（24.7%）、「身体を動かすことによって、体調が良くなった、健康になった」63人（10.7%）、「気分が落ち込んだ」61人（10.3%）が続く。さらに少数意見では、「生活のリズムが崩れた」50人（8.5%）、「寝つきが悪くなった、途中で目が覚めた、反対に眠り過ぎた」48人（8.1%）、「食欲がなかった、あるいは食べ過ぎた」43人（7.3%）、「物

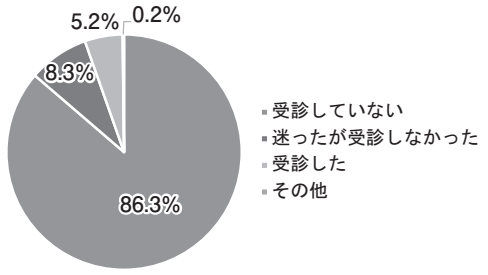


事に対してほとんど興味が無くなった、楽しめなかった」23人（3.9%）、「新聞やテレビを見ることなどに集中することが難しかった」18人（3.1%）、「その他」8人（1.4%）が見られた（図24）。

4）医療機関の受診について

「長期化するコロナ禍でのメンタル不調により、2022年4月以降、医療機関やカウンセリングに行きましたか（無回答可）」の質問に対し、回答があった577件の内訳は、「受診していない」498人（86.3％）が約8割と多いが、「迷ったが受診しなかった」48人（8.3%）、「受診した」30人（5.2%）の数は留意しなければならない（図25）。

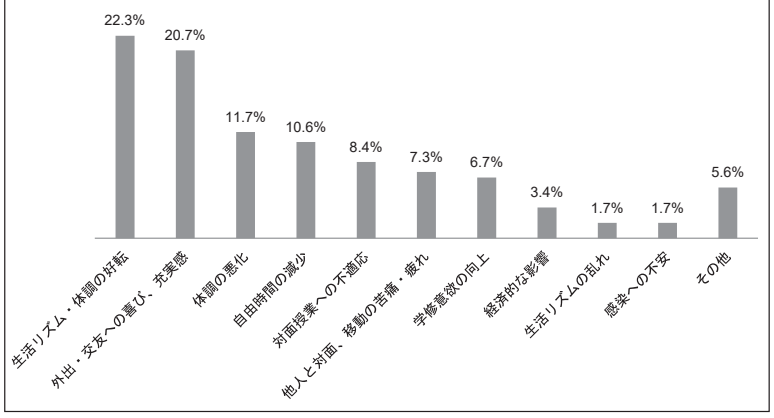
図25「医療機関やカウンセリングの受診」



5）対面授業が始まった当初の生活への影響、変化について（自由記述）

2022年度に「2022年4月以降、原則対面授業になり、あなたの生活に、どのような影響がありましたか」の自由記述項目に対し、得られた回答（複数回答有）は、179件だった。分類した結果、生活リズムが戻った、体調がよくなった等「生活リズム・体調の好転」40人（22.3%）が最も多い。続いて、人と会える、友人が増える、交流が広がることへの喜び、生活への充実を感じる等「外出・交友への喜び、充実感」37人（20.7%）、体力減少等による身体の疲れ、早起きの辛さ、精神面での辛さ　孤独感等「（精神面・身体面）体調の悪化」21人（11.7%）、時間の制約、時間の融通が利かなくなった、自分の時間の減少「自由時間の減少」19人（10.6%）が続く。さらに、対面だと長く感じる、対面ばかりでサボってしまった「対面授業への不適応」15人（8.4％）、人間関係の悩み、通学の面倒臭さ「他人と対面すること、移動することへの苦痛・疲れ」13人（7.3％）、理解、

図26「対面授業が始まった当初の生活への影響、変化について」

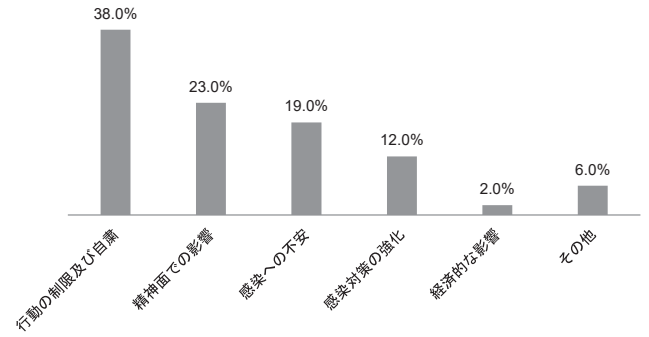


対面授業が嬉しい、やる気等「学修意欲の向上」12人（6.7%）、アルバイト減少等「経済的な影響」6人（3.4%）、「生活リズムの乱れ」3人（1.7%）、「感染への不安」3人（1.7%）が見られた（図26）。具体的な回答を、資料3に示す。

6）新型コロナウイルス感染者数が増加した時期への影響、変化について（自由記述）

「6. 原則対面授業が続く中、行動制限はないものの、新型コロナウイルス感染者数が増加した時期もありました。このことによって、あなたの生活に、どのような影響がありましたか」の自由記述項目に対し、得られた回答（複数回答有）は100件であった。分類した結果、「外出、活動、行動の制限及び自粛」38人（38%）が最も多く、楽しみがなくなることや不安、怒り、意欲低下、諦め等による「精神面での影響」23人（23%）、主に対面授業に対しての「感染への不安」19人（19%）、「感染対策の強化」12人（12%）、アルバイトに入れなくなった「経済的な影響」2人（2%）が続いた（図27）。具体的な回答を、資料4に示す。

図27「感染者数が増加した時期への影響、変化について」

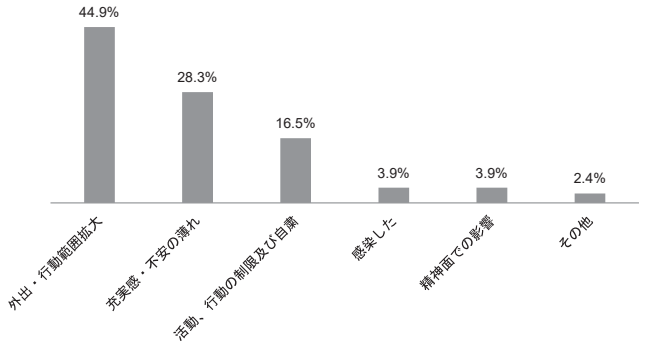


7）夏休み時期の生活への影響、変化について（自由記述）

「7. 2022年の夏休みは、行動制限はありませんでしたが、このことによって、あなたの夏季休業期間での生活においてどのような影響がありましたか」の自由記述項目に対し、得られた回答（複数回答有）は、127件であった。

分類した結果、帰省・旅行・アルバイト等「外出・行動範囲拡大」57人（44.9%）が最も多く回答者の過半数近くを占める。続いて、規制緩和で行動できたことにより　楽しい、打ち込めた、外出できることへの喜び等「充実感・不

図28「夏休み時期の生活への影響、変化について」



安の薄れ」36人（28.3％）、主に部活動の制限、不要不急の外出自粛等「活動、行動の制限及び自粛」21人（16.5％）、新型コロナウイルスに「感染した」5人（3.9％）、自由に活動できないことへの憤り、活動への罪悪感や迷い「精神面での影響」5人（3.9％）が続いた（図28）。具体的な回答を、資料5に示す。

6．考　察

本調査結果は、長く続くコロナ禍において、大学生がどのように学修・生活しているのか、また、大学は、今後どのような取り組みを進めていく必要があるのか、数多くの示唆を与えるものとなっている。

コロナ感染拡大開始である2020年から継続している本プロジェクトの調査から読み取れる傾向として、愛媛大学法文学部における学生のコロナ禍への対応は、「コロナ疲れ」を感じつつも、学修方法や日常生活の過ごし方を自ら工夫しておおむね乗り切っているとみてよいだろう。2022年度より原則対面授業となり、学生間の交流が活発化したことをポジティブに捉えている学生が大半である。一方で、90分の対面授業に対して、授業が長く感じる学生が約4割にもおよび、通学や授業時間の空きコマ等の時間の使い方に戸惑う学生も4割にのぼる。2年間にわたる遠隔授業に慣れたため、かつ教員側の動画等の教材提供の質も上がったためか、対面授業になっても遠隔授業の良いところを取り入れてほしいとの要望が目立った。例えば、授業資料の配布をMoodle 上で行うか授業中に紙媒体で配布するかなどを選択できるようにしてほしい、学生側が対面授業と遠隔授業を選択できるようにしてほしいとの意見が見られたのは特徴的である。原則的に対面授業に戻ったとはいえ、2年間にわたる遠隔授業の実施により、学生らは遠隔授業の良さを取り入れた新たな対面授業を求めているといってよい。しかし、学生間にもどのような資料媒体や授業形態を望むかは格差が大きいこともあり、新たな対面授業のイメージは一様ではない。

総じていえば、原則としての対面授業を展開する大学生活に順応してきた／いる学生が多数を占める一方、メンタルヘルスに困難を感じている学生が引き続き一定数いること、またその原因の一つがコロナ禍であるかもしれないことに留意が必要であろう。

本稿では、⑴ コロナ禍の学修面、及び、⑵ コロナ禍の生活面について、全体の傾向を考察していく。

⑴　コロナ禍の学修面について

授業方法については、6科目以上あった形式としては、「対面授業」が一番多く、これらは、原則対面授業になっている愛媛大学での必然的な結果といえる。一部の授業

では遠隔授業を行っているが、遠隔授業の中では、「Moodle を利用した非同期型授業（動画配信型）」が一番多く、「Zoom 等の同期型授業」は、9割近い学生が1科目未満と回答しており、遠隔授業導入で定着していたシステムが、今はほとんど使われていないことがうかがえる。

また、成績に関して、2回生以上の回答は、「昨年と変わらない」学生が4割を占めたが、変化があった学生の中では「成績が良くなった」学生（91人23.4%）より「悪くなった」学生（96人24.7%）の方がわずかながら多いという結果であった。特に、2回生と3回生でこの傾向が見られた。授業を受けていた気持ちとしては、「遠隔も対面も問題なく受けられた」とする回答326人（60.1%）が最も多く、さらに授業の理解度は「対面」が高いと回答した学生274人（46.4%）が最も多かったにもかかわらず、原則対面授業であった今年度に、成績が変わらない、または、成績が悪くなったことは何を意味するのかについては、今後さらに分析していきたい。

対面授業での利点（複数回答可）としては、回答者の5割以上にものぼる学生が「友人と一緒に授業を受けられ、授業や大学生活に関する情報を共有しやすくなった」を選んでおり、次いで4割が「生活にメリハリがつき、大学生活にやる気が出た」を選んでいる。まさに、原則として対面授業となった大学生活に、友人との関わりを重視する学生の喜びが伝わってくる。

一方で、対面授業を受けることで困ったことについては、「対面での授業が長く感じる」、「空コマや移動時間があるため、生活時間の融通が利かなくなった」と約4～5割もの学生が回答している。2年間の遠隔授業に慣れたからこそ、これらの対面授業のデメリットも感じている。実際、遠隔授業での利点（複数回答可）としては「自分の好きな時間や場所で受講できた」との回答が9割弱となり、自由に学修時間を決め、効率的に時間を使いたい学生の意識が浮き彫りになっている。さらに、遠隔授業について「良かったことはなかった」と回答した学生が1割以下（2.1%）であり、これは2021年度と同様の結果であった。今年度、遠隔授業を受けたほとんどすべての学生が、遠隔授業にメリットがあると感じている。

遠隔授業を受ける上で困ったこととして、5割弱の学生が「課題やレポート提出の回数が多い」と回答しており、この傾向は一昨年度や昨年度と同様である。授業ごとに課題レポートが出されることが多く、課題提出の締め切りに追われることは、ストレスになっている様子である。原則として対面授業になった今年度になっても、遠隔授業では課題の多さをストレスと感じる学生は、昨年までと同じ程度存在していることが興味深い。一方で、2020年度のアンケート結果では、遠隔授業について困ったことを尋ねた回答では「教員による説明が少なく授業内容を理解できなかったこと」をあげた者が半数近く（45.6%）もいたが、2021年度には2割（23.8%）に減少し、今

年度はさらに1割強（15.9%）に激減している。これらは、学生の慣れもあるが、大学および教員側が授業の質の向上等をはかり、遠隔授業の提供体制が整っていた結果と言ってよいだろう。

遠隔授業を受ける際には、通信機器が必要とされるが、「障害になることはなかった」と回答した学生が全体の7割程度にのぼり、大多数の学生は問題なく遠隔授業が受けられていたと推測される。しかし、通信上の障害があった学生のなかでは、いまだに「自宅の通信環境が整っていなかった（通信速度が遅い等も含む）」と回答した学生が遠隔授業を受ける際に障害があったとする学生144人中の5割いたことも留意すべきであろう。自宅の通信環境の困難さは、アンケート開始当時から3年にわたり変わっておらず、自宅の環境整備は学生のみの責に帰すべきでないのではないか。今後の詳しい分析と対応が必要であろう。

今年度の対面授業や遠隔授業を受けていた時の気持ちについては、「遠隔も対面も問題なく受けられた」学生が6割と一番多かったが、「遠隔で授業を受けるのは良く、対面がつらかった」と回答した学生（20.1%）が、「遠隔で授業を受けるのはつらく、対面が良かった」と回答した学生（12.7%）を上回る結果になった。

学年別でのクロス集計結果では、1・2回生では、「遠隔で授業を受けるのは良く、対面がつらかった」と回答した学生が多く、3・4回生では「遠隔で授業を受けるのはつらく、対面が良かった」と回答した学生が多かった（表1）。

この差異をどう読み解くべきであろうか。我々は、以下のように仮説を立てている。遠隔中心の授業を受けたことがある3・4回生は、2020年度から急きょ遠隔授業に切り替えられ、選択の余地なく自宅から一人で受講し、課題を提出せざるを得なかった辛い気持ちが反映されている可能性があるのではないか。一方、1回生は、原則として対面授業しか経験しておらず、遠隔授業の経験がほとんどないか数少ないこと、さらに入学後1年目で大学生活そのものに慣れていないということから、大学の授業を対面で受講すること自体が予想以上にストレスになっているのではないだろうか。

また、授業の理解度については、学年別でみると、1回生のみ「どちらも変わらない」、「対面」、「遠隔」という理解度順であり、他の学年は、「対面」、「どちらも変わらない」、「遠隔」という理解度順となった。どの学年からも対面と遠隔では「対面」の方が理解できると考えている結果から、改めて対面授業は学修効果を少なくとも主観的には高める方式であることが確認されたといえよう。以上は仮説であり、今後、インタビュー等で生の声を聞くことにより、より詳しいアンケート結果の分析を進めていきたい。

フィールドワークや部活・サークル活動等の課外活動面については、活動した人の中では、「学内（外）で知人・友人が増えた」と回答した学生が6割以上と一番多い。

次いで「身体を動かしたり、仲間と活動することができ、生活が楽しくなった」と回答した学生が多く、教室における講義以外の活動こそが、学生間の交友関係を広くし、大学生活を送る上でメリットと感じている学生が多いことが明らかになった。

⑵　コロナ禍の生活面について

経済的な変化に関する質問では、「アルバイトに入る回数や時間に変化はなかった」が4割と一番多く、次いで「保護者からの仕送りに変化はなかった」という結果だった。2020年度は「アルバイトに入る回数や時間が減った」が約3割も存在し、2021年度は約2割に減り、今年度はさらに1割強まで減少した。この3年間で、学生のアルバイトによる経済的活動や保護者からの仕送りは、比較的安定してきている者が増えている。

また、メンタルヘルスに対する質問でも、一番多かった回答は「通常と変わらず安定的に過ごした」が約5割であり、2020年度の2割強、2021年度の3割から比較して、大きく回復している。コロナ禍での遠隔授業は、自宅にて一人で取り組み、また時期によっては外出を制限されることもあり、孤独になりがちでありメンタルヘルスの悪化が問題であったことから、改善の方向に向かっていることは喜ばしいことである。さらに「生活のリズムが崩れた」と回答した学生も2020年度6割弱、2021年度5割弱と学生の約半分が生活時間を規律することに困難を感じている様子だったが、今年度は1割未満と大幅に減少している。今年度は、原則対面授業に切り替わったことで、生活リズムが整ったとみることが出来よう。

しかし、回答者の3割以下の者ではあるものの「疲れた感じがした、または気力がなかった」、「気分が落ち込んだ」等、精神面での影響がみられる学生も引き続き一定数存在する。また、就職活動への影響を問う質問では、「自分以外の人の就活状況が分からず、不安になった」と回答した学生が5割弱もおり、次いで、「人と会う機会が減ったため、就職活動について相談する機会が減った」と回答した学生が3割強もいたことからも、コロナ禍での就職活動では、精神的な負担を大きく感じていたことがわかる。さらに、医療機関の受診を問う回答にも、同様の傾向がみられる。8割強の学生が「受診していない」と回答したものの、「迷ったが受診しなかった」と「受診したことがある」を合わせると13.5％になる。昨年度同じ質問では、「迷ったが受診しなかった」と「受診したことがある」を合わせると19.1％であった。その割合は減少しているものの、学生生活に辛さを感じていた学生にとっては、対面授業に切り替わったからすぐに回復するというものではなく、長きにわたって精神面の支援が必要になっていることがわかる。

今年度に入ってからの生活への影響を問う自由記述として、対面授業開始時、感染

者増加時、夏季休業期間の回答（図26~28）では、対面授業が開始されたことを喜び、感染者増加により行動が制限されたことで怒りや意欲低下等の影響が一時的にあったが、夏休みには行動範囲が広がり有意義に過ごす傾向が見られた。長期化するコロナ禍で、感染者数の増減に一喜一憂し、社会や大学の対応に怒りを持ったり、また疲れを見せたりと、現代の大学生の気持ちが表れている。

最後に、大学教員への要望（図15）にもあったが、今年度から原則対面授業に切り替わったが、学生らは遠隔授業の良さを取り入れた新たな対面授業を求めているといってよい。また、対面授業に即座に適応できない学生も一定数いることが分かった。今後は、アフターコロナの講義形態が、大きな課題の一つとなるだろう。

7．おわりに

今夏の第7波の感染爆発は秋になり鎮静化の傾向にあったが、収束の兆しが見えないまま、第8波に入ろうとしている（2022年11月末現在）。また、今冬は、新型コロナウイルス感染症と季節性インフルエンザの同時流行への懸念が高まってきており、感染防止対策を続けながらの教育が続いている。さきに述べたように、登校に不安感や抵抗感があり対面授業に適応できない学生も存在することから、ハイブリッド型教育を含め、今後の大学教育において、教育提供方法を考えていく時期なのかもしれない。そしてそれらは、教育の質の向上を進めることにもなるだろう。今後は、法文学部学生の、手記募集や座談会を開催し、学生・教員双方の生の声を収集・保存しつつ、他学部・他大学との比較検討もしていきたい。

謝辞

今回、アンケート調査に携わって頂きました法文学部の教員、ならびに回答頂きました学生の方々に感謝の意を表します。

また、この研究は、令和4年度法文学部戦略経費、令和4年度愛媛大学教育改革促進事業（愛大教育改革GP）及びJSPS科研費19K21723の助成金交付により研究が遂行されたものです。

参考文献一覧

① 青木理奈・鈴木靜・福井秀樹・小佐井良太・石坂晋哉「コロナ禍における法文学部の被災記録の収集と保存Ⅰ ―学生を対象としたアンケート調査の単純集計結果―」『愛媛大学法文学部論集第』50号（社会科学編），pp.37-68.2021年2月.

② 青木理奈・鈴木靜・福井秀樹・小佐井良太・石坂晋哉・太田響子・池貞姫・十河宏行・中川未来「コロナ禍における法文学部の被災記録の収集と保存Ⅳ ―2021年度学生を対象としたアンケート調査の純集計結果―」『愛媛大学法文学部論集第52号』（社会科学編），pp.19-54.2022年2月.

③ 青木理奈・鈴木靜・福井秀樹・小佐井良太・石坂晋哉「コロナ禍における法文学部の被災記録の収集と保存Ⅲ ―2020年度学生手記の分析―」『愛媛大学法文学部論集第51号』（社会科学編），pp.93-111.2021年9月.

④　青木理奈・鈴木靜・福井秀樹・小佐井良太・石坂晋哉・太田響子・池貞姫・十河宏行・中川未来「コロナ禍における法文学部の被災記録の収集と保存Ⅵ －2021年度学生手記の分析－」『愛媛大学法文学部論集第53号』（社会科学編），pp. 37-57.2022.9月.
⑤　青木理奈・鈴木靜・福井秀樹・小佐井良太・石坂晋哉「コロナ禍における法文学部の被災記録の収集と保存Ⅱ －2020年度学生座談会報告書－」『愛媛大学法文学部論集第51号』（社会科学編），pp.117-138.2021年9月.
⑥　青木理奈・鈴木靜・福井秀樹・小佐井良太・石坂晋哉・太田響子・池貞姫・十河宏行・中川未来「コロナ禍における法文学部の被災記録の収集と保存Ⅴ －2021年度学生座談会報告書－」『愛媛大学法文学部論集第53号』（社会科学編），pp. 133-150.2022.9月.
⑦　Murata, K, and Orito, Y.（2022）Student experiences during the COVID-19 pandemic: the case of Japanese higher education, In Ana María Lara Palma and Rafael Brotóns Cano（eds.）, International Education Narratives: Transdisciplinary Educative Innovation Experiences Based on Bilingual Teaching, Universidad de Burgos, pp. 142-156
⑧　折戸洋子、崔英靖、岡本隆、岡本直之、曽我亘由、橘恵昭「新型コロナウイルス感染症による大学生活への影響：大学生はBeforeコロナに戻ることができるのか？」『愛媛大学社会共創学部紀要』第７巻第１号頁数未定、2023年3月公表予定

資料1.【2022年度】コロナ禍における法文学部学生の学修・生活への影響アンケート

このアンケートは、法文学部戦略経費「コロナ禍における法文学部学生の被災記録の収集、保存―将来の災害に備えてのデータベース化と今後の課題―」の一環として、学生の学修・生活への影響をお聞きするものです。これは、学術目的の調査であり、後世に役立てるための記録として保存します。本調査の回答により収集された情報は、個人情報保護法にしたがって適切に管理されます。このアンケートは、原則匿名ですが、今後、手記を提供してくださる場合は、お名前と連絡先をお聞きいたします。アンケート内容や個人情報の取り扱いなどに疑義がある場合は青木理奈（*********@ehime-u.ac.jp）にお問い合わせください。

本アンケート調査の回答にはおよそ5～10分かかります。ご協力の程、何卒よろしくお願いいたします。

代表　青木理奈・鈴木　靜

必須

１．あなたは次のどれに当てはまりますか。*
○　一般学生
○　社会人
○　留学生
○　その他（自由記述）

２．性別を教えてください。*
○　男性
○　女性
○　その他

３．学年を教えてください。*
○　学部1回生
○　学部2回生
○　学部3回生
○　学部4回生以上
○　大学院1回生
○　大学院2回生以上

４．コース等を教えてください。*
○　1回生昼間主
○　1回生夜間主
○　2回生以上昼間主：法学・政策学コース（総合政策学科を含む）
○　2回生以上夜間主：法学・政策学コース（総合政策学科を含む）

○　2回生以上昼間主：人文学コース（人文学科を含む）
○　2回生以上夜間主：人文学コース（人文学科を含む）
○　2回生以上：グローバル・スタディーズコース
○　大学院（人文社会科学研究科法学コース・法文学研究科総合政策専攻）
○　大学院（人文社会科学研究科人文学コース・法文学研究科人文学専攻）

5．2022年度前期の居住形態を教えてください 。*
○　1人暮らし
○　実家暮らし、または家族と同居
○　学生寮
○　その他（自由記述）

6．通学の手段を教えて下さい。
○　公共交通機関（電車・バスなど）
○　徒歩
○　自転車
○　バイク
○　その他

7．片道の通学時間を教えてください。
○　10分未満
○　10分以上30分未満
○　30分以上～1時間未満
○　1時間以上

残り20問です
【学修面】
この設問以降、2022（令和4）年度前期（1Q/2Q）における法文学部と共通教育の授業についてお聞きします。1科目の講義形態で、授業形態（対面・遠隔）が混在している科目の場合は、回数が多かった方を選択してください。

1．対面での授業は何科目ありましたか。*
○　1科目
○　2～5科目
○　6科目以上
○　なし

2．Zoom 等の同期型授業は何科目ありましたか。 *
○　1科目
○　2～5科目
○　6科目以上
○　なし

3．Moodle を利用した動画配信型の非同期型授業は、何科目ありましたか。 *
○　1科目
○　2～5科目
○　6科目以上
○　なし

4．Moodle を利用した資料（PPT ファイルや PDF ファイル）のみの非同期型授業は、何科目ありましたか。 *
○　1科目
○　2～5科目
○　6科目以上
○　なし

5．昨年までと比較して、前期の成績（単位取得数、評価）はいかがでしたか。 *
○　1回生なので昨年と比べられない
○　昨年と比べて成績は良かった
○　昨年と比べて成績は変わらない
○　昨年と比べて成績は下がった
○　昨年と比べて履修した科目が少なくて比較できない
○　その他：

6．原則、対面授業を受けるようになって良かったことを教えてください（複数回答可）。*
○　生活にメリハリがつき、大学生活にやる気が出た
○　友人と一緒に授業を受けられ、授業や大学生活に関する情報を共有しやすくなった
○　課題の提出頻度が少なく、課題の提出期限や進捗を自己管理する負担が減った
○　授業に集中して受講できる
○　教員や他の学生への質問、意見交換、グループディスカッションがしやすい
○　教員の顔・表情・声が分かり、教員に親近感がもてた
○　オンライン授業に比べ、目が疲れない
○　運動不足が解消された
○　その他（自由記述）

7．原則、対面授業を受けるようになったことで困ったことを教えてください（複数回答可）*
○　対面での授業が長く感じる
○　毎日、通学することが体力的にしんどい
○　移動に時間がかかり、面倒に感じる
○　空コマや移動時間があるため、時間の融通が利かなくなった
○　1日にオンラインと対面の講義が混在するため、受講環境やスケジュールの調整が難しくなった
○　周囲の学生がうるさく感じる
○　大学にあまり友人、知人が多くないため、孤独を感じる
○　グループディスカッションや討論が増え、負担に感じる
○　資料や動画を繰り返し見ることができなくなり、勉強や復習がしにくくなった
○　新型コロナウイルスの感染を不安に感じる
○　講義内容の難易度が高すぎる
○　教員が丁寧に対応してくれない、教員に質問しづらい
○　その他（自由記述）

8．原則として対面授業になった状況で、大学や教員に希望することがあれば、自由にお書き下さい。（自由記述）

9．遠隔授業を受ける上で、困ったことを教えてください（複数回答可）。*
○　大学や担当教員からの授業に関わる連絡が遅かった
○　大学や担当教員からのメール連絡が頻繁であった
○　授業科目により授業形態や教材提供方法が異なり、分かりにくかった
○　教材の提供が不十分で、授業内容を理解できなかった
○　教員による説明が少なく、授業内容を理解できなかった
○　課題やレポートの書き方が分からなかった
○　課題やレポート提出の回数が多かった
○　複数の科目の課題やレポート提出日が重なった
○　科目教員と連絡がつかなかった / つきにくかった
○　課題の提出状況を確認できなかった
○　非同期の講義はいつでも受講できるため後回しになり、やる気が起きなかった
○　長時間の学修により、目や肩が疲れ、体調が悪くなった
○　通信環境の関係で、同期型の授業受信が不安定だった
○　困ったことはなかった
○　遠隔授業がなかった
○　その他（自由記述）

10．遠隔授業を受ける上で、良かったことがあれば教えてください（複数回答可）。*
○　自分の好きな時間や場所で受講できた
○　動画配信型の教材を繰り返し視聴できた
○　教員に質問できた
○　通学時間がなかった
○　1人で勉強する方が落ち着く
○　良かったことはなかった
○　遠隔授業がなかった
○　その他（自由記述）

11．遠隔授業を受ける上で障害になっていたことはどのようなことですか（複数回答可）。*
○　自分のパソコン（スマホ、タブレット含む）がなかった
○　自分のパソコン（スマホ、タブレット含む）の性能が低かった
○　自宅の通信環境が整っていなかった（通信速度が遅い等も含む）
○　自分1人になれる部屋（環境）がなかった

○　Moodle などの操作方法がわからなかった
○　特になし
○　遠隔授業がなかった
○　その他（自由記述）

12. 対面授業や遠隔授業について、あなたの考えに近いものを教えてください。 *
○　遠隔も対面も問題なく受けられた
○　遠隔で授業を受けるのはつらく、対面が良かった
○　遠隔で授業を受けるのは良く、対面がつらかった
○　遠隔も対面も両方つらかった
○　遠隔授業がなかった

13. 全体的に授業の理解度に関して、遠隔と対面のどちらのほうがよかったですか。
○　対面
○　遠隔
○　どちらも変わらない

残り8問です
【課外活動面】
フィールドワークが可能になったり、部活・サークル活動が活発化したことについてお聞きします。
1．フィールドワークや部活・サークル活動において、どのような影響がありましたか（複数回答可）。
○　学内（外）で知人・友人が増えた
○　身体を動かせたり、仲間と活動することができ、生活が楽しくなった
○　学業以外で打ち込むことが見つかった
○　人間関係の煩わしさが増えた
○　活動に時間をとられ、学業との両立が難しくなった
○　特に変わらない
○　フィールドワークを行わなかった、または、部活・サークルに所属していない
○　その他（自由記入）

【生活面】
2022年4月以降、長期化するコロナ禍での生活面についてお聞きします
1．2022年4月以降も感染拡大の波がある中で、どのような経済的な影響がありましたか（複数回答可）。 *
○　アルバイトに入る回数や時間に変化はなかった
○　アルバイトに入る回数や時間が減った
○　アルバイトに入る回数や時間が増えた
○　アルバイト先が休業したり、雇止めにあった
○　新たにアルバイトを始めた
○　保護者からの仕送りに変化はなかった
○　保護者からの仕送り額が減った
○　保護者からの仕送りがなくなった
○　保護者からの仕送り額が増えた
○　その他（自由記述）

2．就職活動（インターンシップは除く）にどのような影響がありましたか（複数回答可）。 *
○　4回生以上ではない、または就職活動はしていない
○　就職活動に影響はなかった
○　自分以外の人の就活状況がわからず、不安になった
○　人と会う機会が減ったため、就職活動について相談する機会が減った
○　選考がオンライン化され、交通費がかからず、地理的に遠い会社も選択肢に入れることができた
○　選考がオンライン化され、採用担当者や企業のことがあまりよくわらなかった
○　志望業界を見直した（変更した）
○　希望していた企業や自治体の応募を諦めた
○　就職活動をやめた
○　その他（自由記述）

3．原則、対面授業になって、メンタルヘルスにどのような変化がありましたか（複数回答可）。 *
○　通常と変わらず、安定的に過ごした
○　コミュニケーションが活発になり、楽しくなった
○　身体を動かすことによって、体調が良くなった、健康になった
○　物事に対してほとんど興味が無くなった、楽しめなかった

○　気分が落ち込んだ
○　寝つきが悪くなった、途中で目が覚めた、反対に眠り過ぎた
○　疲れた感じがした、または気力がなかった
○　食欲がなかった、あるいは食べ過ぎた
○　新聞やテレビを見ることなどに集中することが難しかった
○　生活のリズムが崩れた
○　その他（自由記述）

4．長期化するコロナ禍でのメンタル不調により、2022年4月以降、医療機関やカウンセリングに行きましたか（無回答可）。
○　受診した
○　受診していない
○　迷ったが受診しなかった
○　その他（自由記述）

5．2022年4月以降、原則対面授業になり、あなたの生活に、どのような影響がありましたか。自由にお書きください。

6．原則対面授業が続く中、行動制限はないものの、新型コロナウイルス感染者数が増加した時期もありました。このことによって、あなたの生活に、どのような影響がありましたか。自由にお書きください。

7．2022年の夏休みは、行動制限はありませんでしたが、このことによって、あなたの夏季休業期間での生活においてどのような影響がありましたか。自由にお書きください。

【追加で協力して頂ける方】謝礼：クオカード3,000円
本プロジェクトでは、学生の皆さんにコロナ禍での大学生活の記録を手記としてまとめていただきたいと希望しています。手記の締め切りは11月末日で、1,200字程度です。手記をお寄せいただいた方には、謝礼（クオカード3,000円分）をお渡しします。お引き受けくださる方は、青木と鈴木（下記の宛先）までメールにてご連絡ください。連絡頂いた学生さんには、青木から依頼のメールを致します。

宛先：青木理奈：*********@ehime-u.ac.jp、鈴木靜：*********@ehime-u.ac.jp
件名：「コロナ禍における法文学部学生の手記について」
本文：お名前をフルネームで書いてください。
こちらから連絡しても良いメールアドレスを正しく書いてください。以上です。
質問は以上です。ご回答ありがとうございました。

資料２．原則として対面授業になった状況で、大学や教員に希望することがあれば、自由にお書き下さい 。に対する全回答（自由記述）

原則対面ではなく、これからも必要に応じて遠隔授業を組み込んでほしい。特に非同期型は、移動時間が減ったり、スケジュールを柔軟に組めたり、マイペースに授業に取り組める点が良かった。
活発な議論のために自由席にしてほしい。
マイクの音量が小さくて聞こえなかったり、一番前のスクリーンにのみ映像を写し後方の学生が困っているため配慮して頂きたい。
3回生です。 今までの僕たちの時間を返してください。
配信を必ずすること。YouTube にて残してくれると復習にもなるし、感染した際だけでなく女性なりの生理痛などで本当に行けない場合などに役立つと感じる。
特に3回生は入学時からオンライン授業であったため、それが大学生活の日常であったのに、急に今までの当たり前を押し付けられて苦痛でしかないです。対面授業が強要されて、しんどいです。3回生の前期で初めて全授業を対面で受けることになり、もちろん対面でテストを受けることも初めてであったのに、学生の不安などを気にかけてくれる様子もなかったです。（一部、優しい先生もいましたが。）遠隔を選ぶことができない、選択肢がないのが学生の気持ちに寄り添ってくれていないなと強く感じています。大学生活が早く終わればいいのにと常に思っています。
このまま継続を望みます。
講義内で使う資料は Moodle に up してもらいたい。
講義の開始時・終了時などに机をアルコール消毒で除菌するよう生徒に呼び掛けるなど、感染対策をして欲しい。 また、対面での質問方法だけではなく、Moodle3.5に質問フォーラム等を常設するなど、遠隔でも質問が行いやすい環境を整えて欲しい。
資料等はできるだけ moodle 上にアップしてほしい。

眠気の解消とやる気の向上のために、授業の合間に2、3分以上の休憩を入れて欲しい。
履修登録の際は非同期と書いてあったものが、登録後に対面になったことがあったため、早めに方針を固めて欲しい。
現在は専門教育科目のほとんどが対面で、共通教育のほとんどがMoodleによる非同期遠隔の授業なので不自由はない。しかし、対面とzoomなどの同期遠隔の授業が連続した場合、家に帰って受ける余裕はなく、zoomで発言を求められても応えられる場所があまりないので、発言の必要がある同期遠隔の授業はなるべくしないでほしい。
授業で使用したスライドや資料はMoodle等にアップロードしてほしいです。
遠隔とのハイブリッド型式にして欲しい。
教室の受け入れ人数と授業の受講人数が合っていない授業が多く、感染対策の面で気を遣っていないように感じた。
この時期はエアコン無しで快適に過ごせる反面、閉め切った教室はまだ暑く授業に集中できないと感じるので窓を開けてもらいたい。
冷暖房があるかもしれないが、コロナ対策として窓は開けて欲しい。
課題のウエイトが重い。
グループワークで学生同士の討論の機会を増やしてほしいです。
口頭での質問や討論をしない授業では対面授業をしてほしくありません。
レジュメは配布してほしい。
わたしはもともとうつなのでそういった理由で授業に出られない学生に対してもこの機会にサポートをつくってほしい。
もう少しグループワークを増やしてほしい。会話を活発にしてほしい。
対面授業の方が友達と会える楽しみもあるし、勉強のモチベもアップするが、遠隔授業の動画を何回も見返せる勉強方法が意外とありがたかったことに気づいた。
まだ完全にコロナ禍が収まったとはいえない状況の中で、対面でするならば、対面でしかできないような、雑談を踏まえた教授との繋がりとか、他の生徒とのコミュニケーションをとれるグループワークなどをしてほしい。 前期はそれらがほとんどなく、遠隔のままで良かった。
出席のシステムをもっとやりやすくしてほしいです。
紙とPDF、レジュメを選べるようにしてほしい。
対面授業だけでなく、オンライン授業も選択できるシステムも継続していただけると有難いです。
日中働いているが非同期型オンライン授業のおかげで昼間開講の講義を受けられている。社会人学生にとって夜間開講の共通教育科目は非常に選択の幅が狭く、その点オンライン授業では時間の制約がなく受講しやすい。共通教育科目ではこのような形態を継続する意義があると思う。
その時にきちんと聞き取れなかったり、1回聞いただけで全てを理解する事はできないので、何度も復習できるように音声だけでもいいし、期間1週間でもいいからmoodleに授業を残して欲しい。
講義資料をMoodleで閲覧できるようにして欲しい。 出席による問題があるのであればパスワードなどにして講義に出た人のみ見れる形式でも構わない。
我儘ではありますが、資料が事前にアップロードされる環境に慣れてしまっているため全ての授業で持続して頂けると大変ありがたいです。
授業の合間に休憩を挟んでほしい。
対面授業を受けたあとに家に帰ってからムードルで出席入力をさせる、という手法はやめてほしいです。ムードルで出席管理をするにしても、授業内で生徒にスマホやPCでムードルの操作をさせてください。授業にせっかく出たのに、家に帰ってからムードルを開くのを忘れて欠席になってしまったことが何度かあったため。
気軽に声を出してZOOMで会議ができる場所が大学に欲しい。
ムードルで授業内容を確認できるようにしてほしい。
話すスピードが遅すぎたり、レジュメの内容を読み上げるだけの授業は大変面白くなく、モチベーションを得られないためやめて頂きたいです。
正当な理由で已む無く欠席をした場合に後から授業の動画が見られるようにして欲しい。
空調をその場その場であった温度設定や換気を行って頂きたいです。
対面授業と非同期の授業を両立させて、選択できるようにしてほしい。
授業で使う教室のキャパを事前に詳細に把握して、ゆとりを持った教室を抑えてほしい。
対面授業を中心としつつ、資料などの形で復習ができるようにしてほしい。

マスクの着用を統一してほしい。
できる限り対面授業を続けてほしい。
話を聞くだけの授業なら対面でなくても良いと思う。
希望者には非同期型、同期型問わず遠隔で受講できるようにしてほしいです。
出席しているのに、帰宅してからの課題を提出しないと出席が認められないというのはおかしいと感じた。出席していない人でも、その課題を提出さえすれば出席扱いになることがあるのは不平等だ。出席を取るのであれば授業の場でやってもらう、または出席と課題の評価を分けるなど対策をとってほしい。
空席を作らなければならないのが憂鬱。
換気してください。
このまま続けてほしい。
宿題無くしてほしい。
オンライン講義が始まって紙資料が少なくなったという利点があったが、対面になって紙資料が配られるようになったのはあまり好ましくないと思っている。
テスト範囲などはしっかりと授業内で提示してほしい。
とにかく、事務職員の半数以上は、仕事を遊び半分でしている。特に若い女性がひどい。
大人数の授業はもっと広い教室にしてほしい。
原則対面なのに、ズームにする先生がいて、オンラインにしないでほしい。

資料３.「2022年4月以降、原則対面授業になり、あなたの生活に、どのような影響がありましたか。自由にお書きください。」に対する全回答（自由記述）

人と直接会ったり移動したりするのが無駄に思えた。対面授業だとそれが毎週あるので、苦痛だった。
生活のリズムが整った。運動する機会が増えた。オンライン形式より授業前の準備時間が長くなった。
友達と気軽に会える機会が去年より多くなった。
友人が増えて、大学生活が楽しくなった。
授業に合わせて早起きするようになった。
人間関係の悩みが生まれた。
今までの2年間、大学は自分たちの権利とかけがえのない時間を奪っていたということに気づいた。
対面授業でディスカッションや発表など、遠隔授業でやり過ごしていたものと直面して、自分の無能さを感じ、退学するかどうか悩んだ。
外へ出る機会が増えたことで、気持ちが明るくなった。
対面が増えて、両立が難しくなっていった。
学業に前向きになった。
対面では、通学がめんどくさいと感じる。
急に生活が変わり、精神的にも身体的にも苦しかったです。遠隔授業で十分学べるにもかかわらず、対面で授業する意味があるのかと疑問でした。対面授業も経験して、効率が悪いなと思いました。人によって対面、遠隔のどちらがいいかは分かれると思うので、選択できる仕組みであればよかったのになと思っています。（期待は全くしていませんが。）
小課題が少なくなり活力が生まれた。
アルバイトに入れる時間が減り、教科書代や国民年金のやり繰りが大変になった。
家が遠いため、通常は授業開始の1時間前に家を出るのだが、少しでも電車が遅延していたりしていると遅刻する。天気が悪い日などは授業開始の1時間半～2時間前に家を出ることもあったが、それでも遅刻してしまう日もあり、自分は時間を考えて余裕を持って行動しているし頑張っているのに、それを周囲に理解してもらえないのがしんどかった。
自由な時間に受講出来るわけではないため生活リズムの見直しから食事の時間まで大きく変わった。
不規則な生活習慣になった。

授業を入れる時間にもよるが比較的生活リズムの良い生活をすることが出来た。しかし、私の場合夜間主なので夕食を食べる時間が以前より遅くなることが多くなった。
バイト先と大学と家との行き来が大変。
食事代や、ガソリン代など費用が増えた。学校に行くのが面倒に感じることがおおくなった。身だしなみに気を付けるようになった。
友人関係等楽しくはなりましたが1倍速の世界だと、どうしても授業が長く感じてしまいます。また、通学も楽ではなく、たまに本気で疲れて何もしたくない日が生まれました。しかし、これも今まではあたり前にこなしていたことなので日々の積み重ねで回復していくと考えます。また、通学も楽ではなく、たまに本気で疲れて何もしたくない日が生まれました。しかし、これも今まではあたり前にこなしていたことなので日々の積み重ねで回復していくと考えます。
毎日決まった時間に授業に行くため、生活のリズムが定まった。
対面となった講義では学校に行かざるを得ず、コロナ感染の不安を覚えていた。また、通学の負担が増えた。
大学に行くための準備や通うために時間がかかるため睡眠時間などの自由のできる時間が減った。
友達が増えた。
大学に行くための通学時間の確保必要なため、時間が減ったように感じた。
人と会うことが多くなった。
サークル活動がしんどくて何もやる気が出なことがあった時期に、対面の出席確認があるのが大変だった。
それまでの2年間ずっとオンラインだったので対面授業に出る体力が無く、今期の履修科目数は減ったにも関わらず、それまでオンラインでフルで履修していたときと同じくらいの疲労度だった。
総じて良い影響があったのではと思います。無理矢理にでも学校へ行かなければならないので、生活リズムが整ったのは特に良い影響でした。
空きコマに自習室で資格勉強をするようになり、定期的に勉強する機会を設けることができている。また、授業で友達がたくさんでき、大学に行くのが毎朝楽しみになった。朝起きて洗濯物を干してきちんとご飯を食べて大学に行くというルーティーンがあまり負担なく確立された。
授業時間が定まるようになったので比較的朝早く起きるようになった。
周りの人の声が煩わしく、苛立つことが多くなり、大変だった。
入学してからずっとコロナの学年なので、対面で人との関わりや、同年代の雰囲気を感じることで、大学生という自覚がようやく持てた。
先生や友人と会う機会が増えて嬉しい。
生活習慣がよくなった。
対面が増え生活が規則正しくなった。
移動の時間をしっかりと計画する必要が出た。
規則正しい生活に変化した。
生活リズムが改善された。
生活リズムが良くなったが、室内屋外と行き来をするなかで気温の差が大きく、体調が悪くなるときがあった。
友達が増えて楽しいが、移動が多くなり授業時間が増えることで疲れてしまうし自分の時間があまり持てなくなった。
1週間毎日外に出るので、生活のリズムを確定できるようになった。
対面授業になってから、体力的に苦しい部分も多くあったが、授業をより集中して聞くことができ、理解が深まった。
友達が増えた。
通学のため早起きするようになった。
ほぼ毎日学校に行くようになり、生活リズムが整い、心も体も健康になったと感じる。
朝はやめに起きるようになった。また、夜はやめに寝ようと努力するようになった。
非常に忘れっぽいので、数回だけ対面の授業があると行き忘れてしまい泣いた。対面授業自体はとても楽しい。
移動時間や準備時間に時間を割かねばならなくなり、一日の間で不自由な時間が増えた。
アルバイトに入れる日数が減った。
勉強へのやる気は出た一方、5月病のような気分の落ち込みがあり、支障をきたした。
時間の制約ができて、不便になりました。

話せるような友達がいない自分と、授業に出ている学生との間で比較し、孤独を感じて落ち込むことが増えた。
友達と話す機会が増え、そのおかげで友達の友達と仲良くなることができ、交友関係を広げることができた。
人間らしい生活をするようになった。起床後服を着替えるなど。
必然的に外に出る機会が増えたので、気分が良かったり、一日が充実していたなと思える日が増えた。
友人との関係が深まった。
感染することに不安はありましたが、割り切って出席しました。
人と話したり外に出る機会が増え、朝ちゃんと起きるようになった。一方授業が朝から、サークル活動は夜という感じだったので睡眠障害に近い症状が出た。
行動範囲が増えた。
以前より早起きするようになった。
移動時間が増えた。 起きる時間が早くなった。
必然的に外に出るので、健康にいいと感じました。
対面になったはいいものの、思い描いていた大学生生活とは全く違い、絶望している。 一年生の時の遠隔はやっぱり辛かったなと改めて思った。
時間の融通が利かなくなったため、趣味に割いていた時間が減った。
一年生なので最初から対面授業だった。高校までは非同期遠隔という形態がなかったので新鮮だった。
講義に合わせた生活習慣になった。
外に出る回数が増えた。
睡眠時間を確保することが難しくなった。
自分時間でスケジューリングするのではなく、授業があって、空きコマがあって、どのように大学での時間を過ごすかというスケジューリングに切り替わった。
友達作りに積極的でないため、友達ができず、3年後期のためこれからも可能性は低い。
授業数は少ないが、1回生の頃に戻ったなという実感があり、授業も楽しく感じた。
授業が全部対面になり、ほぼ毎日大学に行くようになった。遠隔授業だけだと一日中家から出ないこともあったが、対面になってから外に出ることが多くなり、多少健康的な生活になった。人と関わることも増え、新しい友達もできた。でも急に対面ばかりになって、前期は授業をサボってしまうことも少なくなかった。
体力的にも時間的にも、圧倒的にオンライン授業の方が楽なのは間違いない。そして何度も見返し復習ができる点でとても助かった。対面だと一度つまずくと巻き返しを図るのがとても困難だと感じる。対面が向いている授業（ディスカッションなど）であればその限りでないが、一方的な授業形式だとオンライン形式を継続してほしいと思うことが多い。
忙しくなった。
熱中している部活に割く時間が削減した。
朝が辛い時がある。
友人がいないため対面授業が嫌に感じた。
外出機会が増えた。
講義のために大学に行くことが増え始めたので、1、2回生では利用の仕方がわからなかった、利用ができなかった施設（図書館など）を、積極的に使うようになった。
睡眠時間が減った。自分に使える時間が減った。
普段遠隔だったコマが対面になり生活リズムが少し崩れた。
対面授業での生活リズムに体が追い付かない時期があった。
家で作りたてのご飯を食べることができず、学食は人が多く、並ぶのに時間後かかり早く食べなければならないという意識がありゆっくり食べられない。
早起きするようになった。
実家暮らしであるため、一限の授業に行く際に早起きをしなければならず、朝がしんどかった。
遠隔メインの生活の時と同様に部活動とアルバイト、学業の両立にチャレンジしたが思っていたより体力的な負担が大きかった。

対面授業は時間を縛られるため、アルバイトのシフトに自由が利かなくなった。
人が多くて疲れた。オンライン授業ばかりも嫌だけど、週何回かは対面授業だけでなく、オンライン授業もあった方がメリハリがつく。
自由時間は減ったがとても充実していると感じている。
人と会う機会が増え、楽しくなった。
自転車通学のため、体力が回復した。また早起きするようになった。
移動に時間がかかるため早起きしなければいけない、授業のためにかける時間が増えるなど負担が増えた。
遠隔授業に慣れていたこともあり、疲れやすかったです。
人と会う機会が増えて、活動が活発になった。
人と会う機会が増えて刺激が増えた。
友達とよく会うようになった。
自由な時間が増えた。
生活リズムを保ちやすくなった。
生活リズムがくるっていたので遅刻ばっかりしてしまう、授業に出れないこともある。 でもやっぱり他人と会える方が楽しいので好きです。
旅行に行く頻度が増え、生活全体のモチベーションが上がった。
規則正しい生活になった。
授業出席のために朝起きるのが辛かった。
今までと変わらず、過ごすことができた。
外出機会が増えた。
コミュニケーションが増えた。
食品が高騰してきてお金を稼がなければならないが、バイトに入れる回数が減り、収入が減ってしまった。対面授業でもオンライン上でコメントを求める授業が多く、課題の量が変わらないまま対面授業が増えた感じで毎日が忙しく感じる。
いきなり全て対面授業になったので、ストレスを感じた。
学校に行く準備をしなければいけないから、時間がかかるので、ぎりぎりまでの予定はいれられなくなった。
毎日学校に通うことで、生活のリズムが安定した。
私生活にメリハリがついた反面、洗濯、入浴など対面で欠かせない作業が増えたのでめんどくさくなった。
外に出る時間が増えた。
電車代が負担になった。
生活リズムが変わった。朝起きることができず遅刻してしまうことも多くなった。人間関係が授業を通して生まれることはそこまでなかった。
1回生なので比較できないが授業に赴くことと非同期の遠隔授業の差異が難しかった。
友達との時間が増えてとても楽しかったです。
マイナスの気持ちになることが増えた。
「自分は過年度生である」という罪悪感から他人の目が非常に気になった。
通学で利用している電車やバスでのコロナ感染の不安が増加した。
遠隔の方が楽ではあった。まあ一長一短というところか。
就職活動と授業との両立が難しかった。
夜間主コースなので仕方ないことですが、7限を取ることで寝る時間が遅くなり、持病のうつが悪化しました。
楽しい。
通学の大変さはあるものの、より能動的に授業に取り組めるようになった。
基本的に対面である必要性があるとは感じない。仕事も完全在宅でしているため、遠隔でできることはこのコロナ禍でわかったと思うが、結局対面のほうがいいと戻り始めたのは非効率的だと感じる。夜間主は前期は非同期型が多く、良かったが、後期になってから対面型が増え、実際に受講してもやはりどうしても対面である必要性を感じられていない。体力的にも疲れる＆気疲れをしてしまうので、遠隔に戻してほしい。

友人と簡単に会うことができるようになり嬉しく感じるとともに、大人数での講義に懐かしさと遠隔授業の2年間をもったいなく感じた。
少し通学する手間がかかることが面倒に感じた。
生活リズムを整えるきっかけになった。
友達ができて、とても充実している。
人と関わる機会が増えたので知り合いが増えた。
疲れが増えた。
生活リズムが整った。
勉強時間が多くなった。
ある程度規則的な生活を送る事になった点と、外に出る＝陽の光を浴びて体を動かす機会が増えた点、対面して他者とコミュニケーションを取る機会が増えた点から、身体的にもメンタル的にも健康になったように感じる。また、パソコン画面を見る時間が減ったため、眼精疲労とそこから来る頭痛や、取れにくいタイプの疲労が溜まる機会が少なくなったように思う。
友達と受けることができて楽しかった。初めて話す人との交流もできて面白かった。
通勤費と通勤時間がかかって通常よりお金や時間がかかるようになった。
オンライン形式の授業時と比べ、学習意欲をより持てるようになった。一方で久しぶりに対面授業に参加した際に、緊張を覚えることがあった。
友達と頻繁に会えるようになって楽しかった。
移動に費やす時間が増加したため、自由に過ごす時間が減少した。
友達が作りやすく、毎日の学校生活が充実した。
ほとんど毎日、朝から夜まで大学のために外出するようになった。
毎日学校に行くようになったので、授業を好きな時間に受けることができなくなり、バイトの時間や就寝時間が固定化された。
友人と空きコマに談笑できることが楽しいので大学に行くのが楽しい。 授業で分からなかったところを友人や先生にすぐ聞ける。
外に出て大学の活気を感じるだけで人間として生きていることを感じた。
人と会えるのが、楽しかった。けど、原則対面になった段階では、ほとんどの授業を取り終えていた。
一年生のときと比べてアルバイトのシフトが組みにくくなりました。
自由時間が少なくなり、趣味にかける時間が少なくなった。
アルバイトをする時間帯が変わった。
友人と昼ごはんが食べられた。
原則遠隔授業だった時に比べて、生活のリズムが乱れにくくなった。友人と会う機会が増えたため、友人と雑談や相談をする機会も増え、不安や寂しさを感じることが減った。
生活に規則性が生まれ、体調がよくなった。
友人ができず1人で講義を受けていることに孤独や不便さを感じることがある。
今年度入学のため以前のことはわかりませんが、入学当初から対面授業が行われていたことで講義などで友人を作ることができ、わからないことを抱え込むことなく相談できたり、顔を合わせて会話が出来たりと充実した大学生活ができている。

資料４.「原則対面授業が続く中、行動制限はないものの、新型コロナウイルス感染者数が増加した時期もありました。このことによって、あなたの生活に、どのような影響がありましたか。自由にお書きください。」に対する全回答（自由記述）

県外に数日間旅行に行った友達と授業で会うのかもしれないと思うと、少し戸惑った。
仕方のないことではあるが、サークル活動が度々停止し、練習時間が減ってしまった。
遊びに行ったりしたいが、少しコロナが心配で遊びに行くのを自重した。
店に立ち寄らずに家に直帰。
対面授業が不安だった。

授業のない日には極力外出を控えるようになった。
親が介護職であるため、感染者が増えると気をつけて生活するようになった。
人混みを避けた。
人と距離をとって話そうとした。
コロナに罹るかもしれないという不安が少しあった。
授業中、人と至近距離になること、特に他の学生と前後の席に着席するのが不安だった。
実家暮らし、親の職業柄、生徒である私が家にコロナウイルスを持ち込むことは非常に問題であり、大学に入学して以来、細心の注意を払い続けた。結果として今まで未感染であるが、代わりに旅行や飲み会などに参加できず辛い思いをした経験が多くなった。
できるだけ家に居たいと思った。
旅行などの計画を取りやめなければならないことがあった。
インターン参加できるかどうか不安にはなったが結果として影響はなかった。
飲みに行く機会が減り肝機能の数値がよかった。
感染者が増えても授業は対面のままで進んだのに対し、サークル活動については活動条件を緩和するどころか、「今1度サークル内でルールを確認するため」という理由で、対面活動を停止されることもあった。今は、活動停止は妥当な指示だったと思うようにしているが、当時は大会出場を控えていたこともあって、授業とサークルの対応の差に多少の憤りを感じていた。
特にはございません。ただ、両親に外出を自粛しろと口うるさく伝えられていたのは事実です。実際それによって外出もそこまでしておりませんでしたし、そういった意味では私の生活に大きく影響を及ぼしていたなと思います。
バイト先の人が感染者になってそのために濃厚接触者になってしまい、サークル活動全体が止まってしまったことがあった。全体に影響を及ぼしてしまったのが精神的に辛く感じたことがあった。
特段の変化はなかった。しいて言えば所属しているサークルが陽性者の発生により、活動が一時停止したため一時期運動時間を確保する機会が減ったことが挙げられる。
外出がためらわれた。
もし自分が感染したら愛大生なのにと非難されないかと心配だった。また、対面での部活動が制限されないか気を揉んでいた。
感染の可能性について精神的に不安になった。
人と会わなくなった。
感染者数の増加に伴って不安はとても大きかったので外出を減らした。
コロナになるのが心配だった。
飲食店のアルバイトが一切入れなくなったので困った。
サークルのコンサートの開催ができるか否かでスケジュールが定まらず、煩わしかった。
外出を控えて感染対策になる行動をとった。
実家が自営業であるため、一人でも感染すると家業に影響が出ることから、「絶対に感染してはならない」という恐怖があり、気疲れすることが多かった。
部活に規制がかかった。
サークル活動の自由が制限され、その影響で勉強へのやる気等にも支障がかなり出た。
ゼミでの食事会が中止になった。
外出がしづらくなっていた。
外出特に飲食は全て控えました。
より一層、感染対策を徹底した。
行動制限はなかったけれど、外出はほとんどしたかった。
サークル活動を維持するために、会食やカラオケなどの娯楽が制限された。その時期は鬱気味だった。
長時間や大人数の食事やカラオケの制限が多少あります。
もう諦めた。

授業が終了したらすぐに帰宅するようになった。
バイト先の客が減った。忙しくなくて助かったが、居酒屋系の飲食店のため感染への不安もあった。
授業はあるのにサークルはできないという状況が生まれた。
アルバイト先の飲食店のお客さんが減って、バイトが休みになることが増えた。
仕事が繁忙を極めていた。
週末などに実家に帰ることがよくあるので、講義以外の外出はほとんどしないようにしていた。
普段関わりのある人が新型コロナウィルスに感染することが増えたように感じる。
部活動に関してはまだまだコロナ前より制約があり自由度が低い。日常生活と近い制約に変更して頂きたい。
自分も感染したことでアルバイトに行けず、収入がない時期があった。
対面授業に行くことが不安だった。（怖かった。）
サークルの制限はかけられ、ほぼ活動出来なかった。
アルバイト先の関係で、感染対策に気を使わなければならなかったことが個人的に大変でした。
密閉されてはいないものの、同室にて講義を受けることになるため、特に長期休み明けは感染しないか心配だった。
飲食店などに行く時に気をつけた。
旅行を自粛する事があった。
授業対面なのにサークルや部活はありませんという状況に不満を持つ学生が多数見られた。
感染者増加によりサークル活動がほとんど制限された。
自分も一回かかってしまったのですがまあもう仕方ないかなの結論に至りました。
コロナに感染し、2週間の自粛生活を強いられた。
コロナウイルスによって外出することに抵抗があり、友人と遊びに行く回数が減少した。
外出自粛。
旅行等を控えるようにした。
外出する機会が減少した。
サークルがなかなか再開せず、参加できない状態が続いてタイミングがつかめなかった。
授業は対面で実施されているのに、サークルの活動を止められ、長い間サークル活動が出来なくて悲しい思いをした。周りの友達にコロナにかかった人や濃厚接触者になってしまった人が増えて授業を一緒に受けることができない友達がいてかわいそうに感じた。
1年次に授業がほとんど遠隔でサークルも動いておらず、今更動かれてももう手遅れという感じになっている。
対面授業を受けるのが不安だった。 でも、大学は強行して授業を行った。
学校に行く以外はどこにもいけないと思った。
外食を控えた。
感染のリスクを不安視しながら学校生活を送っていた。
家族からの心配の声が大きかった。
自分自身は感染することはなかったが、バイト先の同僚や地元の家族などは感染しており、少し怖いと感じた。
遊ぶのを控えるようになりました。
受講者数の多い授業はコロナ感染の不安があった。
大学があり松山に出てくるので、交通費分のもとを取るためにバイトをしようという気持ちになりました。
友人が感染したことなどでより一層危機感を持った。
手洗い・うがいなどの対策を心掛けるようになった。
サークル活動が突然停止になったり、対面の授業を受けに行くのに体調面や感染面で不安を感じることがあった。
食堂や外でご飯を食べることに抵抗があり、昼休みが少し辛かった。
急にサークルが止まってつらかった。隣や他の大学は普通にしているのにもかかわらず。

コロナ対策を気にして十分に楽しめないことがあった。
気持ちが閉鎖的になった。
外出の回数が減った。
特に不便は感じないが、感染拡大について大学から行動を規制することを言っていたことが社会の傾向と違うため理解に悩んだ。
自分が感染者になり、授業に出席出来ないのではないかという不安があった。
身近な人に感染者が発生し、危機感を感じていた。
自由に出かけにくい状況の時があり、不便に感じた。
外食を控えた。
消毒や換気など感染対策が取れていると感じたし、先生も生徒も気にかけていると思う。
感染予防を徹底した。
行動範囲が狭くなった。
マスクを外せなくなった。
特にない。バイトのシフトに入りづらくなるくらい。
受講者が多い授業は特にコロナウイルスが気になってしまい教室の使用が嫌でした。前の授業で少し前まで他の人が利用していたと考えるとすぐには先につきたくなかったです。
感染が心配で、サークル活動への参加を控えようか悩んだことがあった。
感染対策に敏感になった。
自分自身は特に感染や濃厚接触はありませんでしたが、家族や学内の知人、また普段から応援しているアーティストやアイドル等が感染・濃厚接触者になることがあり、大きく不安になりました。

資料５「2022年の夏休みは、行動制限はありませんでしたが、このことによって、あなたの夏季休業期間での生活においてどのような影響がありましたか。自由にお書きください。」に対する全回答（自由記述）

行動制限がなかったためか、新型コロナウイルスに感染した。
去年よりどこかに出かけることが多くなり、気分転換がしやすくなった。
2年間大人数が集まりイベントに参加できていなかったが、参加できた。
時々友人にあった ほぼ家にいた。
帰省できた。
金が無いのでどこにも行っていない。
夏季休暇は旅行など、コロナ前の生活に近い経験ができて、充実したものだった。
バイトを増やした。行動制限がないことが恐ろしいと感じ、県外に出ることはできなかった。
県外に行くことが増えた。
問題なく楽しめた。
行動制限はなかったが、コロナが流行っていたのでいつも通りの生活だった。
友達と遊べた。
様々な場所に友達とドライブしに行く機会が去年に比べて多くなった。
旅行に行きました。
行動制限はないものの、インターンシップ研修があったため、感染対策には注意を払い、家で過ごすことが多かった。
バイトをたくさん入れた。教習所に通った。
様々な場所へ遊びに行けた。
朝から夜までしっかりとアルバイトに取り組めた。
サークル活動はコロナ陽性者対応のため停止され、出来なかった。行動制限が無かったことで、五日間のインターンに行くことができたのは非常に良かった。また、旅行に行くこともできた。
帰県後の制約が緩和されたため、安心して帰省することができた。夏休みに帰省出来たのは2年ぶりだったので嬉しかった。

総じて良い影響があったのではと思います。自由に両親の実家へと帰省したり、旅行に行ったりしておりました。特に病気になることもなく楽しめたため、私自身の心身に良い影響があったと考えております。
1回生のときよりも活発に行動することができた。バイト先と家との行き来だけでなく、旅行に行ったり友達とお泊りをしたり、長期休みだからできる過ごし方や楽しみ方ができたように思う。
インターンが比較的従来の方法に戻った状態で行えたと思う。
特段の変化はなく、例年通り実家に帰省した。
制限がなくなったことによって友人と遊べるようになった。
県内だが気軽に外に遊びに行くことができた。
サークルや旅行に行った。
一昨年、昨年よりも様々な場所に行くことができた。
去年よりたくさん遊べた。 旅行にたくさん行った。
前年と比べて後ろめたさなくたくさん旅行することができたので、良い夏季休業を過ごすことができた。
夏季休業期間はインターンシップに忙しく、特に影響を感じなかった。
感染対策に気をつけながら夏休みを十分に楽しむことができたと思う。行動制限がないことで前よりも気楽に旅行に行けた。
長期休暇を自分なりに楽しむことができ、充実した休暇になったと思う。
たくさん県外に出ることができた。
自分自身がコロナウイルスにかかった。
部活の活動が制限された。
サークル活動の自由は大学より制限されており、県外や海外に行っている学生もいる中、憤りを感じていた。
外に出て活動してはいけないという考え方が根付いてしまっていたため、外で活動するのに引け目を感じた。
旅行に行ったり実家に帰って友達と会ったりした。
県外へ旅行することができた。
帰省がなかったので3週間、兵庫県へ帰省できましたし、日常的な遊びや旅行、インターンシップも問題なかったです。また、徳島県で合宿免許を行いましたが何も問題なく終えることが出来ました。
楽しむことができた。
感染は依然ありましたので、不要不急の外出は控えました。
県外に行くことができた。
旅行に行ってもいいのか、どこまで行動していいのか迷いました。結果、旅行は予定は立てていましたが諦めました。
マスク、手洗い等を気をつけて、行動した。 もう我慢の限界。
久しぶりに家族と旅行に行くことができた。
バイト三昧だった。バイトと外食以外、外に遊びに出るのは極力控えた。
イベントなどが増え、それに参加する回数も増えた。
県外へ出様々な経験を得ることができた。新しい世界に触れる能動的な体験が得られた。
ここ2年と比べて色々なところに行けた。初めて見る景色や初めて食べるご当地グルメに出会えて、視野が広がったと思う。
数年ぶりに旅行に行けた。
外出を自粛していたため夏休みは一切出掛けられずストレスだった。
祭りなども再開されるものがちらほらあって友人と行けた。
友人と遊びに行ける範囲が広くなった。
旅行に行けた。
注意を払いつつではあるが、県内の親戚に会いに行った。
他地域では、感染が広がっている所も多くあったことに加え、親の職業の都合もあり、昨年と変わらず実家で過ごした。
実家への帰省やアルバイトなどを積極的に行うことができた。

県外に出ることができた。
県外にいる友人に会いにいくことができたため大学生活の数少ない思い出ができたと思う。
昨年以上に日帰りの旅行などが出来て充実していた。
部活動に打ち込めた。
旅行に行けてリフレッシュできた。
コロナに罹った。
1週間ほどの実習に参加することができました。
旅行などに行けて楽しかった。
1年生の頃のように充実していた。
友達と遠出し宿泊がはばかられ、旅行に行くことが出来なかった。
やはりいろいろなところに行っていい影響をもらったと思います。一回生からこれぐらい動きたかったです。自分に何もなさすぎて怖いです。
行きたかったライブに行けたが、感染したことで夏休みの貴重な2週間を満足に過ごせなかった。
自由に外出できるようになったため、楽しい行事をたくさんすることができた。
比較的自由に過ごすことができた。
コロナにかかった。
3年ぶりに自分の好きなアーティストが来日してライブをすることになったので東京まで行ってライブに行き、楽しむことができた。以前よりも県外に出ても周りの目が気にならない状況になって嬉しかった。
ゆっくり身体を休めた。
実家に帰って、家業の手伝いをすることができた。
体調を悪くしたらバイトに支障が出るため結局行動を制限したように思う。
部活動自体の制限は多かったため、活動や遠征を行うことがかなり難しかった。しかし、旅行など個人での活動は行うことができた。
大阪の実家に帰省した。
対面授業により実際に会う機会が増加したため、友人との距離が近くなり、遊ぶことが出来た。
バイト。
外に出ることが多く、コロナウイルスに対する意識が低下していた。
有意義な夏休みを過ごすことができた。
充実してた。
遠方にいる普段会えない友人との再会を断念したことが幾度かあった。
県外に旅行に行くことができた。
行動制限がないといっても家族と同居している身のため、コロナ対策の面から県外に一度も出られず退屈な夏休みで終わってしまったように感じる。
就活をしやすくなったり、休暇を楽しむことができた。
楽しく過ごしました。
就職活動があったこともあるが、遠出をすることがなかった。
旅行した。
大学生活二年間行けなかった分、旅行にたくさん行きました。
最高でした。
行動制限はないが、コロナの人数は多く返って自粛した生活を送った。
コロナがなければもっと外出していた。
特にない。旅行に行って、バイトをして夏季休暇を楽しんだ。
濃厚接触者になり、自宅待機をしていたためアルバイトに行けない日があった。

コロナに気をつけながら部活動に専念できた。
サークル関連で行動制限があったため、窮屈であったのに変わりはなかった。
実家に帰省し、地元の知人と数年ぶりに会うことが出来た。私に限らず、このような経験は自分自身の成長・変化を実感し、現在の自分や今後の大学生活、ひいては大学卒業後の人生等について「客観的に」考えられる貴重な機会であるため、帰省しやすくなった事が結果的に最も有意義な影響であったように思う。
家にいるか、実家の宮崎に帰省するかで特に遊びには行かなかった。
県外にかなり行った。
東京に遊びに行くことが出来た。
昨年度等に比べ、外に出る機会が多くなり楽しく過ごせた。
旅行をしたり、ゆっくりと地元に帰って友達や家族と会ったりする時間が取れた。
友人と遊べるようになった。
地元に戻った友人と会うことができた。
手洗いうがい、マスクの着用、アルコール消毒を徹底しながら県外旅行を沢山することができ充実した夏休みを過ごすことができた。
特にない。気楽に移動できた。
一度旅行に行く機会がありました。
外出する機会は減ったように思う。
自由に行動できた。
県外へ行くことができた。
外出することへのためらいが少なくなり、気晴らしのために外出することが増えた。
長距離のハードルが下がった。
帰省することに対して不安が薄れた。
帰省することができ、家族や地元の友人と気がかりのない状態で会うことができました。

コロナ禍における愛媛大学法文学部「基礎外国語」の教育実践

― 教員による授業の取り組みと学生アンケート調査の結果を中心に ―

池　　貞姫[1)]・秋谷　裕幸[1)]・諸田　龍美[1)]
柳　　光子[1)]・モヴェ・エリック[2)]
野上さなみ[1)]・野村　優子[1)]・菅谷　成子[1)]

1）愛媛大学法文学部
2）愛媛大学教育・学生支援機構共通教育センター

Second Language Education（SLE）under the COVID-19 Pandemic at the Faculty of Law and Letters, Ehime University: How We Have Coped with the Challenge, Teaching Experiments and Experiences with an Overview of Student Surveys Conducted in SLE Classes

Jong Hi Chi[1)], Hiroyuki Akitani[1)], Tatsumi Morota[1)], Mitsuko Yanagi[1)], Eric Mauvais[2)], Sanami Nogami[1)], Yuko Nomura[1)], Nariko Sugaya[1)]

1）Faculty of Law and Letters, Ehime University
2）Center for General Education, Institute for Education and Student Support, Ehime University

はじめに

本稿は、新型コロナウイルス感染症に見舞われた、いわゆる「コロナ禍」において、2020年度愛媛大学法文学部の「基礎外国語（ドイツ語・フランス語・中国語・朝鮮語・フィリピノ語）」の教育がどのように実践されたのか、概観するものである。まずは、2020年度末に行った学生アンケート調査の結果を示した上で、各担当教員による授業の取り組みを紹介し、改めて、コロナ禍における外国語教育の意義をふりかえっていきたい。

１．法文学部「基礎外国語」の概要

コロナ禍における「基礎外国語」の教育実践を述べる前に、ここでは、「基礎外国語」の設置に至る経緯や体制の実態について言及しておこう。

１．１　「基礎外国語」の位置づけ

現在、愛媛大学では英語以外の第2外国語科目は、全学共通教育（法文学部昼間主コースを除く）においては「初修外国語」、法文学部昼間主コースでは、専門入門科目として「基礎外国語」の名称で提供されている。

2016年度からの学部改組に伴い、法文学部では、「グローバル人材の育成」という教育目標を掲げ、学科統合がなされた。すなわち、人文社会学科の下に、昼間主コースにおいては、法学・政策学履修コース / グローバル・スタディーズ履修コース / 人文学履修コースの3つを設置するという抜本的な改革を行った。その一環として、第2外国語を専門入門科目「基礎外国語」と位置づけ、1回生の必修科目とする教育体制を敷いた[1)]。

１．２　「基礎外国語」の実態

ここでは、改組以降の「基礎外国語」の授業時数・クラス数、担当教員ならびに各外国語の受講生数を示すことにする。

１．２．１　授業時数・クラス数、担当教員

「基礎外国語」科目は、1回生を対象としたクォーター制で、通年（前学期1Q・2Q、後学期3Q・4Q）週2回（火金5限）の授業となっている。ドイツ語・フランス語・朝鮮語は2クラスずつ、中国語は3クラス、フィリピノ語は1クラスの全10クラスの編成である。担当教員は、基本的にネイティブと日本語母語話者のペアで、それぞれ文法と会話の役割分担をしているが、日本語母語話者による単独授業もある。

１．２．２　受講生数の変遷（2016～2020年度）

法文学部改組以降の2016年度から2020年度までの、外国語ごとの受講生数は、以下の表1の通りである。

表１．各外国語ごとの受講生数（括弧内は再履修・追加履修者数）

基礎外国語	2016	2017	2018	2019	2020
ドイツ語 (2クラス)	75	57 (5)	39 (8)	61 (4)	61 (4)
フランス語 (2クラス)	51	70	48 (1)	60 (3)	48 (3)
中国語 (3クラス)	105	139 (16)	153 (20)	131 (11)	134 (10)
朝鮮語 (2クラス)	62	61 (8)	85 (4)	76 (7)	51 (5)
フィリピノ語 (※)	4 / 7	4 / 3	5 (1) / 5	6 (2) / 5	13 (1) / 8
合　計 (10クラス)	297	331	330	334	307

※フィリピノ語は、共通教育「初修外国語」と同時開講。
　初修外国語としての他学部履修者数も右に併記。

２．コロナ禍における大学・学部開講方針と「基礎外国語」授業実施形態の分布

コロナ感染症への対応が始まった2020年度に、法文学部は、愛媛大学の「授業の開講方針」[2)] を受け、前学期の第1Q・第2Q 期間は遠隔授業のみとなり[3)]、当然ながら基礎外国語科目も遠隔授業の実施となった。後学期は、大学と学部の方針によって、3Q は対面授業が可能となったが、4Q 途中でコロナ感染第4波が襲来したことにより、再び遠隔授業の実施のみとなった。以下に、基礎外国語の第1Q から4Q までの授業形態とクラス数の内訳を表2に示すこととする[4)]。

表2からわかることは、「基礎外国語」は、前学期において遠隔同期型の授業の割合が最も多く、次いで、遠隔非同期型も行われていたということである。後学期は、対

表2．2020年度基礎外国語の授業形態とそのクラス数（10クラス）

	①遠隔同期型	②遠隔非同期型	③遠隔同期 / 遠隔非同期併用型	④対面	⑤対面 / 遠隔同期併用型	⑥対面 / 遠隔非同期併用型
１Q	8	1	1	0	0	0
２Q	8	1	1	0	0	0
３Q	0	0	1	5	4	0
4Q(~12月)	0	0	1	5	4	0
4Q(1月~)	8	1	1	0	0	0

・①遠隔同期型―Zoom や Teams などのネット会議システムを使った、リアルタイムの授業形態。
・②遠隔非同期型―Moodle などのシステムを利用し、教員があらかじめ作成した教材（動画を含む）に学生が随時アクセスして学ぶ形態と、修学支援システム等のメールにより教材や課題を与え、指導する授業形態がある。

面授業の実施が可能となったことから、3Q・4Q 前半で、多くのクラスで対面授業が導入された。先述した通り、基礎外国語は週2回ペアの教員で行うのが基本であり、両方対面・両方遠隔同期型の授業もあったが、対面と遠隔、もしくは遠隔でも同期と非同期という組み合わせで、バランスを取る場合も多かった。第4波が襲来した2021年1月以降は、遠隔同期型の実施が最も多いという結果になった。

３．学生アンケートの実施ならびに結果と分析

ここでは、年度末に Moodle 上で行った基礎外国語アンケートの結果を見ていきたい。対象者は、5つの基礎外国語（10クラス）の受講学生であり、アンケートの実施期間は2021年1月26日から2月12日までである。アンケートは、匿名で行うこととし、学生へのアンケート依頼の際には、「アンケートは匿名の形式となっており、集計作業は誰が提出したものか把握することなくなされ、成績にも全く影響することはありませんので、率直にお答えいただけたらと思います」と、前置きの説明をした。回答数は250であり、回収率は84.2％である。

以下、アンケートの設問内容とそれに対する回答数の分布図、さらには、自由記述の主な内容を示すことにする。なお、2020年度は従来のアンケートの設問に、コロナ禍における感想・意見を求める設問⑸をつけ加えて実施した。

３．１　アンケートの設問内容と回答数の分布

⑴　言語（ドイツ語、フランス語、中国語、朝鮮語、フィリピノ語）選択の理由（複数回答可）

次の図1④「その他」の自由記述については、大別すると、「その国の歴史や文化（音楽、メディア、スポーツ等）への関心がある」「日本語と類似する点があり、学びやすそうだから」「これまで学んだ英語との共通点があるから」「就職に役立てるため」「話者人口の多さ」「希少価値のある言語であるから」という内容の回答が見られた。

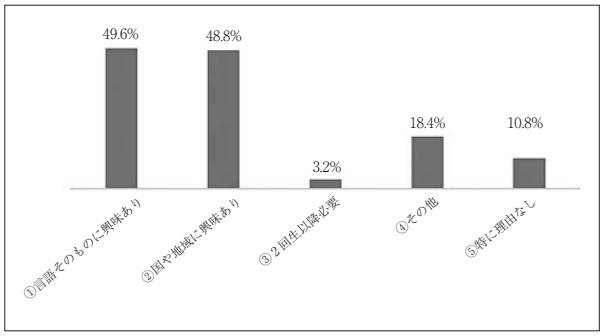


図1　「言語選択理由（複数回答可）」

⑵　今後、1回生時に学んだ英語以外の外国語の勉強を続けたいですか。

受講した外国語の学習継続意思について、51％（「続けるかもしれない」も入れると、66％）と半数を超えた結果となった。

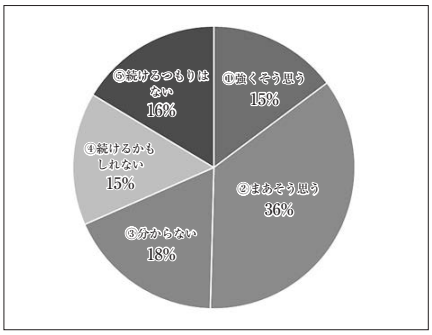


図2　「学習継続意思」

⑶　全体として、受講した英語以外の外国語の授業はあなたにとって有益でしたか。

受講した外国語の有益性については、肯定的な回答が90％という高い結果であった。

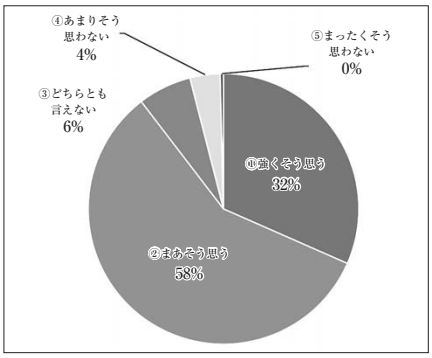


図3　「授業の有益性」

⑷　⑶で選んだ選択肢について、なぜその選択肢を選んだか、その理由を簡単に書いてください。

肯定的な回答としては、「言語とともに文化にも触れられた」「英語圏以外の国への視野が拡がった」といった、英語以外の外国語や異文化への理解が深まったというものや、「多少なりとも会話ができるようになった」「ネイティブに通じた」「映画を見て聞き取ることができた」「その言語の文字で書かれた看板や表示が読めた」「その言語で表されているSNSを見て、わかるようになった」「検定試験に合格した」「新しい体系の文字が読めた」などの言語の上達が実感できたという記述、また、「旅行や就職に役立てられそう」「英語以外の言語ができることの強みができた」という将来への可能性や展望を積極的に述べている回答も見られた。その他にも、「言語というものについて改めて考えるきっかけになった」などの学問的関心の萌芽が垣間見られる回答もあった。

否定的な記述としては、「今後、その言語を使うかどうかわからない」といった、実用性を疑問視するような回答もいくつか見られた。

⑸　この授業についての感想や意見を自由に記してください。コロナ禍における授業として（比較的）良かったところがもしあれば①として、逆にきわめて不都合だと

感じたところがあれば②として、具体的に挙げてください。また、コロナ禍とは無関係と思われる内容については、③として記述をお願いします。

①　コロナ禍における授業として（比較的）良かったところ

遠隔授業全般について、「通学時間が短縮できた」という利点をあげる回答が多かった［13件］。基礎外国語の授業では、遠隔同期型（Zoom）の実施が最も多かったことから、その利便性を挙げる回答が多く見られた（「（Zoom の授業で）先生の口元がはっきりとわかった」「パソコンで音量調節もでき、発音がはっきりと聞こえやすかった」「基本的にミュート設定だったので、他人に気兼ねせず発音練習ができた」「辞書などのツールがすぐに使えた」「Zoom の授業が多かったが、実際に対面に近い授業だと感じられた」「ブレイクアウトセッションの機能を用いての学生同士の会話練習も行えた」「発言が誰かがわかりやすかった」「共有画面が見やすかった」など［14件］）。

そのうち、遠隔非同期型（Moodle 等）については、「Moodle に学習データが残っていて復習がしやすかった」「動画が繰り返し見られた」「自分のペースで勉強に取り組めた」など、反復の機能を高く評価する回答があった。

一方、3Q に行われた対面授業については、対面授業が一時期でもあったことを評価し、外国語以外の授業で非同期型授業が多い中、「友だちをつくるきっけにもなり、またより深く学ぶことができた」「感染対策に配慮しながら、わずかでも対面授業を開講してくれてよかった」など感染対策が徹底され、対面授業を通して同級生との交流がはかれたことを喜ぶ回答が多かった［12件］。また、感染状況に応じて、授業の切り替えが迅速に行われていたことを評価する回答もあった。

②　コロナ禍における授業としてきわめて不都合だと感じたところ

通信環境の不具合で、授業参加に困難や障害があったという回答が21件あった。また、「オンラインだと自分の発音が正しいのかわからない」「オンラインでの発音が対面で受けた時と印象がちがった」など外国語の発音練習の難しさを嘆く声もあった［6件］。さらに、Zoom によるテスト実施について、聞き取りがネット環境に影響されることがある（1件）、慣れない文字種の入力や文字変換に苦労したという回答なども寄せられた［5件］。

そして、「オンラインだとだらけてしまう」「質問がしにくい」「コミュニケーションがとりにくい」など、オンライン上でのコミュニケーションや学習の限界を感じたり（16件）、「対面でみんなとコミュニケーションをとりながら授業を受けたかった」「少しでも対面授業があるとよかった」など対面授業があまり行われなかったことについて残念がる回答が11件あった。

教員による日程周知が徹底されない場合があったことや、Zoomの授業で教員と学生間でコミュニケーションに齟齬をきたすことがあったと回答したものもあった。

③　コロナとは無関係と思われる内容

受講した授業について「わかりやすかった」「わかりにくかった」「楽しかった」「授業の雰囲気がよかった」「先生が優しかった」「苦痛だった」などの感想やテストに関する意見等が主なものであった。

３．２　アンケート調査にみる全体の傾向と分析

今回のアンケート結果から、浮かび上がる傾向は以下の通りである。

アンケートの設問⑵でも見たように、受講した外国語の学習継続意思が51％（「続けるかもしれない」を含めると、66％）、⑶の受講した外国語の有益性については、90％という高い割合の結果が示されたことから、おおむね、学生が受講した「基礎外国語」、すなわち、英語以外の外国語の履修について肯定的に捉えているということがわかった。それは、主に、異文化理解、語学習得の達成感、将来への展望が育まれているためだということが、アンケートの自由記述からも窺えた。

また、学生は、コロナ禍の厳しい状況の中で、現実に適応し、教員たちによる遠隔授業のさまざまな工夫を、一定程度評価する傾向が見られる一方で、その限界も容赦なく指摘している。さらに、⑸の①で見た通り、対面授業が一時期でもあったことを評価し、⑸の②にあるように、それを渇望する自由記述が少なからず見られたことからも、学生の対面授業へのニーズが高いことが窺えた。いうまでもなく、「授業」の場は、知識の伝授にとどまらない。授業は、学生同士の交流の出発点となり、人間関係を築いていく場ともなる。コロナ禍で授業のほとんどが非同期型授業だった1回生にとって、学生同士の交流の貴重な機会を「基礎外国語」が提供したともいえよう。

一方、以下の4の「教員の取り組み」でも述べられるように、「基礎外国語」の非同期型においても、課題に対するフィードバックが頻繁になされ、教員と学生間で丁寧なやりとりがなされていることも、授業評価の高さに繋がっているといえよう。

通信環境の不具合については、その自由記述が21件と少なくないだけに、そのフォローが不可欠である。

３．３　2020年度以前のアンケート調査結果との比較

ここでは、アンケート設問の、受講した外国語の学習継続意思を問う⑵と有益性を問う⑶について、前年度2019年度の結果[5)]と比較してみよう。

受講した外国語の学習継続意思と有益性については、ほぼ同程度という結果となっ

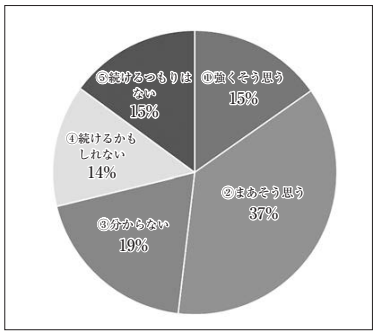


図４　「学習継続意思」（2019）

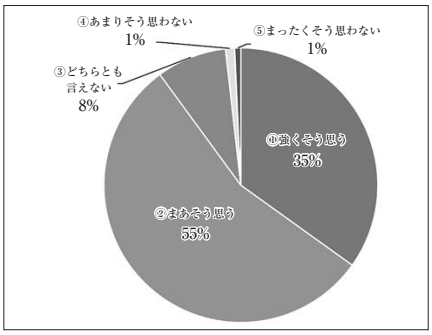


図５　「授業の有益性」（2019）

ており、コロナ禍でも、それまでと満足度は変わらないということが明らかになった。

4. 各外国語における教員の取り組み

ここでは、各言語の教員による授業の取り組みについて、それぞれの授業担当者[6)]が上記3のアンケート調査の結果を踏まえながら記述したコメントによって紹介することとする。

４．１　ドイツ語

４．１．１

【取り組み内容】

筆者の担当した「基礎ドイツ語」クラスは、受講生数が前期30名・後期31名で、日本人とドイツ人教員が週1回ずつ授業を行うペア・クラスであった。ドイツ人教員がZoom による会話中心の授業を行ったので、筆者は文法事項と言語構造の論理的理解を中心に据えた非同期型遠隔授業（修学支援システムを使用）を実施した。1回の授業ルーティンは次のとおりである：1. 授業内容を PDF ファイルで受講生に一斉配信する。2. 定期的に理解度を確認する課題を WORD ファイルで提出させる。3. 全員の提出課題に添削事項と質問への回答等を入力後、PDF 化して返却する。興味深い質問や優れた解答は全員で情報共有するとともに、ドイツ語圏の文化解説を授業に盛り込むにあたっては、写真・図版・外部 URL を活用して世界遺産や衣食住に関する情報に学生自身でアクセスさせた。期末試験問題も文化情報の講読と組み合わせることで好奇心を刺激し、試験未提出（未受験）の防止を狙った。

【成果】

年度初めには課題未提出者の増加を危惧したが、予想よりも積極的な課題提出が続いた。その理由として、課題添削が個別指導の形となったため、他の受講生を意識せ

ず教員に直接疑問を投げかけられたことが挙げられるであろう。さらに、過去の対面授業では聞いたことがない細かい質問もいろいろと記述されていた。
書式によるやり取りが要となる授業だったので、ドイツ語の特殊文字4つのパソコン入力を克服できるよう、年度初めの授業で対応方法を丁寧に指導した。その結果、約2/3の受講生は特殊文字、または代替綴りのパソコン入力をマスターしていた。

また、過去の授業よりも文化解説を多めに盛り込んだことで、授業や課題に楽しみながら取り組めたという授業評価アンケート結果もあり、これは学生のモチベーション維持に役立ったと考えられる。「非同期型遠隔授業はコミュニケーションがとりづらい」という意見があった中、本授業の形態については「好きなタイミングで見直しができる」「自分のペースで理解を深められる」「いつでもどこでも受講ができる」という肯定的な意見もあった。

【課題】

試験の実施方法が限定されてしまったことが大きな課題である。非同期型授業のため、参考資料を一切使わずに解答する形式の試験は実施できなかった。辞書や教科書を使いながら問題に取り組ませ、期限内に提出させることで、学期中の学習事項の理解度や定着度は確認することができた。 **（野上さなみ）**

４．１．２

【取り組み内容】

ドイツ語を担当した教員の遠隔授業形態は、Zoom を利用した遠隔同期型と Moodle や修学支援システムを利用した遠隔非同期型に分かれ、筆者は前者を選択した。令和3年度の現在では Zoom の使用にも慣れ、対面と同じ感覚で授業を行えるが、令和2年度当初は遠隔授業に大きな不安を抱えていた。そもそもコミュニケーションを重視する語学において、遠隔授業が成り立つのだろうか。その中で Zoom を選んだのは、少しでも学生の反応を見たかったからである。

筆者が担当した「基礎ドイツ語」文法クラスの授業内で配慮したのは、まず、教科書の内容に即した PowerPoint を作成し、学生が対面授業と同じ感覚で授業を追いかけやすいようにした。そして、スライドの中に適宜、イラストや図解を用いたより詳しい解説も取り入れ、文法事項が定着するよう心がけた。また、一方向の通信になりがちな文法説明が単調にならないよう、例えば、発音や数字、曜日など基礎的内容をクイズ形式で学生に答えさせるコーナーを設け、学生の積極的な授業参加を促した。また、Zoom の授業だけでは学生の習得状況が確認できないため、毎回、Moodle に復習課題を上げて提出させ、次週、間違いの多い箇所を中心に解説した。加えて、Moodle に授業に対する質問や感想を記すコーナーを設け、それに毎週答えることで、

学生の習得に取りこぼしのないよう努めた。

【成果】

学生にはできる限りカメラをオンにするよう呼びかけたので、むしろマスク付の対面授業よりも口の動きが確認できるという利点はあった。そして、会話においては一対一の場面がZoomでも成立可能なため、特に支障を来すことはなかった。授業で使用したスライドをPDFにしてMoodleにアップし、いつでも閲覧可能にしたため、復習しやすいという意見も受け取った。また、毎回の復習課題提出により、多くの学生に着実な学力の向上が見られた。後学期で対面授業が可能となった際には、Zoomでは取り組みにくかったペアワークを可能な限り取り入れたため、新たな言語で他者と話す喜びを味わう学生の姿が見られた。

【課題】

Zoomには互いの顔を確認できるという利点がある反面、通信状況によって互いの声が聞き取りにくいという欠点もある。学生のアンケートを見ると、会話教育を中心としたクラスで、Zoomのやり取りに齟齬をきたしたこともあったようである。この意見には教員側もよく耳を傾けなければならない。不慣れな言語を口にする際に学生はストレスを感じやすく、すぐに返答できないからといって理解していないわけではない。通信状況によるタイムラグがあることを考慮して、学生にテンポを合わせた授業設計が必要であろう。

また、遠隔授業で何より頭を悩ませたのは期末試験であった。「持ち込み可」とせざるを得なかったので、問題数を増やすなどその分難易度を高く設定したのだが、その加減を誤り反省する結果となった。学生の意見では、やはり対面授業を強く望んでいるので、状況が許す限り（とくに試験は）対面授業を実施し、やむを得ない場合のみZoomかMoodleを使用する方針に変えた方が良さそうである。アンケートを見る限り、遠隔同期型と遠隔非同期型の満足度に差は見られない。双方の利点を合わせて授業設計すれば、遠隔授業でも十分な効果は得られるのかもしれない。　**（野村優子）**

４．２　フランス語

４．２．１

【取り組み内容】

筆者が担当した「基礎フランス語」文法クラスについて、遠隔授業以外の選択肢がなかった前学期の工夫としては、休講期間内に2回の「プレ授業」を非同期型で実施し、Zoomによる同期型授業への導入ならびに「お試し参加」の機会を設けたことがまず挙げられる。同時にすべての情報をMoodleコース上に集約し、Zoomへのリンクも毎回そこに配置した。学生にはカメラをオフにした状態での受講を認める代わりに、

毎回 Moodle 上で質問や感想を投稿することを義務づけ、次回までに一人ずつコメントを返す作業を反復したところ、「おかげでモチベーションを保てる」との反響があった。授業が単調にならないよう途中で歌曲や動画を視聴させる、授業時間外に取り組む練習問題や、文化的あるいは時事的な情報を提供するコラム等を、毎回のコース上にアップする、などの配慮はコロナ禍に見舞われる前から実施していた。

後学期にはこれらをすべて継続したほか、期末試験の改良を試みた。対面での実施を予定しており、3Q ではそれが実現したが、4Q では再び全面的な遠隔授業となったからである。試験内容を詳しく予告したうえで、配点は少ないが応用問題として、歌詞ゆえの「破格」を訂正させるなど、各自の総合的な実力が正確に反映されるよう工夫した。本アンケートでの「テストがものすごく難しかった」との自由記述は、応用問題に苦戦した学生によるものと思われるが、同じ学生が授業全般や試験後の「救済措置」（厳密には救済ではなく、後から練習問題として再受験した場合、「E- ラーニングへの取り組み」として評価する）に肯定的なコメントを残していることから、大きな不満の表明とみなす必要はないものと思われる。

【成果】

アンケートの数字としては、学習継続の意志ありとする者が約5割、授業が多少とも有益であったとする回答が約9割となっており、全体の平均とほぼ同じであるが、有益とした理由について、実用的な有益性や、外国語の学習そのものに価値を見出す意見に加え、「言語を通して文化を学べた」、「自分が専攻したい分野では使わないと思うが、知見が広がった」などの声もあり、異例の状況下に置かれつつも第2の外国語を学ぶ意義を感じ取った学生が多かったことに安堵した次第である。

【課題】

発音を確認するための音声教材はコロナ禍以前から Moodle コース上に設置したものがあり、アクサン記号などの入力方法も機種やデバイスごとにスクリーンショット等を多用して解説を加えていたため、取り立てて困ったという声は聞かれなかったが、試験時には念のためすべての特殊文字をコピー & ペーストで入力できるようにしておいた。それでも手書きするより時間はかかったであろうし、不自然な形となったことは否めない。不慣れな学生たちがどのくらい時間を要するかを見極めることが難しく、試験の構成や実施法にはさらなる試行錯誤が必要と感じた。通常は手書きで記入し提出させたのち、こちらも赤ペンで添削して返す課題についても、用紙を撮影した画像を投稿させる形で対応したが、個別に丁寧な指導を受けているという実感はやや薄れたのではないかと思われる。

（柳　光子）

４．２．２

【取り組み内容】

筆者の担当した「基礎フランス語」会話クラスにおいては、初回授業から数回が一番重要な授業となる。なぜなら学生が授業に興味を持てるか持てないか、理解が進むか進まないかなどの感触の確認、言語の概要や読み書き、発音などの基礎はこの最初の数週間がベースとなり、後の学習モチベーションに繋がるためである。

そのような意味がある中、前学期は休講から始まり遠隔授業の形をとらざるを得ない状況になった。この最初の数週間の重要性と、学生のコロナ禍における精神的な重さ・やる気を考慮した上で、従来の対面教育とできる限り変わらない授業を提供する必要があり、遠隔同期型で行うこととした。そのため研究室を遠隔授業に対応可能な状態にすべくカメラ2台、ホワイトボード、マイクを設置し、Zoom を利用した遠隔同期型によって従来どおりの進行、つまり前半45分の講義、後半45分の練習時間を確保した。

遠隔授業では、対面と同内容であるのにも拘わらずテクニカルの問題等から通常45分の講義が60分近くかかることがよく起こった。そのため本来対面授業でとれるはずの45分の練習時間が少なくなり、これについて考慮する必要が生まれた。そこで Moodle を活用した聞き取りや発音練習のコンテンツを準備し、学生自身で学べる環境を提供した。

このように進めた結果、これまでの対面授業とほとんど変わらない内容を、まじめに学習している大半の学生に提供することができたと思われる。ただ、練習時間では個人で練習をしたに留まり、生きた会話経験が少なく、テストではそれを考慮することとした。

【成果】

後学期は対面授業となり、学生、教員との関わり合いとしては従来通りとなり、授業の進みが前学期に比べ飛躍的に伸びた。対面期間中に学生に聞いてみたところほとんどの学生が学習効率が上がったと感じていた。要するに、同じ場に先生と学生がいるという学習環境では、直接交流できることによって理解しやすく、また理解が速まり、学びが容易になるということであり、特に後半のグループ練習で顕著であった。なにより学生が生き生きとし､学習する喜びを感じている様子がしばしばみてとれた。

【課題】

ただ対面授業とはいえ、マスクやソーシャルディスタンスによって声や発音が聞き取りにくいという音声の面（Verbal)、表情が分かりづらいというコミュニケーションの面（Non-Verbal）はマイナスとなるところであった。

テクノロジーにより遠隔で授業を行うことは可能ではあるが、テクニカルな問題を

どうしても挟んでしまい、コミュニケーションが不足するという現実に直面した。さらに実は科目や分野によってのみならず、人によっても、その人の持つ能力や性格に合わない、または能力以上を求められる場合もあるため、学習とは直接には関わりのない困難が新たに生じるという問題を、遠隔同期型を通して筆者は痛感した。このようなことから遠隔授業は必ずしも適切ではないという結果が残ったと思われる。

（モヴェ・エリック）

４．３　中国語

４．３．１

筆者は「基礎中国語」クラスの担当ではなく、共通教育「初級中国語」クラスの担当だが、大学における中国語入門授業の統括をしている立場から、「基礎中国語」のアンケート結果についてコメントしたいと思う。

【取り組み内容】

授業は主として遠隔方式で実施された。遠隔授業による初修外国語の教授法については、教員側にとっても大きな試練と言える。学生の回答にあるように、対面とあまり差が感じられない側面も確かにある。また私自身は、日本語に存在しない母音・子音を発音する際の口の形を見せやすい、黒板に字を書くよりもパソコン上で入力する方がよほど速いなど、対面授業にはない長所を感じていた。学生側も、周囲を気にせずに発音練習をすることができる、録画による復習が可能などのメリットを感じていたようである。

【成果】

全体として94％の受講生が授業について有益だった（強くそう思う・まあそう思う）と感じており、困難な情況下においても教える側の責任は果たせていると思う。

【課題】

その一方で遠隔授業が解決しなければならない問題として、アンケートから以下三点を読み取ることができた。まず､通信環境のトラブルを多くの受講生が挙げていた。この問題は今後も一定期間継続していくと思われる。次に対面での会話練習がむずかしいという問題がある。これは教員側が授業方法を改善し続けていく必要があろう。そして私の考えでは、遠隔方式の最大の問題はテストにあると思う。不正行為の防止を前提に外国語のテストを遠隔で行う方法論については、教員間でもさまざまな意見がある。受講生からのとまどいの声も多かった。クラス間での不公平が生じないよう、今後も検討を継続したい。

（秋谷裕幸）

４．３．２

【取り組み内容】

筆者は遠隔授業を Zoom によって実施した。テキストを画面共有で映しながら、発音練習とテキスト書写を行わせ、その後、学生を指名して、発音と解釈を発表させたうえで、筆者が補正と解説を行った。発音練習の機会及び「ブレイクアウトルーム」機能の活用による学生相互のコミュニケーション機会を増やすことを心がけた。さらに映像資料を用いながら、中国の文化や人々の生活についても具体的な理解が広がるよう工夫したつもりである。

【成果】

コロナの感染拡大により、ほとんどの期間が遠隔授業となってしまい、学生の受け止め方について心配もあったが、アンケートを見る限り、肯定的な評価が大半を占めているようで安心した。これは学生側も状況に鑑みて「できないこと」を理解していることが、一つの要因であると思う。画面越しにではあるが「ブレイクアウトルーム」などを用いて学生相互の発音練習や交流の時間を確保できたことは、アンケートでも特に好評を得たようである。感染の心配がない点や、映像資料を容易に組み込める点と併せて、遠隔授業のメリットであった。

【課題】

一方で、友達と直接的な交流ができないことを嘆く声も多く、第2Q の後半で少し対面授業を取り入れたことは、せめてもの慰めになったようだ。オンライン特有の課題として、「氏名」のみが映った画面の先に「実際に学生がいて、積極的に授業参加しているのか」、確信を持てないことがしばしば、という問題がある。背景を隠すなどしたうえで「学生は画面に顔を映しながら受講すること」を原則にできないものであろうか。他の反省点としては、試験内容についての事前案内が不十分であったという指摘がある点である。特に前学期は試験慣れしていないので、事前の説明はより丁寧に行う必要があったかもしれない。それと連動しているか不明だが、試験の得点が極端に低い学生が2名ほどいた。遠隔授業では基本的に学生個々の「顔が見えない」ので、積極的に授業参加できているか、確認しにくい点はやはり大きな短所であると思う。

（諸田龍美）

４．４　朝鮮語

【取り組み内容】

「基礎朝鮮語」は、日本語母語話者（筆者）による単独授業のクラスと、韓国語ネイティブと日本語母語話者の教員によるペア・クラスがある[7)]。

まず、筆者の取り組みについて述べると、1Q は、Moodle コースによる解説と課

題を掲載する形態から、Zoom による授業の実施に移行した。初期は、初めての遠隔授業で不安におののくばかりであったが、学部や他部署の教員によるサポートの下、Zoom や Moodle の勉強会に参加し、曲がりなりにも遠隔授業を始動させることができた。Zoom による、リスニングやスピーキングを重視した前期の授業で筆者が意識的に心がけたのは、従来の対面授業に近い形で、反復練習を繰り返し、なるべく多くの学生に質問し答えてもらうこと、「ブレイクアウトルーム」の機能等を使って学生同士の対話を多く促すこと、Moodle のフィードバック機能を使って、毎回質問と感想を受け付けることなど、授業が決して一方的にならないことであった。このことは、遠隔授業でも緊張感を持たせつつ、学生同士の交流も多少なりともはかれたということで、学生たちにはおおむね好評だった。後学期の3Q は、対面授業の実施により、学生同士の直のコミュニケーションや交流が一時でも可能となり、学生の満足度も高かったようである。4Q の途中で再び Zoom の授業となったが、授業の最終回に、韓国にいる留学生をゲストで招き、韓国語のやりとりを体験できたことは学生の自信ともなったようである。

もう一方のクラスは、前学期に Zoom の授業を実施し、後学期は、対面と Zoom の併用であった。Zoom の授業実施において、筆者のクラス同様、学生に多く発言をさせたり、こまめな確認テストを行って文法事項の定着をさせる等の工夫がなされたり、趣向を凝らしたパワーポイントの画面を共有し、学生の理解度をはかった。さらに、両方の朝鮮語クラスでは、ことばの他に、韓国の地域、文化、歴史、政治経済や書籍案内等を随時取り上げ、学生の知的関心が拡がるように務めた。

【成果】

両朝鮮語クラスにおける受講者アンケートでは、約9割が「授業が有益であった」との結果であった。アンケートの自由記述としては、「ハングルが読めるようになった」「朝鮮語の歌や映画等を少しでも聞き取れるようになった」「身近な SNS の韓国語がわかった」等、達成感が窺えるものが少なからずあった。コロナ禍においても、外国語学習の実践から、学生たちの中で「積み重ねが実を結ぶ」という勉強の基本姿勢が体得できたことは、幸いであった。

【課題】

朝鮮語の遠隔授業における難関の一つとして、キーボードでハングルを打てるようにする教育が挙げられるだろう。ハングルは、独特のキーボード配置であり、例年だとメディアセンターで対面指導を通じて指導を行うのだが、2020年度はそれがかなわず、課題等は紙にハングルを書かせて写真に撮り提出させるという、原始的で面倒な方法を採った。だが、オンライン授業でこそ、ハングルのキーボード入力の習得が重要だということを改めて感じている。Zoom のチャット機能でハングルを使用してや

りとりしたり、スムーズな課題提出等が行えたりと、高い利便性が見込めるからである。今後、遠隔授業しかできないときに備えて、オンライン授業でも体系的なハングル入力の教育を組み込むことを課題としたい。　**（池　貞姫）**

４．５　フィリピノ語

筆者が担当する「基礎フィリピノ語」は、共通教育の初修外国語「初級フィリピノ語」との合併開講のため、特に前学期は、教育学部、理学部、社会共創学部、法文学部夜間主コース所属生など､受講目的を異にする多様性に富んだクラス編成であった。

【取り組み内容】

前学期は、遠隔授業以外の選択肢がないなか、遠隔同期型の体系的構築の余裕がなかったこともあり、Moodle による遠隔非同期を中心にして進めた。Moodle には教科書に添った補足説明資料をアップし、要所においては、個々の学生の進度や希望に即してフィードバック機能やメッセージ機能を活用して補足したほか、発音指導を含めて、Teams の音声通話を利用して、口頭での個別の補足指導を実施した。

具体的には、上述の説明資料の読込みを基礎とした、教科書各課の本文や例文の入力、日本語訳、練習問題への対応をルーティンとし、別の教材を参考として作成した応用的な練習問題などもアップし、それらのいずれかの作業を課題として毎回の授業日に提出させた。また気分転換を兼ねて、幼児・小学校低学年向けの歌唱を含む動画を視聴しての発音練習や料理法などの動画による聴き取りをその時々に応じて挟むなどの工夫をした。

後学期は､3Q では概ね対面授業が可能になったので､フィリピン人留学生を招いて、フィリピンの歴史と文化について話してもらう機会をもったが、学生にも良い励みと刺激となった。第4Q では、再び遠隔授業となったため、前学期の授業実施の枠組みを基本にしたが学生にとって進度がやや早いようであったので、少し余裕をもたせるようにした。

【成果】

受講者アンケートでは、回答者11名のうち9名が「授業が有益であった」としていた。「言語を通して文化や風習を学べた」､「フィリピンの知識を学べてとても楽しかった」､「進度が早く苦労したが、新しいことを学べた達成感を得た」などの感想もあった。また「フィリピノ語」を受講した2回生より、継続しての履修可能な科目のないことに気づいて非常に残念だったとのコメントも寄せられた。遠隔非同期授業の比重が高かったが、それなりのインパクトもあったことが実感できた。

【課題】

遠隔非同期授業のメリットには、学生が自身のスケジュールに合わせての受講、他

の学生の存在を気にせずに発音練習できること、また自身の理解力に合わせて繰り返しての資料閲覧や、対面授業では提供する余裕のない動画教材の視聴などがある。一方、対面授業時の口頭説明には問題なく対応・理解できても「文字情報」を把握することには程度の差はあっても困難を抱える学生もあった。上述のように音声指導を併用して個別のニーズに併せた補足説明・個別指導を行ったが、説明資料に基づいた課題の対応力には差が生じる結果となった。これらの点については、遠隔同期型と遠隔非同期型とを適切に併用することによって対面授業に近い効果が得られる可能性があると思われるが、技術的なことも含めて今後の課題としたい。　**（菅谷成子）**

おわりに

本稿では、コロナ禍における法文学部「基礎外国語」の授業実践について、学生アンケート調査の結果や各担当教員の授業の取り組み事例の紹介を通して、概観した。以下にその要点を示しておきたい。

コロナ禍において、緊急避難的に導入された遠隔授業であったが、語学授業においては、担当教員による様々な工夫によって、その利点も示され、それが予想以上に功を奏した面も少なくなかったが、その一方、本質的な限界も示された。語学教育における究極の目的である「コミュニケーション」は、いうまでもなく、人と人との直のやりとりをすることが基本である。学生も大学生活において、それを少なからず求めているということが今回の調査で浮き彫りになり、法文学部「基礎外国語」が、そのニーズの一端に応える機能を果たしていたことが明らかになった。

学生がアンケート調査で示した、遠隔授業・対面授業のメリット、デメリットについては、今後さまざまな角度からの綿密な検討が必要になるだろう。

われわれ担当教員は、コロナ禍に対応するなかで、さまざまな力を育む大学における外国語教育の役割を改めて認識することになった。今後の法文学部、さらには大学における初修外国語教育のあり方を考えるために、この経験を確実に繋いでいくことが必要である。

＊　この実践報告をまとめるにあたっては、令和3年度愛媛大学教育改革促進事業（愛大教育改革 GP）「コロナ禍における法文学部学生の「被災」記録の収集、保存ー将来の災害に備えてのデータベース化と今後の課題ー」経費の一部を使用した。

注

1）それ以前は、法文学部における第2外国語科目は、共通教育「初修外国語」として提供され、総合政策学科においては自由選択科目、人文学科では、必修選択科目であった。

2）「授業の開講方針」については、愛媛大学教育・学生支援機構、教育学生支援部（2021）を参照のこと。

3）法文学部の対応や取り組みについては、愛媛大学法文学部、大学院人文社会科学研究科（2021）を参照のこと。

4）これは、主軸となる授業形態を示している。遠隔同期型もしくは対面授業を主軸としながら、補助的にMoodleを使うケースも多かった。なお、法文学部全体の授業実施形態分布の内訳については、青木理奈ほか（2021）を参照のこと。

5）「基礎外国語」がスタートした2016年度から2018年までを見ても、2016年度（⑵①10％ ②24％ ④13％ ⑶①29％ ②53％）、2017年度（⑵①14％ ②32％ ④15％ ⑶①34％ ②54％）、2018年度（⑵①13％ ②33％ ④13％ ⑶①35％ ②54％）と、ほぼ同程度の結果が出ている。

6）2020年度基礎外国語は、非常勤講師を含めて16人の教員が担当したが、ここでは8人の専任教員によるコメントを掲載する。

7）このコメントを書くにあたっては、「基礎朝鮮語」を担当された、本学非常勤講師の張栄順先生と崔昌玉先生にご協力いただいた。

参考文献

青木理奈・鈴木　靜・福井秀樹・小佐井良太・石坂晋哉（2021）
「コロナ禍における法文学部の被災記録の収集と保存Ⅰ－学生を対象としたアンケート調査の単純集計結果－」『愛媛大学法文学部論集社会科学編』第50号、37-68. https://opac1.lib.ehime-u.ac.jp/iyokan/AA12777305_2021_50_37-68._?key=QTMLOL

愛媛大学教育・学生支援機構、教育学生支援部（2021）「「コロナ禍」に対応した愛媛大学の授業運営と学生支援」『大学教育実践ジャーナル』第20号、1-10. https://web.opar.ehime-u.ac.jp/wp/wp-content/uploads/2021/06/01

愛媛大学法文学部、大学院人文社会科学研究科（2021）「コロナ禍における法文学部および大学院人文社会科学研究科の取組」『大学教育実践ジャーナル』第20号、33-43. https://web.opar.ehime-u.ac.jp/wp/wp-content/uploads/2021/06/05

本稿は、池　貞姫・秋谷裕幸・諸田龍美・柳　光子・モヴェ・エリック・野上さなみ・野村優子・菅谷成子（2022）「コロナ禍における愛媛大学法文学部「基礎外国語」の教育実践－教員による授業の取り組みと学生アンケート調査の結果を中心に－」『大学教育実践ジャーナル』第21号､75-84. を転載したものである。
なお、転載にあたっては、活字等を修正した。

コロナ禍における法文学部留学生の被災記録の収集と保存

― 2021年度学生を対象としたアンケート調査の単純集計・クロス集計結果 ―

福井　秀樹[*1]・池　　貞姫[*1]・青木　理奈[*1]
石坂　晋哉[*1]・太田　響子[*1]・小佐井良太[*2]
鈴木　　靜[*1]・十河　宏行[*1]・中川　未来[*1]

＊1　愛媛大学法文学部人文社会学科
＊2　福岡大学法学部

◎キーワード：コロナ禍，留学生，アンケート

1．はじめに

新型コロナウイルスの感染蔓延の長期化は、大学生にどのような影響をもたらしているのだろうか。このような関心のもと、青木、鈴木を代表とする本プロジェクト・チームは、アンケート調査、手記募集、座談会による意見聴取等を通じて、コロナ禍における愛媛大学法文学部生の学修状況や生活状況への影響を把握する努力を重ねてきた（青木他，2021a，2021b，2021c，2022a，2022b，2022c；鈴木他，2022）。

これまで積み重ねられてきた調査のなかで、現状の把握が相対的に困難であったのが留学生である。留学生の中には日本語が必ずしも堪能でない者もいる。そのため、日本語のみを通じて行われてきたこれまでの調査では、必ずしも多くの留学生から回答が得られたわけではない。事実、留学生の回答は、2020年10月～11月に実施した1回目のアンケート調査では全26名中5名、2021年10月～11月に実施した2回目のアンケート調査では全23名中2名にとどまった。

そこで本プロジェクト・チームはアンケート・フォームを中国語、韓国語、英語でも作成し、2021年12月から2022年1月にかけて留学生のみを対象にあらためてアンケート調査を実施した。本稿は、留学生アンケートの回答を分析する作業を通じて、法文学部留学生2021年度の学修や生活にコロナ禍が与えた影響の把握を試みる。

２．愛媛大学法文学部の学生数と遠隔授業

２．１．学生数

2021年11月現在の愛媛大学法文学部の学部生数、大学院生数は、それぞれ1,618名と38名である（内訳詳細は青木他（2022a）を参照）。このうち、留学生は23名（学部生12名、大学院生11名[1)]）である。

２．２．授業実施状況

本稿のアンケート調査対象期間である2021年度前学期の対面授業数と遠隔授業数は表1の通りである（青木他（2022a）より再掲）。

表１　2021年度前学期授業数の内訳

2021年度	合計	対面授業	遠隔授業Ａ①（同期型）
（昼間主）			
1Q	136	94	42
2Q	145	106	39
前期	280	107	173
（夜間主）			
1Q	44	28	16
2Q	44	25	19
前期	65	32	33

（愛媛大学教育支援課法文学部チームより提供）

３．対象と方法

本アンケート調査の対象は、法文学部所属の学部生12名、大学院人文社会科学研究科法文学専攻所属の大学院生4名[2)]、合計16名とした。実施期間は2021年12月19日から2022年1月31日である。

調査方法はインターネットでの無記名自記式アンケートである。留学生に対するアンケート調査への協力依頼は、留学生の指導教員を通じて行った。その結果、全16名中12名（学部生8名、大学院生4名）から有効回答を得られた。また、1名（学部生）からはさらに手記の提出を得た。

１）大学院人文社会科学研究科は法文学専攻と産業システム創成専攻の2専攻により構成される。
２）大学院人文社会科学研究科産業システム創成専攻の大学院生は除く。

アンケート内容は、⑴ 回答者の属性について5項目、⑵ 遠隔授業においての学修面が8項目、⑶ 大学や大学以外からのサポート面が3項目、⑷ 生活面が7項目、合計23項目から構成されている。アンケートの回答は、必須の選択方式の項目と、必須ではない自由記述項目を作成した。具体的なアンケート内容（日本語のみ）は付録1に示す通りである。学生の手記は付録3に翻訳を掲載している。

４．倫理的配慮

本調査において、対象者に対する倫理的配慮を以下のようにした。

⑴　不必要な負荷や負担への配慮：回答は任意でありかつ匿名である。対象者に不必要な負荷や負担は生じない。

⑵　個人のプライバシー保護への配慮：匿名で回答する。アンケート結果についても守秘義務を厳守し、個人のプライバシーを厳重に保護する。

⑶　協力拒否への不利益への配慮：回答は任意であり、協力拒否への不利益は生じない。

⑷　調査協力への理解や同意：学生生活指導教員からの説明およびアンケート冒頭に調査協力への理解を求める。

その他、アンケート作成において、個人情報が含まれないようにした。参加者には調査の趣旨が十分伝わるように冒頭に説明を書いた上で、参加は任意であることを説明し、アンケートに回答し送信された時点で同意とした。

なお、本調査計画は、愛媛大学法文学部研究倫理委員会の審査を受け、承認されている（受付番号18：2021年12月6日承認）。

５．結　果

５．１．回答者の属性

表2に示すとおり、回答者12名の国籍は、中国が5、韓国が2、インド、セネガル、ベトナムがそれぞれ1、その他（無回答）が2である。性別は、表3が示すように、女性が7名、男性が5名である。学年は、表4から分かるように、学部1回生1名、学部2回生・3回生がそれぞれ2名、学部4回生以上が3名、大学院1回生が1名、大学院2回生以上が3名である。所属コースは表5に見るとおり、コース未定が1名、グローバル・スタディーズ履修コースが1名、人文学コースが3名、法学・政策学コースが2名、大学院が4名である。

表２　国籍

国　　籍	回答数
中国	5
韓国	2
インド	1
セネガル	1
ベトナム	1
その他（無回答）	2
総　　計	**12**

表３　性別（国籍内訳）

性　　別	回答数
女性	7
中国	3
韓国	1
インド	1
セネガル	1
ベトナム	1
男性	5
中国	2
韓国	1
その他（無回答）	2
総　　計	**12**

表４　学年（国籍内訳）

学　　年	回答数
学部1回生	1
中国	1
学部2回生	2
中国	1
韓国	1
学部3回生	2
中国	1
韓国	1
学部4回生以上	3
中国	2
ベトナム	1
大学院1回生	1
セネガル	1
大学院2回生以上	3
インド	1
その他	2
総　　計	**12**

表５　所属コース（国籍内訳）

所 属 コ ー ス	回答数
昼間主：1回生のため、コース未定	1
中国	1
昼間主：グローバル・スタディーズコース	2
中国	1
ベトナム	1
昼間主：人文学コース	3
中国	2
韓国	1
昼間主：法学・政策学コース	2
中国	1
韓国	1
大学院	4
インド	1
セネガル	1
その他	2
総　　計	**12**

2021年度前期の居住形態（表6）は、一人暮らしが7名、学生寮が2名、その他が3名（いずれも日本に入国できず本国での居住）である。

表６　居住形態（国籍内訳）

居 住 形 態	回答数
1人暮らし	7
中国	3
韓国	1
インド	1
ベトナム	1
その他	1
学生寮	2
中国	1
セネガル	1
その他	3
中国	1
中国の寮に住んでいます。	
韓国	1
韓国の実家で。	
その他	1
家族と住んでいます。	
総　　計	**12**

５．２．コロナ禍の学修面について

2021年度前学期（1Q / 2Q）における法文学部と共通教育の遠隔授業の実施形態（同期型・非同期型）に関する単純集計結果を以下の表7～表9に示す。同期型・非同期型の授業数については、当然のことではあるが、留学生の場合であっても全体的な傾向は日本人学生の場合と大きな違いはない（青木他，2022a）。すなわち、修学支援システム・メール等を利用した非同期型の授業数が減少し、Zoom 等を利用した同期型授業数が増えている。

同時に、非同期型授業もかなりの数実施されていたことが回答から分かる。非同期型授業の場合、Moodle を利用する形態がより多い。これは、共通教育の授業の多くがこの形態で実施される方針となったことによるところが大きいと推測される（2021年度は、非同期型授業を行う際、できる限り Moodle を利用することが大学側から推

奨されていた)。もっとも、それにもかかわらず、2021年度においても修学支援システムやメールを利用した非同期型授業が少なからず実施されていたことも集計結果からは分かる。これは、渡日できていなかった留学生への対応が影響しているのかもしれない。

表７　Zoom 等を用いた同期型授業数

Zoom 等を用いた同期型授業	回答数
1科目	1
2～5科目	8
6科目以上	1
なし	2
総　　計	12

表８　Moodle を用いた非同期型授業数

Moodle を用いた非同期型授業	回答数
1科目	5
2～5科目	4
6科目以上	2
なし	1
総　　計	12

表９　修学支援システムやメールを利用した非同期型授業数

修学支援システムやメールを利用した非同期型授業	回答数
1科目	5
2～5科目	1
6科目以上	1
なし	5
総　　計	12

表７～９の結合版

科目数	Zoom 等を用いた同期型授業	Moodle を用いた非同期型授業	修学支援システムやメールを利用した非同期型授業
1科目	1	5	5
2～5科目	8	4	1
6科目以上	1	2	1
なし	2	1	5
総　計	12	12	12

５．２．１．前学期の成績に対する学生の主観的評価

昨年度と比べることができないとする4名の学生以外を見ると、「昨年度と比べて成績が下がった」とする学生は2名にとどまり、「成績は変わらない」とする学生が5名、「良かった」とする学生が1名であった。

表10　昨年度と比較した前学期の成績（学生の主観）

前　学　期　の　成　績	回答数
1回生なので昨年度（2020年度）と比べられない	3
昨年度（2020年度）と比べて履修した科目が少なくて比較できない	1
昨年度（2020年度）と比べて成績は下がった	2
昨年度（2020年度）と比べて成績は変わらない	5
昨年度（2020年度）と比べて成績は良かった	1
総　　計	**12**

５．２．２．遠隔授業の利点

遠隔授業の利点としては、「動画配信型の教材を繰り返し視聴できたこと」をあげた学生が10名と最も多かった。次いで、「通学時間がなかったこと」「自分の好きな時間に受講できたこと」をあげた学生が8名と多い。この他にも、良好な受講環境（「1人で勉強する方が落ち着くこと」）や質問のしやすさ（「教員に質問できたこと」）をあげた学生も少なくない。

表11　遠隔授業の利点（複数回答可）

遠　隔　授　業　の　利　点	回答数
動画配信型の教材を繰り返し視聴できたこと	10
自分の好きな時間に受講できたこと	8
通学時間がなかったこと	8
緊急事態宣言、まん延防止等重点措置等の下でも受講できたこと	7
1人で勉強する方が落ち着くこと	5
教員に質問できたこと	3
総　　計	**41**

５．２．３．遠隔授業の困難さ

遠隔授業について「困ったことはなかった」とする回答が5件ある一方で、それよりもはるかに多くの回答が遠隔授業を受ける際に直面した困難を指摘している。「通信環境の悪さ」（5件）もさることながら、「授業方法・教材提供方法」や「授業・課題の内容」それ自体がわかりにくい、という指摘が多く寄せられていることが分かる。「課題等の提出回数が多いこと」「課題等の提出日が重なること」も学生にとっては負担であった様子がうかがえる。これに対して、メール連絡が頻繁で困る、という

回答は1と少なかった。

表12　遠隔授業の困難さ（複数回答可）

遠隔授業の困難さ	回答数
困ったことはなかった	5
通信環境の関係で、同期型の授業受信が不安定だったこと	5
課題やレポートの書き方が分からなかったこと	4
教材提供不十分で、授業内容を理解できなかったこと	3
授業科目により授業方法（同期型または非同期型等）や教材提供方法（Moodle またはメール等）が異なり、分かりにくかったこと	3
課題やレポート提出の回数が多いこと	2
複数の科目の課題やレポート提出日が重なること	2
教員による説明が少なく授業内容を理解できなかったこと	1
出席している授業で、課題やレポートが提出されているか確認ができなかったこと	1
大学や担当教員からのメール連絡が頻繁であったこと	1
総　　計	**27**

５．２．４．遠隔授業を受ける際の障害

遠隔授業を受ける際の障害としては、「なかった」とする者が3名いるものの、その倍の6名が「言葉の障壁」（この回答項目は留学生対象アンケートのみに含まれている）をあげている。次いでそれぞれ4名があげている、良好でない「通信環境」や「Moodle、パソコンなどの操作方法」への戸惑いが遠隔授業受講の障害となったようである。また、「一人になれる部屋」や十分な性能の「PC 等」の確保が困難だった学生もいたことが分かる（それぞれ3名）。

表13　遠隔授業を受ける際の障害（複数回答可）

遠隔授業を受ける際の障害	回答数
障害になることはなかった	3
言葉の障壁があった	6
Moodle などの操作方法がわからなかった	4
自宅の通信環境が整っていなかった（通信速度が遅い等も含む）	4
自宅で自分1人になれる部屋（環境）がなかった	3
自分のパソコン（スマホ、タブレット含む）の性能が低かった	2

自分のパソコン（スマホ、タブレット含む）がなかった	1
その他	1
入学してから初めてパソコンを買いました。だから、最初の時パソコンの操作がよく分からなかったです。	
総　　計	**24**

５．２．５．遠隔授業を受けていた時の気持ち

遠隔授業を受けていた時の気持ちについては、8名が「通常と変わらず安定的」であったと回答している。しかし、長時間学修による「疲労」や困りごとの相談を教員・友人等にできないことから来る「不安」を感じていた学生も少なからずいたことが、回答結果からは分かる。

表14　遠隔授業を受けていた時の気持ち（複数回答可）

遠隔授業を受けていた時の気持ち	回答数
通常と変わらず、安定的に遠隔授業を受けることができた	8
昨年度以上に長時間の学修を行ったため、疲労度が高まった	4
困ったことを友達や先輩に相談できず、不安になった	4
困ったことを教員に相談できず、不安になった	3
総　　計	**19**

５．３．コロナ禍でのサポート面について

コロナ禍での大学や大学以外からのサポート面についての回答を次に示す。

５．３．１．遠隔授業を行う際に必要とされる大学からのサポート（自由記述）

大学からのサポートについては、十分とする回答が2件あるものの、支援奨学金や面談・相談の機会の増加を希望する声も同じく寄せられている。

表15　遠隔授業を行う際に必要とされる大学からのサポート（自由記述）

遠隔授業を行う際に必要とされる大学からのサポート	回答数
特にないです。特に不十分だと思ったことはなかった。	2
支援奨学金	2
学部やゼミの先輩との面談、気軽に質問できる教員のネット上オフィスアワー	1

遠隔授業をしながら教員との直接的な対面相談等が不可能だったため学期中学習に対する不安感等を調査するアンケート等を通じて調査結果が良くない学生に対して選択的な学習相談が周期的に行われてほしいです。	1
総　　計	6

５．３．２．大学独自の緊急支援の必要性

「これまで大学独自の緊急支援を受けたことがありますか」という設問に対しては、「受けていない、あるいは、必要なかった」とする回答が7件と最多であった。また「支援を受け、満足している」という回答も1件ある。もっとも、「支援を受けたかったが、知らなかった」という者も2名いた。また、「受けたが不満だった」「応募したが不採択だった」という回答も1件ずつあった。

表16　大学独自の緊急支援の必要性

大学独自の緊急支援の必要性	回答数
支援は受けていない、あるいは、必要なかった	7
支援を受けたかったが、知らなかった	2
支援を受け、満足している	1
支援を受けたが、不満だった	1
支援を受けたくて応募したが、不採択だった	1
総　　計	12

５．３．３．松山市等からの支援の必要性

松山市等からの支援の必要性についても、大学からの支援の必要性に関する設問への回答と同様に、「受けていない、あるいは、必要なかった」とする回答が8件と最も多かった。また「支援を受け、満足している」という回答も2件ある。他方で、「支援を受けたが不満だった」「支援を受けたかったが、知らなかった」という回答も1件ずつある。

表17　松山市等からの支援の必要性

松山市等からの支援の必要性	回答数
支援は受けていない、あるいは、必要なかった	8
支援を受け、満足している	2
支援を受けたが、不満だった	1

支援を受けたかったが、知らなかった	1
総　　計	**12**

５．４．コロナ禍の生活面について

５．４．１．コロナ禍の経済的影響

経済的影響については、影響はあまりなかったとする回答（「アルバイトに入る回数や時間に変化はなかった」「保護者からの仕送りに変化はなかった」）が5件あるが、負の影響を受けたとする回答（「アルバイトに入る回数や時間が減った」「アルバイト先が休業したり雇止めにあった」「保護者からの仕送り額が減った」「パートタイムの仕事を失った」）も7件、寄せられている。正負いずれの影響なのか判然としない回答（「アルバイトに入る回数や時間が増えた」「これ以上アルバイトを増やすことはできない」）もあるが、全体としては、回答者の半数近くが負の経済的影響を受けたものと推測される。

表18　コロナ禍の経済的影響（複数回答可）

コロナ禍の経済的影響	回答数
アルバイトに入る回数や時間に変化はなかった	2
アルバイトに入る回数や時間が減った	3
アルバイト先が休業したり雇止めにあった	2
アルバイトに入る回数や時間が増えた	1
保護者からの仕送りに変化はなかった	3
保護者からの仕送り額が減った	1
その他	3
これ以上アルバイトを増やすことはできない	1
パートタイムの仕事を失った	1
私は研究者なので、この質問には関係ありません	1
総　　計	**15**

５．４．２．就職活動への影響

就職活動については、「希望していた企業や自治体が募集を停止した」「就職活動をやめた」という深刻な負の影響を受けたとする回答が3件寄せられている。また、募集停止に伴う影響と推測されるが、「志望業界を見直した（変更した）」とする回答も2件ある。他方で、地方大学の学生にとっては正の影響となり得る面接等のオンライ

ン化を経験したとの回答（「Web 面接など、オンライン化された」）も4件ある。

表19　就職活動への影響（複数回答可）

就職活動への影響	回答数
Web 面接など、オンライン化された	4
希望していた企業や自治体が募集を停止した	2
志望業界を見直した（変更した）	2
就職活動をやめた	1
その他	2
まだ検討中	1
大学院に入りたいです	1
総　　計	**11**

５．４．３．メンタルヘルスへの影響

メンタルヘルスへの影響は、全体としてネガティブなものが多かったようである。事実、「通常と変わらず、安定的に過ごした」とする回答はわずか3件であった。その他の学生は、生活のリズムが崩れたり、抑うつ傾向にあったりしたことが分かる。

表20　メンタルヘルスへの影響（複数回答可）

メンタルヘルスへの影響	回答数
通常と変わらず、安定的に過ごした	3
生活のリズムが崩れた	7
気分が落ち込んだ	6
友達に会えなかったり課外活動が行えなかったりで寂しかった	6
疲れた感じがした、または気力がなかった	5
物事に対してほとんど興味が無くなった、楽しめなかった	5
食欲がなかった、あるいは食べ過ぎた	5
寝つきが悪くなった、途中で目が覚めた、反対に眠り過ぎた	5
家族に会えず寂しかった	4
新聞やテレビを見ることなどに集中することが難しかった	3
総　　計	**49**

５．４．４．医療機関の受診について

上記のようなメンタルヘルスへの影響があったものの、医療機関またはカウンセリ

ングの受診をしたとする回答は1名にとどまっている。もっとも、受診には至っていない11名のうち5名は「迷ったが受診しなかった」と回答している。回答者の半数程度は、受診を考えるほどに精神的に不安定で疲れた状態にあったことが推測される。

表21　医療機関やカウンセリングの受診

医療機関やカウンセリングの受診	回答数
受診したことがない	6
迷ったが受診しなかった	5
受診したことがある	1
総　　計	12

５．４．５．遠隔授業が始まった当初の生活への影響、変化について（自由記述）

遠隔授業が始まった当初の生活への影響、変化についても、メンタルヘルスへの影響に関する回答と同様、3名は大きな影響はなかったと回答している。他方で、不安、モチベーションの低下、コミュニケーションの困難、経済事情の悪化を指摘する回答も同じ程度、寄せられている。

表22　遠隔授業が始まった当初の生活への影響、変化について

遠隔授業が始まった当初の生活への影響、変化	回答数
特になかった。変化なし。	2
生活においては、あまり影響はないです。しかし、他の学生との交流がないのはわざわざ日本の大学に留学する意義がないです。	1
昨年とあまり変わらないが慣れるようになりました。ですが、就活するのにコロナのことも考え、学校にいって支援を受けることや友達にあって相談することは積極的に取り組んでなかった。	1
最初からちょっと焦ったし、日本語も聞き取りにくいし、ペースも乱れました。	1
私は当時（2021年4月）、様々な理由で勉強に対するモチベーションを失っていました。オンライン授業に興味がない、真剣に取り組んでいない、家族に会えない、友達との交流が少ない、集中力がないなど、様々な理由で勉強のモチベーションが下がってしまいました。	1
数日前に日本に着いたばかりで、大学に行き、人に会うだけでなく、大学についてもっと知る機会がなかったため、とても大変でした。	1

同期型授業を受けることによってバイトが難しくなりました。 同時に経済的な事情も悪くなりました。 また、学習に対する不安感が生じました。	1
総　　計	**8**

５．４．６．遠隔授業が続いている最中の生活への影響、変化について（自由記述）

遠隔授業が続いている最中の生活への影響、変化についても、「特に変化がなかった」とする回答が3件、「徐々に慣れて乗り切ることができた」とする回答が1件ある一方で、「学業に興味を失った」「集中できなかった」「外出が減った」とする回答がそれぞれ3件寄せられている。これらの回答からは、遠隔授業が行われている環境にある程度スムーズ適応できた学生と、そうでない学生との差が大きかったことが推測される。

表23　遠隔授業が続いている最中の生活への影響、変化について

遠隔授業が続いている最中の生活への影響、変化	回答数
だんだん学業に興味を失い始めた . 続く状況に疲れる感じがしました。	1
休学前に1年を通ったので、学期が始まったとは感じられないので授業や課題に集中することが難しかった。	1
元々出かけるはあんまりしない、遠隔授業が始まって以来もっと出かけなくなった	1
だんだん慣れて、無事に半学期を乗り切りました。	1
変化なし、最後の方はオンライン授業に慣れた。	1
変化がないです。	1
なし	1
総　　計	**7**

５．４．７．夏休み時期の生活への影響、変化について（自由記述）

夏休み時期の生活への影響、変化に関しては、特にないとする回答が5件、散歩による外出を増やし気分転換を図ったとする回答が1件、そして、帰省し家族に再会したことがプラスに作用したとする回答が1件であった。

表24　夏休み時期の生活への影響、変化について

記　　述	回答数
なし	2
いつもの通りです。	1
変化はないです。普通に旅行とか、勉強とかします。	1
家とアルバイト先にいる時間が多く、学校がある時とあまり変わらない	1
家に閉じこもって過ごすことはもうだめだと思い、毎日散歩をした。感染が怖かったので、人が少ない朝5時に出かけた。	1
実家に帰る機会があり、家族に会えたこともプラスに作用しました。	1
総　　計	**7**

６．考　察

以上のような単純集計結果が示す法文学部留学生の学修面の主観的評価、大学等からのサポート、生活面の変化等はどのような関連性を示しているだろうか。本節ではクロス集計による分析を行う。

本稿の標本は合計12と少ない。成績に関する回答については、「昨年度の成績と比較ができない」とする4名を除くと標本数は合計8とさらに少なくなる。このように標本数が小さい場合、クロス集計表の行要素と列要素の2つの属性が独立であるか否か、すなわち、2属性の間に統計的に有意な関連があるかどうかを検定する方法としては、Fisher の正確確率検定（Fisher's exact test）（Fisher, 1922）が有名である。もっとも、この検定は行列の周辺度数を固定する条件付きの検定である。これに対して、Boschloo の正確確率検定は行列の周辺度数を固定せず全カウントのみ固定する条件なしの検定である。近年の研究によれば、Boschloo の正確確率検定（Boschloo's exact test）（Boschloo, 1970）は Fisher の正確確率検定よりも検定力が高い（Lydersen et al., 2009）。そこで本稿では、Boschloo の正確確率検定を行った。

６．１．コロナ禍の学修面について

まず成績の主観的評価については、全体の約17％（昨年度と成績比較可能な留学生の中で25％）にあたる2名の留学生が昨年度と比べて成績が下がった、と回答している。この割合自体は、日本人学生の回答割合と類似している（青木他，2022）。

ここで興味をひかれるのは、どのような留学生が成績低下を感じているのか、という点である。そこで、表10の5選択肢のうち「昨年度の成績と比較ができない」とする2選択肢を除く3選択肢を「成績維持・改善」「成績悪化」の二項に整理し直した上

で、遠隔授業の困難さ等に対する回答も二項に整理し直して、クロス集計と Boschloo の正確確率検定を行った。アンケート回答の二項分類の詳細は、付録2に示す。

表25　成績の主観的評価と性別等との関連

	(1)		(2)		(3)	
パネル A 成績	性別		居住形態		同期型（Zoom 等）授業数	
	男性	女性	一人暮らし以外	一人暮らし	1以上	0
維持・改善	3	3	2	4	5	1
悪化	0	2	1	1	2	0
p 値	0.3188		1		1	
パネル B 成績	非同期型（Moodle 等）授業数		非同期型（Email 等）授業数		遠隔授業で困ったこと	
	1以上	0	1以上	0	なし	あり
維持・改善	5	1	4	2	0	6
悪化	2	0	0	2	0	2
p 値	1		0.177		—	
パネル C 成績	遠隔授業受講に技術的障害		安定的な気持ちで遠隔授業受講		大学からのサポート期待	
	なし	あり	できなかった	できた	あり	なし
維持・改善	2	4	2	4	1	5
悪化	0	2	2	0	2	0
p 値	1		0.177		0.02826	
パネル D 成績	大学からの緊急支援		市等の支援		経済的影響	
	必要・受けた	不要・受けていない	必要・受けた	不要・受けていない	あり	なし
維持・改善	1	5	2	4	2	4
悪化	2	0	0	2	2	0
p 値	0.02826		1		0.177	
パネル E 成績	メンタルヘルス		医療機関等の受診			
	不安定	安定	あり・考えた	なし		
維持・改善	5	1	2	4		
悪化	2	0	1	1		
p 値	1		1			

表25が示すように、ほとんどの項目が成績の主観的評価と統計的に有意な関連を示していない。遠隔授業で「授業内容を理解できなかった」等の困ったことがあった、「通信環境」等の技術的障害があったとする留学生は少なくなく、成績への影響が懸念されたが、少なくとも主観的には成績低下との関連があるとは言えないようである。成績の主観的評価と統計的に有意な関連を示したのは「大学からのサポート期待」（表25　パネル C　第(3)列）と「大学からの緊急支援」（表25　パネル D　第(1)列）のみである。すなわち、大学に面談等のサポートを期待していた、もしくは大学からの金銭的な緊急支援を必要としていた・受けた留学生は、成績が悪化したと主観的に

評価しているようである。因果関係は不明だが、大学からのサポート・緊急支援を必要としていた・受けた留学生は、それらを必要としなかった留学生に比べて学修環境に恵まれていなかったのかもしれない。そして、そのような学修環境が当該留学生に及ぼした影響の結果として、成績の主観的評価の低下が生じたのかもしれない。

大学からのサポート・支援やそれらの周知のあり方等が成績の主観的評価にどのような効果をもたらすのかは、残念ながら今回の調査からはわからない。また、大学からの各種サポート・支援が学生の学修業績に与える効果の分析は本稿の範囲を超える。もっとも、愛媛大学においても、大学からのサポート・支援はコロナ禍対応以外のものも複数、提供されている。大学からのサポート・支援が学生に与える効果の分析は、今後の重要な課題である。

次に、性別と遠隔授業で困ったこと・技術的障害の経験との間に関連があるかどうかを検討した。表26が示すように、男性、女性のいずれも多くが遠隔授業で困ったこと・技術的障害を経験しており、統計的に有意な違いは両性間に認められない。

表26　性別と遠隔授業で困ったこと・技術的障害との関連

	(1)		(2)	
パネルA 性別	遠隔授業で困ったこと		遠隔授業受講に技術的障害	
	なし	あり	なし	あり
男性	0	5	2	3
女性	1	6	1	6
p 値	1		0.3595	

では、安定的な気持ちで遠隔授業を受講できたかどうかは、性別等と関連を有しているだろうか。表27が示すように、ここでもほとんどの項目が安定的な気持ちで遠隔授業を受講できたかどうかと統計的に有意な関連を示していない。統計的に有意な関連を示したのは再び「大学からのサポート期待」（表27　パネルC　第(2)列）であった。遠隔授業を受けていた際に不安等を感じた学生は、不安を感じなかった学生に比べて、大学からのサポートをより強く期待する傾向にあったものと推測される。この分析結果は、対面授業中に比べてコミュニケーションがより難しくなる遠隔授業中においてこそ、学生がサポートの期待・要請を大学側により容易かつ気軽に伝えることを可能にする制度的工夫の必要性を示唆していると言えるかもしれない。（なお、「大学からの緊急支援」（表27　パネルC　第(3)列）は今回、統計的に有意な関連を示していない。大学からの緊急支援は金銭的なものであったため、遠隔授業を受けていた際の不安とは強い関連がないのかもしれない。）

表27　安定的な気持ちでの遠隔授業受講と性別等との関連

	(1)		(2)		(3)	
パネル A 安定的な気持ちでの遠隔授業受講	性別		居住形態		同期型（Zoom 等）授業数	
	男性	女性	一人暮らし以外	一人暮らし	1以上	0
できなかった	1	3	1	3	3	1
できた	4	4	4	4	7	1
p 値	0.4705		0.4705		1	
パネル B 安定的な気持ちでの遠隔授業受講	非同期型（Moodle 等）授業数		非同期型（Email 等）授業数		遠隔授業で困ったこと	
	1以上	0	1以上	0	なし	あり
できなかった	3	1	1	3	0	4
できた	8	0	6	2	1	7
p 値	0.1972		0.1144		1	
パネル C 安定的な気持ちでの遠隔授業受講	遠隔授業受講に技術的障害		大学からのサポート期待		大学の緊急支援	
	なし	あり	あり	なし	必要・受けた	不要・受けていない
できなかった	0	4	3	1	3	1
できた	3	5	1	7	2	6
p 値	0.2731		0.0244		0.1144	
パネル D 安定的な気持ちでの遠隔授業受講	市等の支援		経済的影響		メンタルヘルス	
	必要・受けた	不要・受けていない	あり	なし	不安定	安定
できなかった	1	3	3	1	4	0
できた	3	5	4	4	7	1
p 値	1		0.4705		1	
パネル E 安定的な気持ちでの遠隔授業受講	医療機関等の受診					
	あり・考えた	なし				
できなかった	2	2				
できた	4	4				
p 値	1					

６．２．コロナ禍でのサポート面について

以上のクロス集計分析の結果は、2021年度の法文学部の留学生の場合、「大学からのサポート期待」の有無が、成績の主観的評価や遠隔授業受講時の気持ちと統計的に有意な関連を有していたことを示唆している。より具体的には、「大学からのサポート期待」をくみ上げてもらえなかった留学生が、成績の主観的評価の低下や遠隔授業受講時の気持ちの不安定化といった傾向をより強く示していたと考えられる。このことは逆に、「大学からのサポート期待」を留学生から適切・適確にくみ上げることができていれば、留学生の成績の主観的評価の低下や遠隔授業受講時の気持ちの不安定化を緩和させることができた可能性を示唆するものとも考えられるだろう。

それでは、「大学からのサポート期待」を有する留学生はどのような特徴を示して

いるのだろうか。「大学からのサポート期待」を留学生からくみ上げるための制度的工夫の具体的考察は今後の課題だが、この課題に取り組むためにも、今回の調査における「大学からのサポート期待」とその他の回答項目との関連を分析しておくことには意味があるだろう。（なお、「大学からのサポート期待」と「安定的な気持ちでの遠隔授業受講」との関連は前項で分析済みなのでここでは省略する。）

表28　大学からのサポート期待と性別等との関連

	(1)		(2)		(3)	
パネルA 大学からのサポート期待	性別		居住形態		同期型（Zoom 等）授業数	
	男性	女性	一人暮らし以外	一人暮らし	1以上	0
あり	0	4	1	3	3	1
なし	5	3	4	4	7	1
p 値	0.04818		0.4705		1	
パネルB 大学からのサポート期待	非同期型（Moodle 等）授業数		非同期型（Email 等）授業数		遠隔授業で困ったこと	
	1以上	0	1以上	0	なし	あり
あり	4	0	2	2	1	3
なし	7	1	5	3	0	8
p 値	1		1		0.1972	
パネルC 大学からのサポート期待	遠隔授業受講に技術的障害		大学の緊急支援		市等の支援	
	なし	あり	必要・受けた	不要・受けていない	必要・受けた	不要・受けていない
あり	1	3	3	1	1	3
なし	2	6	2	6	3	5
p 値	1		0.1144		1	
パネルD 大学からのサポート期待	経済的影響		メンタルヘルス		医療機関等の受診	
	あり	なし	不安定	安定	あり・考えた	なし
あり	3	1	4	0	2	2
なし	4	4	7	1	4	4
p 値	0.4705		1		1	

表28の結果からは、女性の留学生が「大学からのサポート期待」を有し表明する傾向が強いという示唆が得られる。性別以外の項目は、「大学からのサポート期待」と統計的に有意な関連を示していない。以上の結果は、もちろん、男性の留学生へのサポートが不要であることを意味するわけでも、性別以外の項目に留意する必要がないことを意味するわけでもない。もっとも、この結果は、より多くの留学生から授業や学生支援の改善に資する有益な意見をくみ上げるには、女性がより意見表明をしやすい制度設計を意識・工夫することが重要であることを示唆していると言えるかもしれない。

６．３．コロナ禍の生活面について

最後に、「メンタルヘルス」「医療機関等の受診」と性別等との関連をクロス集計により検討した。もっとも、表29、表30が示すように、何れの組み合わせにおいても統計的に有意な関連は見いだせなかった。「メンタルヘルス」の変化と「医療機関等の受診」の有無は、個別の要因と関連しているというよりはむしろ、コロナ禍による大学生活の全体的な変化と関連していると言えるのかもしれない。

表29　メンタルヘルスと性別等との関連

	(1)		(2)		(3)	
パネル A メンタルヘルス	性別		居住形態		同期型（Zoom 等）授業数	
	男性	女性	一人暮らし以外	一人暮らし	1以上	0
不安定	4	7	4	7	9	2
安定	1	0	1	0	1	0
p 値	0.1991		0.1991		1	
パネル B メンタルヘルス	非同期型（Moodle 等）授業数		非同期型（Email 等）授業数		遠隔授業で困ったこと	
	1以上	0	1以上	0	なし	あり
不安定	10	1	7	4	1	10
安定	1	0	0	1	0	1
p 値	1		0.1991		1	
パネル C メンタルヘルス	遠隔授業受講に技術的障害		大学の緊急支援		市等の支援	
	なし	あり	必要・受けた	不要・受けていない	必要・受けた	不要・受けていない
不安定	2	9	5	6	4	7
安定	1	0	0	1	0	1
p 値	0.1629		1		1	
パネル D メンタルヘルス	経済的影響		医療機関等の受診			
	あり	なし	あり・考えた	なし		
不安定	7	4	6	5		
安定	0	1	0	1		
p 値	0.1991		1			

注：「安定的な気持ちでの遠隔授業受講」と「大学からのサポート期待」との関連は分析済みなのでここでは省略。

表30　医療機関等の受診と性別等との関連

	(1)		(2)		(3)	
パネル A 医療機関等の受診	性別		居住形態		同期型（Zoom 等）授業数	
	男性	女性	一人暮らし以外	一人暮らし	1以上	0
あり・考えた	3	3	3	3	4	2
なし	2	4	2	4	6	0
p 値	1		1		0.2263	
パネル B 医療機関等の受診	非同期型（Moodle 等）授業数		非同期型（Email 等）授業数		遠隔授業で困ったこと	
	1以上	0	1以上	0	なし	あり
あり・考えた	5	1	3	3	1	5
なし	6	0	4	2	0	6
p 値	1		1		1	
パネル C 医療機関等の受診	遠隔授業受講に技術的障害		大学の緊急支援		市等の支援	
	なし	あり	必要・受けた	不要・受けていない	必要・受けた	不要・受けていない
あり・考えた	2	4	4	2	3	3
なし	1	5	1	5	1	5
p 値	1		0.1626		0.3752	
パネル D 医療機関等の受診	経済的影響					
	あり	なし				
あり・考えた	4	2				
なし	3	3				
p 値	1					

注：「安定的な気持ちでの遠隔授業受講」「大学からのサポート期待」「メンタルヘルス」との関連は分析済みなのでここでは省略。

7．おわりに

増減を繰り返す我が国のコロナ禍の波も2022年7月には第7波に入り、2022年8月は1日あたり感染者数が20万人を超える日も珍しくなかった。しかし、本稿執筆現在（2022年10月31日）、日本の1日あたり感染者数は2万人台までに落ち着いている（参照、付録4・5）。1日あたり重症者数も100人台と、ピーク時（2021年9月）の2,000人台からは大幅な減少を見せている。世界全体を見ても、世界保健機関（World Health Organization, WHO）のテドロス事務局長（Director-General Dr Tedros）が2022年9月14日の記者会見で「まだ到達していないが、終わりが視野に入ってきた（We are not there yet, but the end is in sight）」（WHO, 2022）との見解を示すところまでコロナウイルス感染状況は改善してきている。

もっとも、今後、コロナウイルスをはじめとする感染症への対応の必要性がなくなることはないだろう。本稿を執筆している2022年度後学期においても、全てが対面授

業になったわけではない。感染者増加の新たな波が発生すれば、大学教育は再び遠隔手法による授業実施を増やすことになるだろう。ありうべき感染再拡大という事態への備えという意味も込めて、本プロジェクト・チームは、2022年度もアンケート調査、手記、座談会による意見聴取等を通じて、コロナ禍における愛媛大学法文学部生の学修状況や生活状況への影響を把握する作業を続けている。

本稿で行った2021年度法文学部留学生アンケート調査のクロス集計分析の結果からは、「大学からのサポート期待」をくみ上げてもらえなかった留学生が、成績の主観的評価の低下や遠隔授業受講時の気持ちの不安定化といった傾向をより強く示していることがわかった。この分析結果は、「大学からのサポート期待」を留学生から適切・適確にくみ上げるための制度的工夫の必要性を示唆するものと言えるだろう。本稿のクロス集計からはさらに、「大学からのサポート期待」を有し表明する傾向が強いのは女性の留学生であることもわかった。この結果は、より多くの留学生から授業や学生支援の改善に資する有益な意見をくみ上げるには、女性がより意見表明をしやすい制度設計を意識・工夫することが重要であることを示唆していると言えるかもしれない（もちろん、男性の留学生へのサポートも忘れてはならないことは言うまでもないが）。

なお、本稿では、先行調査（青木他，2022）で得られた日本人学生の回答と留学生の回答との比較、及び、比較を通じて留学生の回答の特徴を析出する作業は実施できなかった。今後の課題としたい。

謝辞

本研究は、令和3年度法文学部戦略経費、令和3年度愛媛大学教育改革促進事業（愛大教育改革 GP）及び JSPS 科研費19K21723の助成を受けたものである。また、今回のアンケート調査実施にあたっては、愛媛大学法文学部の教員・留学生の多大な協力を頂いた。さらに、留学生から寄せられた手記の翻訳にあたっては、愛媛大学法文学部の秋谷裕幸教授のご助力を賜った。深く感謝申し上げる。なお、本文中にあり得る誤りは全て筆者の責に帰すものである。

参考文献

⑴　青木理奈，鈴木靜，福井秀樹，小佐井良太，石坂晋哉．（2021a）．コロナ禍における法文学部の被災記録の収集と保存Ⅰ ―学生を対象としたアンケート調査の単純集計結果―．愛媛大学法文学部論集．社会科学編，50，37-68.

⑵　青木理奈，鈴木靜，福井秀樹，小佐井良太，石坂晋哉．（2021b）．コロナ禍における法文学部の被災記録の収集と保存Ⅱ―2020年度学生座談会報告書―．愛媛大学法文学部論集．社会科学編，51，117-138.

⑶　青木理奈，鈴木靜，福井秀樹，小佐井良太，石坂晋哉．（2021c）．コロナ禍における法文学部の被災記録の収集と保存Ⅲ ―2020年度学生手記の分析―．愛媛大学法文学部論集．社会科学編，51，93-111.

⑷　青木理奈，鈴木靜，福井秀樹，小佐井良太，石坂晋哉，太田響子，池貞姫，十河宏行，中川未来．（2022a）．コロナ禍における法文学部の被災記録の収集と保存Ⅳ― 2021年度学生を対象としたアンケート調査の単純集計結果―．愛媛大学法文学部論集．社会科学編，52，19-54.

⑸　青木理奈，鈴木靜，福井秀樹，小佐井良太，石坂晋哉，太田響子，池貞姫，十河宏行，中川未来．（2022b）．コロナ禍における法文学部の被災記録の収集と保存Ⅴ ―2021年度学生座談会報告書―．愛媛大学法文学部論集．社会科学編，53，133-150.

⑹　青木理奈，鈴木靜，福井秀樹，小佐井良太，石坂晋哉，太田響子，池貞姫，十河宏行，中川未来．（2022c）．コロナ禍における法文学部の被災記録の収集と保存Ⅵ―2021年度学生手記の分析―．愛媛大学法文学部論集．社会科学編，53，37-57.

⑺　鈴木靜，青木理奈，福井秀樹，小佐井良太，石坂晋哉，太田響子，池貞姫，十河宏行，中川未来．（2022）．コロナ禍における授業提供体制の変化と学生意識―アメリカ・スタンフォード大学大学院生等座談会報告書―．社会科学編，53，121-132.

⑻　Boschloo, R. D.（1970）. Raised conditional level of significance for the 2x2-table when testing the equality of two probabilities: repr. from Statistica Neerlandica 24（1970）, p. 1-35. Stichting Mathematisch Centrum. Statistische Afdeling,（SP 109/70）.

⑼　Fisher, R. A.（1922）. On the Interpretation of $\chi 2$ from Contingency Tables, and the Calculation of P. Journal of the Royal Statistical Society, 85（1）, 87-94.

⑽　Lydersen, S., Fagerland, M. W., & Laake, P.（2009）. Recommended tests for association in 2×2 tables. Statistics in medicine, 28（7）, 1159-1175.

⑾　World Health Organization（WHO）.（2022）. WHO Director-General's opening remarks at the media briefing– 14 September 2022. https://www.who.int/director-general/speeches/detail/who-director-general-s-opening-remarks-at-the-media-briefing--14-september-2022（Accessed on October 21, 2022）

付録

付録1　アンケート（日本語）

コロナ禍における法文学部留学生の学修・生活への影響アンケート

このアンケートは、令和３年度法文学部戦略経費および令和３年度愛媛大学教育改革促進事業（愛大教育改革 GP）「コロナ禍における法文学部学生の被災記録の収集、保存」の一環として、留学生の学修・生活へのコロナ禍の影響をお聞きするものです。これは、学術目的の調査であり、後世に役立てるための記録として保存します。

本アンケート調査の対象は、愛媛大学法文学部の留学生です。本調査の回答により収集された情報は、個人情報保護法（個人情報の保護に関する法律）にしたがって適切に管理されます。本調査の結果を報告書・論文等で公表する場合、任意の自由記述欄に記入された回答以外の回答は統計的に処理されます。ご記入いただいた情報は、上記の利用目的のみに使用し、第三者に提供することはございません。

このアンケートは、原則匿名です。従って、お名前は書かないでください。しかし、今後手記を提供してくださる場合は、お名前と連絡先をお聞きいたします。

アンケート内容や個人情報の取り扱いに関するお問い合わせは、下記までご連絡ください。

【お問い合わせ先】

担当：福井　秀樹（fukui.hideki.hz@ehime-u.ac.jp）

回答にはおよそ5～10分かかります。ご協力の程、何卒よろしくお願いいたします。

代表　福井秀樹・池　貞姫

* 必須

0. 個人情報の利用目的・取り扱いについて

本アンケートにご記載いただく個人情報について、利用目的と取り扱い方法を以下に記載いたしますので、ご確認いただきますようお願い申し上げます。

【個人情報の利用目的】

アンケート結果から統計資料を作成し、愛媛大学における留学生のニーズ、愛媛大学による留学生支援の改善点を見つけるため。

ご回答いただいた内容を報告書・論文等に掲載するため。また、任意の自由記述欄に寄せられたご意見については、原文のまま掲載させていただく可能性がございます。

【個人情報の取り扱い】

ご記入いただいた個人情報につきましては、管理責任者を定め、紛失や漏洩が発生しないように努めます。

ご記入いただいた個人情報は、上記の利用目的のみに使用し、第三者に提供することはございません。

アンケート内容や、個人情報の取り扱いに関するお問い合わせにつきましては、担当の福井秀樹（fukui.hideki.hz@ehime-u.ac.jp）までご連絡ください。

上記に同意しますか＊
○　同意する
○　同意しない

【個人情報】

１．国籍を教えてください（答えたくない場合は空欄のままでけっこうです）。

２．日本滞在期間を教えてください（答えたくない場合は空欄のままでけっこうです）。

３．性別を教えてください＊
1つだけマークしてください。
○　男性
○　女性
○　その他

４．学年を教えてください＊
1つだけマークしてください。
○　学部1回生
○　学部2回生
○　学部3回生
○　学部4回生以上
○　大学院1回生
○　大学院2回生以上

５．コースを教えてください＊
1つだけマークしてください。
○　昼間主：1回生のため、コース未定
○　夜間主：1回生のため、コース未定
○　昼間主：法学・政策学コース
○　夜間主：法学・政策学コース
○　昼間主：人文学コース
○　夜間主：人文学コース
○　昼間主：グローバル・スタディーズコース
○　大学院（法文学研究科総合政策専攻・人文社会科学研究科法学コース）
○　大学院（法文学研究科人文学専攻・人文社会科学研究科人文学コース）

６．2021年度前期の居住形態を教えてください＊
1つだけマークしてください。
○　1人暮らし
○　学生寮
○　その他

６－１．その他の場合、詳細を教えてください。

【学修面】

この設問以降、2021年度前期（1Q/2Q) における法文学部（大学院を含む）と共通教育の遠隔授業についてお聞きします。

1．Zoom 等の同期型授業は何科目ありましたか *

1つだけマークしてください。

◯　1科目
◯　2〜5科目
◯　6科目以上
◯　なし

2．Moodle を利用した非同期型授業は、何科目ありましたか *

1つだけマークしてください。

◯　1科目
◯　2〜5科目
◯　6科目以上
◯　なし

3．修学支援システムやメールのみを利用した非同期型授業は、何科目ありましたか *

1つだけマークしてください。

◯　1科目
◯　2〜5科目
◯　6科目以上
◯　なし

4．昨年度（2020年度）と比較して、前期の成績（単位取得数、評価）はいかがでしたか *

1つだけマークしてください。

◯　昨年度（2020年度）と比べて成績は良かった
◯　昨年度（2020年度）と比べて成績は変わらない
◯　昨年度（2020年度）と比べて成績は下がった
◯　1回生なので昨年度（2020年度）と比べられない
◯　昨年度（2020年度）と比べて履修した科目が少なくて比較できない
◯　その他
◯　Other

4－1．その他の場合、詳細を教えてください。

5．遠隔授業で、困ったことについて教えてください（複数回答可）*

当てはまるものをすべて選択してください。

◯　大学や担当教員からの授業に関わる連絡が遅かったこと
◯　大学や担当教員からのメール連絡が頻繁であったこと
◯　授業科目により授業方法（同期型または非同期型等）や教材提供方法（Moodle またはメール等）が異なり、分かりにくかったこと
◯　教材提供不十分で、授業内容を理解できなかったこと

○　教員による説明が少なく授業内容を理解できなかったこと
○　通信環境の関係で、同期型の授業受信が不安定だったこと
○　課題やレポートの書き方が分からなかったこと
○　課題やレポート提出の回数が多いこと
○　複数の科目の課題やレポート提出日が重なること
○　科目教員と連絡がつかなかったこと、つきにくかったこと
○　出席している授業で、課題やレポートが提出されているか確認ができなかったこと
○　困ったことはなかった
○　その他

５－１．その他の場合、詳細を教えてください。

６．遠隔授業で、良かったことがあれば教えてください（複数回答可）*
当てはまるものをすべて選択してください。
○　緊急事態宣言、まん延防止等重点措置等の下でも受講できたこと
○　自分の好きな時間に受講できたこと
○　動画配信型の教材を繰り返し視聴できたこと
○　教員に質問できたこと
○　通学時間がなかったこと
○　1人で勉強する方が落ち着くこと
○　良かったことはなかった
○　その他

６－１．その他の場合、詳細を教えてください。

７．遠隔授業を受けるのに障害になっていたことはどのようなことですか（複数回答可）*
当てはまるものをすべて選択してください。
○　自分のパソコン（スマホ、タブレット含む）がなかった
○　自分のパソコン（スマホ、タブレット含む）の性能が低かった
○　自宅の通信環境が整っていなかった（通信速度が遅い等も含む）
○　自宅で自分1人になれる部屋（環境）がなかった
○　Moodle などの操作方法がわからなかった
○　言葉の障壁があった
○　障害になることはなかった
○　その他

７－１．その他の場合、詳細を教えてください。

８．遠隔授業を受けていた時の気持ちについて教えてください（複数回答可）*
当てはまるものをすべて選択してください。
○　通常と変わらず、安定的に遠隔授業を受けることができた
○　困ったことを教員に相談できず、不安になった
○　困ったことを友達や先輩に相談できず、不安になった
○　昨年度以上に長時間の学修を行ったため、疲労度が高まった

○　その他

８－１．その他の場合、詳細を教えてください。

【サポート面】
コロナ禍での大学や大学以外からのサポート面についてお聞きします。

１．遠隔授業の際に、あったら良いと思う大学からのサポートはどのようなものでしたか。自由にお書きください。

２．これまで大学独自の緊急支援を受けたことがありますか *
1つだけマークしてください。
○　支援を受け、満足している
○　支援を受けたが、不満だった
○　支援を受けたくて応募したが、不採択だった
○　支援を受けたかったが、知らなかった
○　支援は受けていない、あるいは、必要なかった
○　その他

２－１．大学独自の緊急支援を受けたが、不満だった方へお聞きします
不満だった理由を教えてください

２－２．その他の場合、詳細を教えてください。

３．松山市や大学生協等から学生への食糧支援、生理用品の提供などを受けたことがありますか *
1つだけマークしてください。
○　支援を受け、満足している
○　支援を受けたが、不満だった
○　支援を受けたかったが、知らなかった
○　支援は受けていない、あるいは、必要なかった
○　その他

３－１．食糧支援、生理用品支援を受けたが、不満だった方へお聞きします
不満だった理由を教えてください *

３－２．その他の場合、詳細を教えてください。

【生活面】
コロナ禍での生活面についてお聞きします

１．前期（1Q/2Q) の遠隔授業期間において、どのような経済的な影響がありましたか（複数回答可）*
当てはまるものをすべて選択してください。
○　アルバイトに入る回数や時間に変化はなかった
○　アルバイトに入る回数や時間が減った

○　アルバイトに入る回数や時間が増えた
○　アルバイト先が休業したり雇止めにあった
○　新たにアルバイトを始めた
○　保護者からの仕送りに変化はなかった
○　保護者からの仕送り額が減った
○　保護者からの仕送り額が増えた
○　保護者からの仕送りがなくなった
○　その他

１－１．その他の場合、詳細を教えてください。

２．就職活動にどのような影響がありましたか（複数回答可）*
当てはまるものをすべて選択してください。
○　就職活動に変化はなかった
○　希望していた企業や自治体が募集を停止した
○　公務員試験や就職試験が延期になった
○　希望していた企業や自治体の応募を諦めた
○　Web 面接など、オンライン化された
○　志望業界を見直した（変更した）
○　就職活動をやめた
○　4回生以上ではない、または就職活動はしていない
○　その他

２－１．その他の場合、詳細を教えてください。

３．遠隔授業期間において、メンタルヘルスにどのような変化がありましたか（複数回答可）*
当てはまるものをすべて選択してください。
○　通常と変わらず、安定的に過ごした
○　物事に対してほとんど興味が無くなった、楽しめなかった
○　気分が落ち込んだ
○　寝つきが悪くなった、途中で目が覚めた、反対に眠り過ぎた
○　疲れた感じがした、または気力がなかった
○　食欲がなかった、あるいは食べ過ぎた
○　新聞やテレビを見ることなどに集中することが難しかった
○　生活のリズムが崩れた
○　家族に会えず寂しかった
○　友達に会えなかったり課外活動が行えなかったりで寂しかった
○　その他

３－１．その他の場合、詳細を教えてください。

４．長期化するコロナ禍で、メンタル不調により医療機関やカウンセリングに行きましたか
○　受診したことがある
○　受診したことがない

○　迷ったが受診しなかった
○　その他

４－１．その他の場合、詳細を教えてください。

５．今年度、遠隔授業が始まった４月、あなたの生活において、どのような影響がありましたか。自由にお書きください。（遠隔授業開始は4月22日）

６．その後、遠隔授業が1、2カ月続いた頃、あなたの生活において、どのような影響や変化がありましたか。自由にお書きください。

７．夏休み、あなたの生活において、どのような影響や変化がありましたか。自由にお書きください。

【協力して頂ける方のみ】謝礼：クオカード3,000円
本プロジェクトでは、学生の皆さんにコロナ禍での大学生活の記録を手記としてまとめていただきたいと希望しています。手記の締め切りは2022年1月末日で、語数に制限はありません。手記をお寄せいただいた方には、謝礼（クオカード3,000円分）をお出しします。お引き受けくださる方は、福井と池（下記の宛先）までメールにてご連絡ください。連絡頂いた学生さんには、福井から依頼のメールを致します。

宛先：福井秀樹：fukui.hideki.hz@ehime-u.ac.jp、池　貞姫：chi.jong_hi.mk@ehime-u.ac.jp

件名：「コロナ禍における法文学部学生の手記について」
本文：お名前をフルネームで書いてください。
こちらから連絡しても良いメールアドレスを正しく書いてください。

質問は以上です。ご回答ありがとうございました。

付録2　アンケート回答の二項分類

二項分類	アンケート質問文と回答選択肢・自由回答
居住形態	2021年度前期の居住形態を教えてください
一人暮らし	1人暮らし
一人暮らし以外	学生寮、その他
同期型（Zoom 等）授業数 非同期型（Moodle 等）授業数 非同期型（Email 等）授業数	Zoom 等の同期型授業は何科目ありましたか Moodle を利用した非同期型授業は、何科目ありましたか 修学支援システムやメールのみを利用した非同期型授業は、何科目ありましたか
0	なし
1以上	1科目、2～5科目、6科目以上
成績	昨年度（2020年度）と比較して、前期の成績（単位取得数、評価）はいかがでしたか［*］
維持・改善	昨年度（2020年度）と比べて成績は良かった 昨年度（2020年度）と比べて成績は変わらない
悪化	昨年度（2020年度）と比べて成績は下がった

遠隔授業で困ったこと	遠隔授業で、困ったことについて教えてください（複数回答可）
なし	困ったことはなかった
あり	大学や担当教員からの授業に関わる連絡が遅かったこと 大学や担当教員からのメール連絡が頻繁であったこと 授業科目により授業方法（同期型または非同期型等）や教材提供方法（Moodle またはメール等）が異なり、分かりにくかったこと 教材提供不十分で、授業内容を理解できなかったこと 教員による説明が少なく授業内容を理解できなかったこと 通信環境の関係で、同期型の授業受信が不安定だったこと 課題やレポートの書き方が分からなかったこと 課題やレポート提出の回数が多いこと 複数の科目の課題やレポート提出日が重なること 科目教員と連絡がつかなかったこと、つきにくかったこと 出席している授業で、課題やレポートが提出されているか確認ができなかったこと その他
遠隔授業受講に技術的障害	遠隔授業を受けるのに障害になっていたことはどのようなことですか（複数回答可）
なし	障害になることはなかった
あり	自分のパソコン（スマホ、タブレット含む）がなかった 自分のパソコン（スマホ、タブレット含む）の性能が低かった 自宅の通信環境が整っていなかった（通信速度が遅い等も含む） 自宅で自分1人になれる部屋（環境）がなかった Moodle などの操作方法がわからなかった 言葉の障壁があった その他
安定的な気持ちで遠隔授業受講	遠隔授業を受けていた時の気持ちについて教えてください（複数回答可）
できなかった	困ったことを教員に相談できず、不安になった 困ったことを友達や先輩に相談できず、不安になった 昨年度以上に長時間の学修を行ったため、疲労度が高まった その他
できた	通常と変わらず、安定的に遠隔授業を受けることができた
大学からのサポート期待	遠隔授業の際に、あったら良いと思う大学からのサポートはどのようなものでしたか。自由にお書きください。
あり	支援奨学金 学部やゼミの先輩との面談、気軽に質問できる教員のネット上オフィスアワー 遠隔授業をしながら教員との直接的な対面相談等が不可能だったため学期中学習に対する不安感等を調査するアンケート等を通じて調査結果が良くない学生に対して選択的な学習相談が周期的に行われてほしいです。
なし	特にないです。特に不十分だと思ったことはなかった。
大学からの緊急支援	これまで大学独自の緊急支援を受けたことがありますか
必要・受けた	支援を受け、満足している 支援を受けたが、不満だった 支援を受けたくて応募したが、不採択だった 支援を受けたかったが、知らなかった その他
不要・受けていない	支援は受けていない、あるいは、必要なかった

市等の支援	松山市や大学生協等から学生への食糧支援、生理用品の提供などを受けたことがありますか
必要・受けた	支援を受け、満足している 支援を受けたが、不満だった 支援を受けたかったが、知らなかった その他
不要・受けていない	支援は受けていない、あるいは、必要なかった
経済的影響	前期（1Q/2Q) の遠隔授業期間において、どのような経済的な影響がありましたか（複数回答可）
あり	アルバイトに入る回数や時間が減った アルバイトに入る回数や時間が増えた アルバイト先が休業したり雇止めにあった 新たにアルバイトを始めた 保護者からの仕送り額が減った 保護者からの仕送り額が増えた 保護者からの仕送りがなくなった その他
なし	アルバイトに入る回数や時間に変化はなかった 保護者からの仕送りに変化はなかった
メンタルヘルス	遠隔授業期間において、メンタルヘルスにどのような変化がありましたか（複数回答可）
不安定	物事に対してほとんど興味が無くなった、楽しめなかった 気分が落ち込んだ 寝つきが悪くなった、途中で目が覚めた、反対に眠り過ぎた 疲れた感じがした、または気力がなかった 食欲がなかった、あるいは食べ過ぎた 新聞やテレビを見ることなどに集中することが難しかった 生活のリズムが崩れた 家族に会えず寂しかった 友達に会えなかったり課外活動が行えなかったりで寂しかった その他
安定	通常と変わらず、安定的に過ごした
医療機関等の受診	長期化するコロナ禍で、メンタル不調により医療機関やカウンセリングに行きましたか
あり・考えた	受診したことがある 迷ったが受診しなかった その他
なし	受診したことがない

[*]「1回生なので昨年度（2020年度）と比べられない」「昨年度（2020年度）と比べて履修した科目が少なくて比較できない」「その他」は分析から除く。

付録3　手記

コロナ禍での大学生活や日常生活

苦労したこと

比较烦恼的事情大概有三点吧。首先是由于上网课的原因，跟ゼミ的老师和同学相处的时间就比较少了，所以感觉人际关系比较冷淡。虽然从进ゼミ到现在有一年多的时间了，但是连ゼミ里同学的名字可能都叫不出来。其次是因为コロナ的原因，出行受到了很大的影响。回国啊旅行啊什么的更不用说了，就包括日常的跟朋友一起出去玩，吃个饭之类的都会有些担心。反过来，这样一来的话在家的时间就会变得很长。特别是一个人生活，很容易失控，生活不规律，日夜颠倒等等这种事情常有发生。最后，感觉通学的过程变得有些痛苦了。在今年这一波コロナ开始之前，有一段时间是对面上课的，因为在那之前上了有快一两年的网课了嘛，突然开始对面上课，有种“去学校上课好麻烦啊”这种感觉。看来是养成了比较懒散的习惯……

悩ませられたことは3つほどあります。1つ目は、オンライン授業のため、先生やクラスメイトと過ごす時間が少なくなったことから、人間関係が希薄に感じられました。ゼミに入って1年以上経つのに、ゼミのクラスメイトの名前すら出てこないかもしれない。2つ目は、コロナの影響で、外出に大きな影響が出ていることです。帰国や旅行などはなおさらです。日頃友人と一緒に出かけたりご飯を食べたりすることも含めいささか心配でした。逆に言うと、その結果、家にいる時間がとても長くなってしまったのです。特に一人暮らしでは、コントロールが効かず生活が不規則になったり、昼夜が逆転したり、そういうことが起こりがちです。結局、学校に通うことが少し苦痛になったという感じです。今年のコロナの波が始まる前、私は対面で授業を受けていた時期がありました。それまで1～2年近くオンラインの授業を受けていたので、いきなり対面で授業を受けるようになって、「学校に行くのが面倒くさいな」という感覚がありました。ちょっと怠け癖がついてしまったようです……。

よかったこと

比较好的事情的话，参加就职活动的时候，在网上举行的说明会和面试算一个吧。不用再往东京啊大阪啊那些地方跑，省掉了不少的时间和路费。还有就是上课也比较方便了，省去了通学的麻烦，不会因为天气的原因产生翘课的想法（虽然我很少翘课。。）。最后就是因为是网上上课嘛，所以老师发的那些资料啊什么的可以很好的保存下来。之前对面的时候，虽然每节课老师也会发材料，自己也会记笔记什么的，但是学期一结束就全部扔掉了。

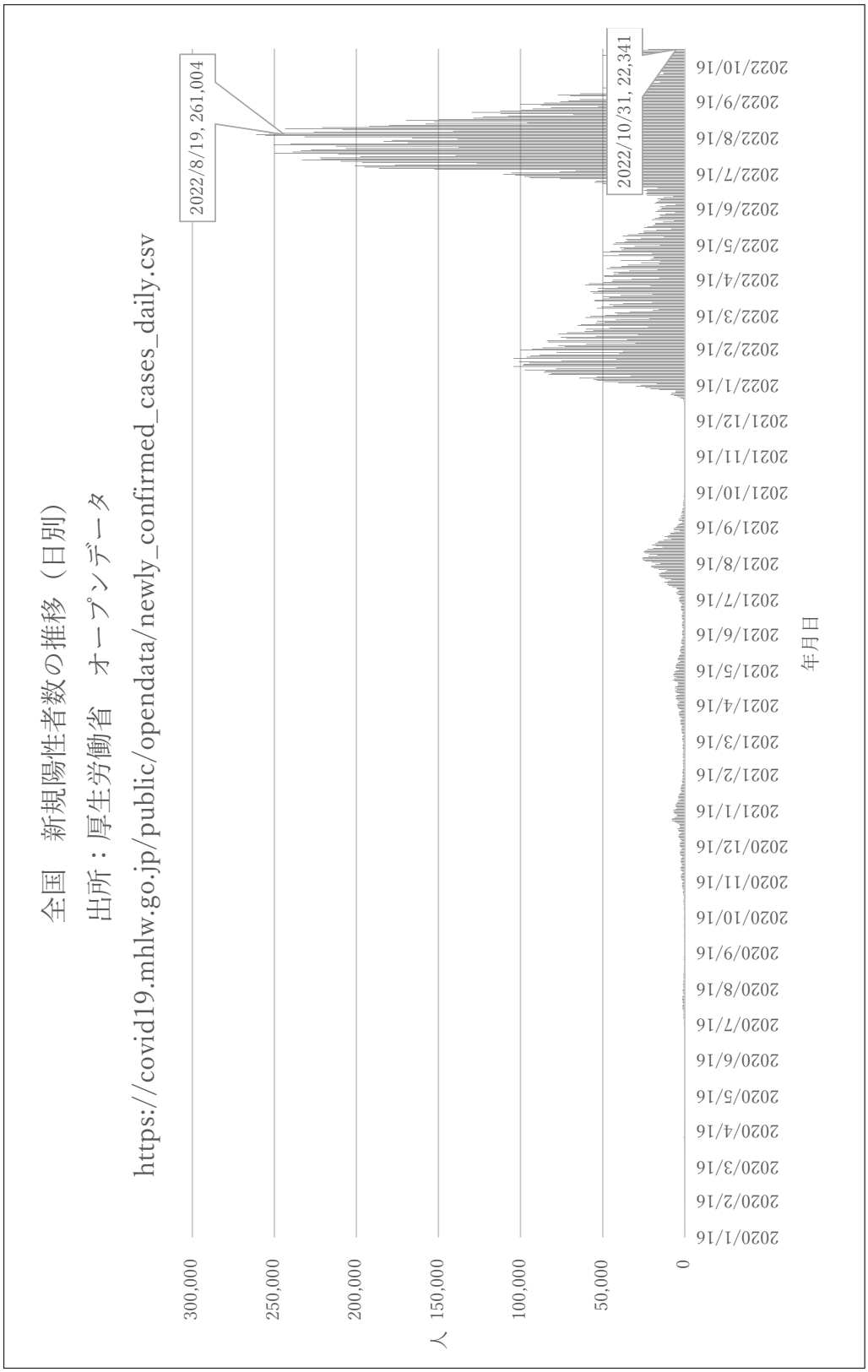
良かったことというと、就活のとき、オンラインで行われる説明会や面接に参加することが挙げられます。東京や大阪などに行く必要がないので、時間や旅費が大幅に節約できました。また、授業にも出やすいし、通学の手間も省けるし、天候のせいで授業をサボろうという気になることもない（めったにないけどね……）。最後に、オンライン授業なので、先生から送られてきた資料をすべて保存できることです。以前、対面だった時は、授業ごとに先生が資料を配ってくれて、ノートを取るなどしてはいたものの、学期が終わったら全部捨てていました。

感じたこと

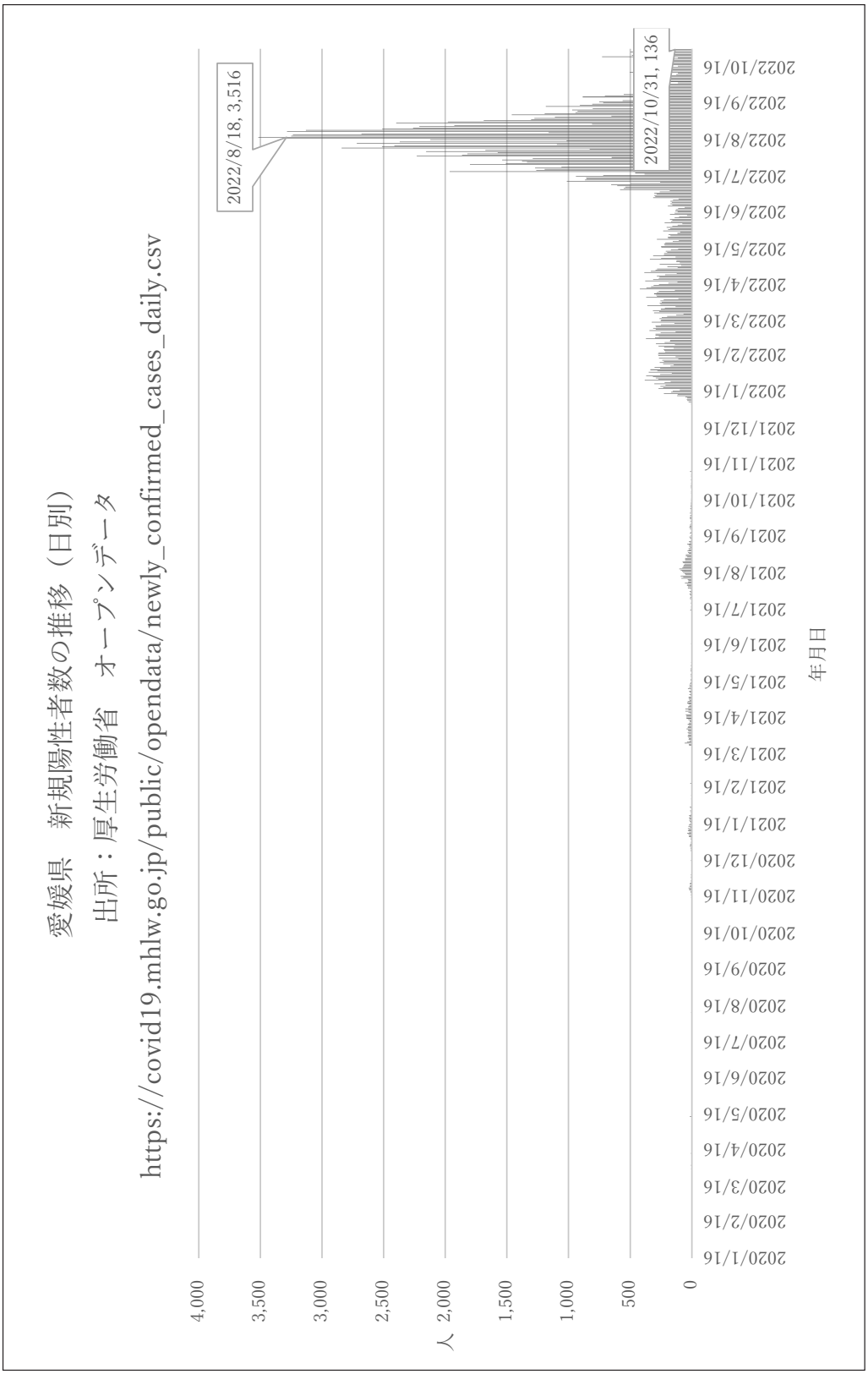
感触最深的事情就是这两年过的没有实感吧。有时候写日程表的时候甚至会忘了今年是哪一年，看到日历上写的2021年，就会有，“啊，今年都2021年了嘛”这种感觉，对于时间的感觉还停留在2019年年底，コロナ刚刚开始的时候。

一番心に残るのは、この2年間の現実感のなさでしょうか。スケジュールを書いていると、今が何年なのか忘れてしまうことがあって、カレンダーに書かれた2021年を見ると、「あ、もう2021年なんだ」と感じて、時間感覚はコロナが始まったばかりの2019年の終わりのままなんです。

付録4　全国　新規陽性者数の推移（日別）



付録5　愛媛県　新規陽性者数の推移（日別）



コロナ禍における
授業提供体制の変化と学生意識

― アメリカ・スタンフォード大学大学院生等座談会報告書 ―

鈴木　　静・青木　理奈・福井　秀樹
小佐井良太・石坂　晋哉・太田　響子
池　　貞姫・十河　宏行・中川　未来

1．はじめに

新型コロナウイルスの感染蔓延の長期化は、大学生にどのような影響をもたらしているか。愛媛大学も、急激な感染拡大に伴い、授業提供体制が激変して3年目を迎えようとしている。これまで本プロジェクトは、今回の未曽有の事態に際し、法文学部学生の生活上の被害実態を明らかにするとともに、法文学部の緊急時対応および遠隔授業等実施に係る記録を収集し、データベース化を行ってきた。具体的には、愛媛大学法文学部の学生を対象としたアンケート2020年度の実施[1)]、2021年度の実施[2)]のほか、学生手記を収集・分析[3)]、座談会を開催[4)]してきた。

これらの調査研究活動を続けるなかで、国内および海外の大学は、具体的にどのような授業提供体制で対応しているのか、その授業提供体制に対して学生はどのように捉え、課題だと考えているのか等、私たちは関心を広げるに至った。本稿では、コロナ禍における他大学の授業提供体制の変更や取組みを具体的に理解するとともに、学

1）青木理奈・鈴木静・福井秀樹・小佐井良太・石坂晋哉「コロナ禍における法文学部の被災記録の収集と保存Ⅰ－学生を対象としたアンケート調査の単純集計結果－」愛媛大学法文学部論集第50号（社会科学編）, pp37-68.2021.2月

2）青木理奈・鈴木静・福井秀樹・小佐井良太・石坂晋哉・太田響子・池貞姫・十河宏行・中川未来「コロナ禍における法文学部の被災記録の収集と保存Ⅳ－2021年度学生を対象としたアンケート調査の純集計結果－」愛媛大学法文学部論集第52号（社会科学編）, pp19-54.2022.2月

3）青木理奈・鈴木静・福井秀樹・小佐井良太・石坂晋哉「コロナ禍における法文学部の被災記録の収集と保存Ⅲ－2020年度学生手記の分析－」愛媛大学法文学部論集第51号（社会科学編）, pp93-111.2021.9月

4）青木理奈・鈴木静・福井秀樹・小佐井良太・石坂晋哉「コロナ禍における法文学部の被災記録の収集と保存Ⅱ－2020年度学生座談会報告書－」愛媛大学法文学部論集第51号（社会科学編）, pp117-138.2021.9月

生自身の捉え方を把握することを目的に、スタンフォード大学で日本語を学ぶ大学院生、学部生の協力を得て行った座談会の内容を掲載する。

２．対象と方法

本調査の対象は、スタンフォード大学の大学院生および学部生であり、調査日時、出席者は以下の通りである。座談会は、日本語で行われた。

⑴　座談会および参加者の概要

日　　時：2021年12月17日㈮　9：00－11：00（日本時間）
　　なお、アメリカ時間では12月16日㈭　16：00－18：00
開催形態：オンライン（Zoom ミーティングを使用）
出席学生：5名（男性2名、女性3名）

出席者の名前と所属等は、以下のとおりである。なお、所属等は2021年12月17日段階である。

1人目　A（スタンフォード大学大学院、女性）
2人目　B（スタンフォード大学学部生、女性）
3人目　C（スタンフォード大学大学院、男性）
4人目　D（スタンフォード大学大学院、男性、留学生）
5人目　E（スタンフォード大学大学院、女性、留学生、スタンフォード大学側のコーディネーターを兼ねる）

座談会には、愛媛大学法文学部等の学生・大学院生3名、本プロジェクトメンバーの教員等9名が同席し、適宜発言や意見交換を行った。本稿では、上記のスタンフォード大学大学院生等の発言を掲載する。また発言者への敬称を省く。

⑵　座談会の共通テーマ

今回の座談会では、「コロナ禍における大学生活への影響に関する日米大学比較―スタンフォード大学の大学院生、留学生の視点から―」をテーマにし、以下の3点につき学生に発言を求めた。① コロナ禍に行われた遠隔授業（オンライン授業）はどのような形態、授業のやり方だったのか。また、大学生活にどのような変化があったか、② コロナ禍が続くなかで、メンタルヘルスには影響があったか、大学のサポートを受けた場合、どのようなサポートが役に立ったか、③ コロナ禍が続くなかで、大学の授業、学生支援に対して、今後、どのようなことを希望するか、である。

⑶　倫理的配慮について

座談会冒頭において、本調査の趣旨を明確に伝え、論文等で公表すること、録音することを依頼し同意を得ている。本稿での発言は、事前に学生それぞれに確認している。学生が発言内容について削除を求めた場合には、応じている。

３．オンライン座談会の内容

以下の発言は文脈が変わらない程度に整えている。なお、冒頭の趣旨説明、教員や学生の自己紹介、重複する発言や感想、最後の教員からの挨拶等は省略している。司会は、法文学部教員が行っている。

―スタンフォード大学では、パンデミックが始まった際には、すべてが同期型の遠隔授業（オンライン授業）だったと聞いている。どのような授業が行われたのか。

A：パンデミックのあいだ、学生として授業を受け、またティーチングアシスタント（以下、TA と略す）を務めた。学生としては、ロシア語の授業が一番印象的だったので、例として取り上げたい。この授業が、最もテクノロジーを活かしたものであった。外国語の授業は、対面でないと言語力が身に付かないという意見が多いが、この授業は、典型的な対面授業より成功を収めたと思う。以前から、週に1回、新しい単語をクイズ方式で答えさせる工夫がされていた。パンデミックが始まった際、スマホに語学アプリをダウンロードさせて、学生たちに単語コンクールに参加させた。学生は、互いに競い合った。とても楽しく、普段より勉強に力を注いだ。

週に1回は、Zoom 利用してグループプロジェクトを行った。Zoom では、簡単にバーチャル背景が設定できるので、その背景づくりも楽しかった。例えば、これは宇宙で道に迷った海賊の話の写真である。私のパートナーが、海賊を助ける優しい動物や仲間を1人で全部演じた。対面授業とオンライン授業はそれぞれの長所と短所があるが、やむを得ずオンライン授業しかできない場合には、オンラインであることを活かせば、効果的な授業ができるのではないかと思う。

B：日本語の古文の授業について話したい。この授業は、私が履修した授業の中で最もオンラインフォーマットにあわせて、工夫がされた授業だった。週2回火曜日と木曜日の授業だが、スケジュールを変更する対応がとられた。週1回にして90分の授業にし、私たちは先生と時間を制限して会う機会が与えられ、学生同士も同様に時間を制限して会うことで、授業の疑問を解消した。オンライン授業が始まってから、

「Zoom 疲労」という言葉が流行した。それに伴い、授業を担当する先生は、学生に眼精疲労があれば、Zoom 画面をオフにするように指示した。画面をオフにしての受講はよかった思う。

D：（2021年の）夏学期は、私は学部生のクラスを担当して教えた。授業はすべてZoom で行った。週に2回授業があるのだが、1回は講義をし、もう1回は学生たちが自ら報告し、ディスカッションを行った。Zoom の機能を積極的に使用した。ホワイトボードを使って、学生に自分の考えを書いてもらった。学生は自分のプレゼンテーションを準備するために、ペアまたは3人のグループで、直接会わずにお互いやりとりをした。また、授業で中国の映画も見てもらった。私にとってこの授業はよい機会だった。オンラインを利用して、授業ができることは、本当に幸せな気がした。良い点というのは多分そのクラスを教えながら、自分自身も教材を見ながら教えることができることだ。とても便利になった。また、自分の用意したノートを見ながら教えることもできた。多くの留学生は母国に帰っていたので、オンラインでなければ授業に参加することすらできなかった。その意味で、Zoom は、新しい関係を作る機会をもたらした。悪い点はたくさんある。たとえば、人間関係はとても浅くなってしまった。学生は、パソコンの小さい長方形のスクリーンの中に納まってしまい、本当はどのような人かが全然わからない。時々、学生は授業中に自分の画面をオフにしてしまい、こちらから画面をオンにしてほしいと言わざるをえなかった。それでも画面をオンにしない学生もいた。海外にいた学生は、授業に参加することができたが、時差がある場合、大学の授業にあわせ、母国で深夜にクラスに参加することは難しかった。そのため、疲れることも多かった。

　さらには、Zoom の機能を使いこなすのも難しかった。ホワイトボードの使い方、グループブレイクアウトルームの使い方などは最初の頃は難しく、時間がかかった。クラスはよく混乱していた。

C：パンデミックがスタンフォード大学に影響を与え始めたのは、2020年3月だった。冬学期が終わるまで1週間を切っていた。その後、4月に授業をオンラインに全面的に変更することになった。私は1年生向けの日本語の TA として授業を教えていたが、授業を統括する先生が状況にあわせて変更して授業を行ったので、私自身にはそれほどの負担はなかった。先生方は非常に大変だったと思う。2021年春学期も、私は1年生の授業を担当した。外国語の授業は、対面授業より Zoom を利用した授業の方が効果的だと思う。理由は、Zoom はブレイクアウトという機能があり、その機能を生かして、学生は毎回それぞれ別々な相手と会話することが可能だ。教室での授業の場

合、複数のグループが会話をするときには、その終了には時間差があるが、Zoom のブレイクアウトルームは、皆が同じ時間に終了することができるので、スムーズだった。学生は、オンラインの授業は思ったより効果的だと話す者が多かった。

―日本では、パンデミックが長期化するなかで、学生のメンタルヘルスの悪化が深刻化しているとの指摘がある。スタンフォード大学の場合はどうか。

C：メンタルヘルスには影響は、どちらかというと影響はなかった。昨年（※2020年）6月から故郷のミネソタ州に帰り、秋になってから、家を借りて1人で暮らし始めた。もし故郷に帰らずキャンパスにいたら、問題が出てきたように思う。当時、住んでいたアパートは、周りで工事が多く一日中大きな音がしており、勉強に集中しにくかったのもある。図書館等も閉まっていて、アパートのほかにいる場所はなかった。大学のプログラム、サポートは、私については必要なかった。

D：パンデミックが始まった当初、多くの学生は、大学を離れ実家に帰った。大学は誰もいなくて、とても寂しくて孤独を感じた。当時交際していた女性と別れて、メンタルヘルスを保つのが難しかった。他の問題も沢山重なったこともある。父は喫煙歴が長いので、（父が感染して）健康被害がでることを心配した。故郷はポーランドであり、故郷とは距離が離れている分、本当に不安だった。その後、大学から1時間くらいのところに引っ越したが、最初の数ヶ月間は、知っている人がいなくて、孤独な時間を過ごした。

パンデミックが始まったばかりの頃には、大学では（最初に感染症が確認されたと言われる中国武漢市で使われている）「広東語を救う」運動が始まった。理由は、この直前に、大学は唯一の広東語の教師を解雇した。教師は20年間ぐらい広東語を教えており、著名な教師だったので、突然の解雇は多くの人の怒りをかった。この運動を通して、多くのやる気がある人々に会った。毎週1回、その人たちと会ったからこそ、パンデミックの間、私は生き延びることができたと考えているほどだ。その人々は素晴らしい人たちで、よい友達になった。この運動はある程度は成功をおさめた。現在も広東語の授業は続けられているが、この運動の契機となった教師は大学に戻ることはできなかった。

印象的なことは、大学からの連絡は官僚的であったことだ。大学からの連絡はメールがほとんどで、メールには必要な指示と、文中のリストにあるリソースを利用することができると書かれている。メールの多くが、用件のみが書かれ人間味を感じないものだった。もっと温かな文章が添えられていたらよかったと思う。スタンフォード

大学は、学生を機械を扱うかのように学生と接した面があり、それが嫌いだった。そのため、大学のメールに書いてあったリソースを利用したことはない。

B：個人的に、パンデミックは、予想以上にメンタルヘルスに影響があったと思う。私は学部生なので、2020年2月末に、キャンパスから離れ実家に戻った。最初の数カ月は（メンタルヘルスは）とても良かった。オンライン授業の合間、休憩がてら家族と一緒に時間を過ごした。夏休みの終わりまでは、時間を自由に使うことができてよかった。秋学期からは、通常通り、授業がたくさん入り忙しくなった。授業はすべてZoomで行われ、非常に疲れた。オンラインだと、授業中にあまり話せない方なので、交流が乏しくなり、授業へのやる気を徐々に失っていった。いつも「前に進んでいない」気持ちを持っていた。早くキャンパスに戻り対面授業を再開してほしいと思っていた。2021年9月にキャンパスに戻ったら、非常に辛くなった。パンデミックで家の中にいるのに慣れていたので、急に大学に出て大人数で会話することが難しく感じた。そのため2021年9月ごろが、メンタルヘルスが一番悪かった。慣れてきたら、問題なく過ごせるようになった。

A：パンデミックのもとで、幸いにも周りにサポートされてきた。サポートはだいたい2種類に分けられる。1つ目は、大学からの公的なサポートだった。重要だったのは、教師と職員と学生がなるべく早くワクチン接種ができるように努力してくれたことだ。その上、週1回は、PCRテストを受けることになっていたので、サポートは心強かった。授業をオンラインに変えた上に、期末試験を中止し宿題の量を減少された。文学の授業でも、期末試験は中止され、みんなで一緒にインターネットを使って詩を書いた。負担を減らすほかにも、一緒に詩を書くことを通じて、大変な時期を一緒に乗り越えた。ストレス発散も兼ねたと思う。2つ目は、学部に属する学生たちの私的なサポートだった。（コロナ以前から）院生のうち若干名が「ソーシャルチェア」という役割を担う。例えばパーティーを用意したり、院生たちが話し合える場を作る。コロナ禍では、急に全てのイベントをオンラインに移さなければならず大変だったと思う。しかし、担当した2人は素敵なソーシャルチェアで、ハロウィンの際には、オンラインでダンジョンズ＆ドラゴンズゲームと人狼ゲームをするイベントを実施した。また、クッキーの作り方を教えるイベントもあった。これは、オンラインで作り方を見て、（各自が）自宅のキッチンで真似をする企画だった。とても楽しかった。その他にも、茶道に詳しい院生がバーチャル茶会を主催したり、親しい友達とキャンパスを散歩したり、ピクニックしたりもした。キャンパスは、人がいなくなり寂しくなったが、残った数少ない友達と絆を深めた。素敵な人々のおかげで、メンタルヘル

スを保つことができた。

―所属している大学に対して要望したいことはあるか。

D：3つの要望がある。1つ目は、あたたかなコミュニケーションだ。例えば、コロナ禍が始まった当初は、PCR 検査を受けていない人は、キャンパスに入ることができなかった。現在（2021年12月）は、そうではない。当時、僕はサンフランシスコに住んでいて、その検査を受けなくてもいいということになっていた。大学から、簡単なメールが届き、その検査を受けていないとキャンパスに入れないと伝えられただけだった。この問題をどう解決するか、全く伝えられず、少し怒りがわいた。もっと人間味のあるメッセージに変えたらよいと思う。

2つ目は、学生に対する資金を増額することだ。カリフォルニアは住むには非常に高価な場所なので、大学院生には経済的サポートを充実してほしい。スタンフォード大学は資金源の乏しい機関ではないと思うので、経済的サポートはあればあるだけよい。

3つ目は、時間だ。学部生は卒業論文を完成させる時間が長くなるし、プロジェクトによっては、これまで以上に時間が必要になってしまう。例えば、中国に行かないと論文を書けない学生は沢山いるので、プロジェクトを変更し作り変えて新たなプロジェクトを始めた人もいる。そのため、もっと研究する時間が必要になっている。コロナ禍で大学は今までいくつもの新しいポジションを提供してきたが、まだ足りないと思う。

A：希望することは2つ、どちらもささやかなことだ。1つ目は、テクノロジーに長けたアシスタントを付けたらどうか。例えば、先ほどロシア語の授業に触れたが、その先生は元々テクノロジーの利用に熱心な方だった。全ての先生方がテクノロジーに関心を持っているとは限らない。長年の経験がある先生のほうが、教室で教えることに慣れていて、いきなり全て授業をバーチャルにするように言われても無理があると思う。それゆえ、授業の内容や流れを取り仕切る先生に対し、テクノロジー担当のアシスタントが付いたらよいのではないか。アシスタントを付けることで、先生が授業の形を調整して、理想的だと思われるフォームで授業が展開できると思う。

2つ目は、授業形態の選択肢を増やすこと。最近、パンデミックが少しだけ落ち着いてきて、ほとんどの授業は元通りに対面授業に変更になった。外国語の授業以外だが。なぜなら、必ずマスクをつけてから室内に入ることになっているからで、外国語の授業だと発音のニュアンスが聞き取りにくいからだ。他の授業はもう対面で授業が

行われている。しかし、対面授業にまだ抵抗を覚えている学生もいると思うので、ハイブリッドの選択肢があればいいのではないかと思う。マスクをつけて対面授業に参加したい学生は教室に行き、家にいたい学生は同じ教室の生放送を見る。もちろん、先生は大変だと思うが、アシスタントがいれば簡単にできるのではないか。

B：問題は、メール等の連絡が、温かみがなく効率さを重視していたことだ。この2年間、学校から必要性を感じられないようなメールがたくさん来た。新しい情報ではなく、何度となく送られてくるメールが沢山あり、重要な情報を伝えるメールは遅かったりする。特に、学生団体とかサークルをやっている人は、その活動の計画を立てなければならないが、大学の決定と連絡が遅い。例えば私はアカペラグループをやっていて、メンバーが一緒に歌えないと、活動は難しい。リハーサルの計画を立てなければならないが、今日になって学校から連絡が来た。来学期最初の2週間は、対面での活動を禁止するとのメールで、つまり今までの計画やリハーサルはできないことが分かった。学校は、こうした決定を早く伝えてほしい。もう一つは、学生としてやっぱり言語学の授業も、対面授業で行ってほしい。人数少ない授業は、対面でも可能ではないか。屋外であれば、マスクなしでもできると思う。今学期は韓国語の授業を取ったが、3人しかいなかった。外国語の授業でなければ、ずっと多くの人が受講するクラスが許されているのに、これだけ小規模な授業が対面を許されないのはなぜだろうと思った。将来的には、人数の少ない言語の授業も対面で行えるといい。

C：大学の感染予防対策を聞く機会があった。授業では必ずマスクをつけ、学生、教員、大学スタッフは毎週1回、PCR 検査を受ける必要があり、守らないと教室、図書館、体育館などに入れない。宗教上や健康に関する理由がある以外は、必ずワクチン接種を受けなければならない。95％以上の学生がワクチン接種を受けているし、マスクをきちんとつけている。そのおかげで感染率はとても低い。私は大学の方針について賛成している。その方針が継続することを望んでいる。そして海外留学や海外で行う研究については、予定が急に中止になったり、行けなくなったりを繰り返している。東アジア研究の後輩たちも大変困っている。

私は、1年間、横浜にある IUC 日本語学校（アメリカ・カナダ大学連合日本研究センター Inter-University Center for Japanese Language Studies）で日本語を勉強する予定だったが、日本に行けなくなった。日本留学用の奨学金の額では、家賃の高いスタンフォード大学に通いながらの生活費には足りない。日本に行けないしスタンフォードにも滞在できない状態になり、いろいろ経済的不安を抱えることになった。大学は、特にアパートや学生寮への家賃補助も検討してくれたらよい。

E：今日（※アメリカ時間の2021年12月16日）から冬休みで、1月3日から冬学期が始まる。最初の2週間は対面ではなくてオンラインにする決定が来た。3回目のワクチンを来年の1月31日までに全員が受けなければいけないとのメールが来た。このように、大事な決定のメールが遅い。もう少し早く送ることはできないのかと思うことが、しばしばあった。オミクロン株の性質上仕方がない部分もあったかと思うが。

―メンタル面への影響はあったか、どのような変化だったか。

C：私はメンタルに関して相談したことはない。しかし、大学に設置されている相談室（The Bridge Peer Counseling Center）を通じて、他の大学生や大学院生と話す機会があった。電話なので、互いに顔や名前はわからない。コロナ禍でどんな悩みを感じているか、どのように解決できるかなど、話したことはある。

E：私は、今学期、文理学部内で学科ごとに1人ずつ任命されるメンタルヘルスの相談の窓口になっている。その上で、相談窓口の担当をするシステムがある。他には、24時間いつでも電話で相談にのってくれるサポート（The Bridge Peer Counseling Center）がある。私も電話したことがあり、不安を聞いてもらった。親切に対応してくれた。ここの相談窓口は、必要な授業を履修し、カウンセリングの仕方を学んだ学部生や大学院生が担当している。

―苦労している学生ほど最も声を上げにくい状況にあると思うが、大学はどのような工夫をしているのか。

E：私は、日本語科目の TA をしている。語学の授業で欠席が続く学生がおり、教員等からメールをしても返信がない。その場合、学生から3日以内に返事が来ない場合、言語プログラムのトップの教員に報告をする。トップの教員から、指導教員に連絡がいき、学生には必ず連絡するシステムができている。TA の私も、欠席について報告する義務がある。メールは必ず出し、オフィスアワーには直接会って話をしようと連絡する。私は学生でもあるので、心配される学生が、強がってしまって「大丈夫」と答えてしまう気持ちもわかる。その意味で、全く知らない誰かが対応する24時間の電話相談は、素直に話せることもある。私は深夜3時に電話して、将来の不安を話したことがあり、丁寧に聞いてくれるので、気持ちが楽になった。

D：私は、全然知らない人に自分の悩みやトラブルを話すことは、考えたことはない。

相談するなら、親しい人だと思う。私も TA をしていて、その意味で教員としては、学生たちに話してほしい。以前、Zoom を通じて話を聞いてほしいと言われたことがある。Zoom でミーティングする際には、学生たちにそれとなく体調を気遣い、メンタルヘルスの問題があれば、ヘルプすることもある。このように、直接な電話相談より、さりげなく声をかけて、悩みに対応することのほうが学生たちにはあっているように思う。

―コロナ禍で海外留学の中止があったと思うが、どのように捉えているか。

B：日本留学を希望しており、3回申請して3回ともコロナ禍のためにキャンセルになった。私は大学院に進学を希望しているので、大学院で留学が可能になることを期待して学部時代に留学するのを諦めた。就職を希望している他の学生は、留学をあきらめなくてはならなかった。一方で、サークルを通じて日本の大学生との交流があり、コロナ禍はオンラインを利用して、様々な活動に参加している。オンラインの交流活動も数多くあり、学生自身がそうした機会を作ることもできる。その意味で、全く諦めざるを得ない状況ではない。

―言い足りなかったことや付け加えたいことがあれば、発言してほしい。

C：今回のパンデミックによって、どこに住んでいても、生活が大きく変わった。その中で、Zoom や他の新しいテクノロジーのおかげで、授業や学会開催は、これまでには考えられなかった方法で行っている。テクノロジーの発達は、不幸中の幸いだ。世界中、言葉や文化が違っていても、同じくコロナ禍を体験している。この共通経験から、新たなつながりが出てきている気がする。

D：今回のパンデミック「のせい」で、あるいは「のおかげ」で、得たものがある。それは、様々なイベントを開催するなかで、学習方法について共に考え議論できたことだ。そのことは、一人ひとりのメンタルヘルスをよくする影響を与えたと思う。他の人たちの活動や努力を見る機会があれば、自分自身への刺激になり、困難な問題も乗り越える契機になる。皆の話を聞いて、私も頑張らなければならないと思う。

４．おわりに

本稿では、スタンフォード大学で日本語を学ぶ大学院生、学部生の座談会を開催することで、コロナ禍における授業提供体制の変化に伴う学習状況や生活状況を把握することを試みた。

座談会実施の時期は、コロナ禍が始まり1年半が経過しようとした段階であり、スタンフォード大学では対面授業が復活していた。しかしオミクロン株流行により、新年からの授業はオンライン授業に切り替わることが決定されるなど、授業提供体制は二転三転する時期であった。母語でなく日本語で行われる座談会に参加する学生らは、学習意欲が高い積極的な学生であることがうかがわれるが、コロナ禍開始直後や対面授業の復活など、その時々で不安になったり悩んだりしたことが率直に語られた。

具体的な質問への回答の傾向は、以下のように整理することができよう。「① コロナ禍で、遠隔授業（オンライン授業）はどのような形態、授業のやり方だったのか。また、大学生活はどのような変化があったか」の質問については、参加学生全員が語学系分野を専門とすることもあり、語学授業の様子がそれぞれ説明された。Zoom 利用に加え、語学学習用の既存アプリを活用した授業展開は、受講する学生に好評であったことが注目される。なかには対面で実施する授業以上に、学生の学習動機につながったものもあったと報告された。これらの発言に対し、愛媛大学側の語学担当教員からは、遠隔授業での工夫された授業展開に驚きの声が上がり、しばしその場で授業方法や既存アプリの情報を共有するに至った。

大学生活の変化については、大学当局からの連絡が、期日が迫ってから変更を伝えることが多いこと、その文面が官僚的であり、学生に不評であった旨の発言が多く見られた。座談会に参加していた愛媛大学学生からも、愛媛大学も同様に官僚的な文面での連絡が多かったことが指摘された。日米を問わず、先の見通しが持てない不安を抱える学生らにとって、大学からの連絡は内容がどのようなものであるかに加え、その伝え方にも配慮が必要であるとの指摘は重要であろう。

「② コロナ禍が続くなか、メンタルヘルスには影響があったか、大学のサポートを受けた場合、どのようなサポートが役に立ったか」の質問については、ほとんどの学生がメンタルヘルスになんらかの影響があったと話された。その上で、大学内に設置されている相談体制を利用する者と、利用しない者のそれぞれの理由が説明された。スタンフォード大学では、カウンセリング手法を学んだ学生による匿名の電話相談が設置されており、24時間稼働していることが紹介された。ほかにも専門家による相談室が設置されており、大学院生に限るようであるが「ソーシャルチェア」と呼ばれる

学生同士の交流ネットワークが設置され、コロナ禍で積極的に活動が行われたことが報告されたことから、愛媛大側の参加者からその手厚さに対して、羨望の声が上がった。一方で、授業を3回以上休んだ場合に、指導教員から学生の安否を尋ねるシステムが作られている。愛媛大学では、1回生必修科目「こころと健康」等では学生の出席状況を確認した上で、同様の連絡体制をとっている。学生の大学生活スタート時の躓き解消を目的としたものであるが、コロナ禍では、学部の専門科目について学生の安否確認の目的でも行うことも検討の余地があろう。

「③ コロナ禍が続くなか、大学の授業、学生支援に対して、今後、どのようなことを希望するか」の質問については、学生の不安な気持ちに対応し、授業形態を多様にすることや連絡方法の工夫を求めるものであった。授業形態の多様化を求める点については、愛媛大学法文学部の学生と共通性を持つ。また、スタンフォード大学学生は、コロナ禍での授業提供体制の変更を振り返り、その経験からコロナ禍においても積極的な意味を見出す発言が多数見られたことが特徴的であろう。

座談会を通じ、日米に共通した学生の不安や混乱を確認するとともに、スタンフォード大学のメンタルヘルス対策の手厚さ、幾重もの相談体制や学生交流ネットワークの存在など差異についても実感する機会になった。

環境の変化が大きくある中で、引き続き、それぞれの大学で、学生側の物理的・心理的負担の軽減を図る必要もある。今後、他学部や他大学との比較をしつつ、学生の心理的な変化に注目して、引き続き調査研究を行っていきたい。

謝辞

今回、この座談会開催にあたっては、スタンフォード大学大学院生である前田春美さんの大きなご尽力をいただきました。また、法文学部等の教員、ならびに座談会に参加してくださいました法文学部学生等の方々に感謝の意を表します。

なお、この研究は、令和3年度・令和4年度法文学部戦略経費、令和3年度・令和4年度愛媛大学教育改革促進事業（愛大教育改革 GP）および JSPS 科研費19K21723の助成金交付により研究が遂行されたものです。

コロナ禍における法文学部学生による座談会記録の一部

― 2023年度の授業設計や授業内容の参考のために ―

令和4年 GP 愛大教育改革 GP 法文学部プロジェクト
代表　**福井　秀樹**
実施担当者　**青木　理奈・石坂　晋哉・太田　響子・鈴木　　静**
十河　宏行・池　　貞姫・中川　未来
小佐井良太（福岡大学法学部）

令和4年愛大教育改革 GP 法文学部プロジェクト「コロナ禍における法文学部学生の『被災』記録の収集、保存」では、2023年2月14日㈫ 10時から12時にかけ、法文学部生8人、社会共創学部生2人の合計10人に集まってもらい、ハイブリッド座談会を開催しました。学年や性別、コース、昼夜間主に大きな偏りがないように留意して、参加学生を募りました（とりまとめは鈴木、青木、司会は太田）。座談会の場で、法文学部生から出た発言の一部について、ご紹介します。2022年度に対面授業が戻るなかで、学生たちの喜び、葛藤や要望等をお伝えし、2023年度の授業設計の参考情報としてお知らせすることが趣旨です。ここで出た学生の意見、発言がすべてではなく、また先生方からも異なるご意見もあろうかと思います。しかし座談会で得られた学生の貴重な意見をご覧いただく価値はあると考えました。

お手すきのおりにご一読いただけましたら、GP プロジェクト一同の励みとなります。

1　座談会で出た意見の傾向

2022年度は授業のほとんどが対面授業になるなかで、「教室で受ける授業は集中でき、積極的に受講できた」と好意的に発言する学生がほとんどであった。一方で、90分の授業時間を集中することが難しい、遠隔授業時にはなかった通学にかかる時間をストレスと感じる等、この時期特有の気持ちも話された。

就職活動を行った4回生からは、オンラインでの説明会や選考が行われることが当たり前になった中、自宅で参加する際に Wifi 状況が不安定になることがあり、大学で空き教室、会議室を借りることができれば心強いとの声が複数上がった。全学的な対応を求めるというより、個別のゼミ担当教員に配慮を期待するものであり、教員からそのことを伝えてほしいとの要望が出された。

今年度の特徴は、対面授業が復活する中で、留学を希望する者や大学に来ている留学生との交流を通じて、留学に関心を持つ発言が見られたことである。一方で、2022年度から大学祭が復活したが、飲食禁止であったこともあり、より規制緩和を望む声が多かった。これまで遠隔授業が続いた影響から、就職活動で「学生時代に力を入れたことは何か」を尋ねる「ガクチカ」問題も話題になり、4回生から下級生へその質問の趣旨や自身の具体例が話された。2～3回生が熱心に聞き入っていたのが印象的であった。

２　座談会の具体的発言から（一部抜粋）

⑴　1年を振り返って思うこと

- 対面で人と話せるのが良かった。ただ、朝起きるのがつらかった。遠隔だと朝起きても5分で授業に参加できるが、対面だとそうはいかない。オンラインだと、時間を自由に使える部分が多く、よかった。そのリズムになれていた。（2回生）

- 対面になって友達との交流が増えて良かった。しかし、授業でのディスカッションなど、躊躇する先生もいた。去年、オンライン授業が多く、友達作りが遅れて、大学に行きづらくなった、という学生もいた。サークル活動はまだ制限が多い。音楽系サークルだが、発表時もマスク、移動する際も団体はダメだったのが残念。（2回生）

- 対面授業が増え、周囲の環境面が充実してきたと思う。ようやく大学生ライフを送ることが出来た。100人近くの大講義、少人数でのディスカッションなど、楽しんだ。
  時間の使い方は、比較的自由度が高かった去年よりも考えながら、授業、サークル、バイト等をこなすことになった。大変だったが生活のリズムが整えられた。（2回生）

- 対面のほうが授業の雰囲気がよく分かった。社共の授業も取った。法文と社共の授業の雰囲気が違うことがよく分かった。授業の合間に友達と会って話が出来るのも良かった。部活では活動の範囲が広がったが、それに伴い提出書類も2倍、3倍となり、授業、バイトと重なり、大変だった。（3回生）

- 友達があまり多い方ではない。信頼できる友人が一定数いれば良い、という考え方だった。新しい友達は不要では、とも思っていたが、今年、留学生との交流が増えたのは良かった。刺激になるし、留学したい、と思わせるような学生間交流も増えた。大学で友達が増えたのはやはりよかった。（2回生）

- 教員も顔さえ分からない人がいたが、対面になり、初めて顔が分かって良かった。対面授業のほうが理解が促進される気持ちになる。ただ資料を読むよりは対面授業のほうがよい。学食の番号札着席システムはうまくいっていない。着席場所がうまく分散されていない。他大学の学食を見ると、もっとうまいやり方があるのでは、という気がした。（3回生）

- 対面授業のほうが緊張感を持って臨むことが出来た。記憶にも残りやすい気がする。生活のリズムも整った。朝起きて、外に出る、ということが自分に合っていることがわかった。（4回生）

⑵　対面授業に対して思うこと

- 対面でしんどいのは移動。また、90分間集中を求められるのがしんどい。見られている感じ

がしんどい。(2回生)

- 少人数ゼミだと発言する機会があるので長く感じない。大講義で話を聞くだけだと90分間は長く感じる。オムニバス形式の授業で関心のない話になると、集中力を保てない。(3回生)

- 朝1限の授業が8:30に始まるのがつらい。なかなか起きることが出来ない。準備にも時間がかかる。(2回生)

- 日給制の仕事をしているため、対面授業が増えて、収入が減った。昔はオンラインレポートが多かったが、今期は持ち込み禁止の対面試験が多く大変だった。しかし、レポートよりは真面目に勉強したかもしれない。身には付いたかも。オンライン動画の講義の復習が出来なかったのは残念。(2回生)

(3) 就職活動と「ガクチカ」

- 「ガクチカ」は資格試験の勉強に力を入れてきたことを強調した。しかし、就活が終わってみると、そこまでがんばらなくてもよかったということが分かった。企業側が聞きたいのは、その人がどういう人なのか、なにをどうがんばったのか、どういう性格の人なのか。こうしたことが企業には分かればよいのだということがわかった。(4回生)

- 説明会、インターンシップ、適性検査等、すべてオンライン。家でできるので楽。ただ、どうしても気になる企業の合同説明会は対面ででるようにした。集団面接でグループワークを行う際にWi-Fiの接続が悪くなり、選考で落ちた、ということがあった。「ガクチカ」は、こまった。実績などを書かねばならないと思っていたが、他の人のガクチカを見てもそんなにたいしたことは語られていない。成果・実績というよりは、プロセス、努力を企業の側は見ている、という気がした。(4回生)

- 「ガクチカ」は、自分の周りでは何を語って良いのか、悩んでいる学生多い。就活支援行事など、メールでの連絡だけでなく、クチコミ等があると、さらに行きやすくなる。(3回生)

(4) 友人等との情報交換

- 県外出身で知り合いが少なかった。資格も取っていなく不安だった。対面授業になってから、友達と一緒に資格取得にむけた勉強を行うようになり、モチベーションもアップした。(2回生)

- 情報共有という面では、対面になってもあまり変わらない。みなLINE、スマホで情報共有できる。ただ、対面でふとした機会に意図しない情報共有を出来るのはよかった。高校から愛大に来た人で同じ学部の人はいない。コミュニティを広げることはオンラインでは難しい

部分があった。(2回生)

- 県外出身。入学当時は友人がいなかった。1年生の時はSNSで友達作りをした。いまは授業で隣り合わせになった学生とも話が出来る。去年はしかしできなかった。履修登録もよく分からず、卒業に必要なものを十分にとれていなかった。2年生になり、友人と情報共有をして履修登録の問題点に気づいた。(2回生)

(5) 外国語学習

- 個人的には対面のほうがよいと思う。オンラインではコミュニケーション重視の授業ではディスカッションがやりにくい。接続が悪いこともある。まだ十分に修得できていない初習外国語ではブレイクアウトルームを楽しむことは難しかった。言葉の授業は対面が特に良いと感じる。(4回生)

- 1年生前期第3Qまで遠隔。それ以後、対面。発音、練習は対面のほうがよい。2回生になって、ネイティブの先生の授業があった。オンラインで質問し合うのはやりにくかったが、対面だとお互いに確認し合いながら進められるのでやりやすかった。(2回生)

(6) 大学祭再開について

- 食事提供がなかったため楽しめなかった。来年はぜひ復活させて欲しい。(4回生)

- 所属するサークルは、来客が少ないことを理由に今年度は学生祭参加を取りやめた。学生祭を楽しめないまま終わった。食事提供できるように制限緩和して欲しい。(2回生)

(7) 将来に向けて頑張っていること

- 就活をがんばりたい。しかし就活を怖くも感じている。東京の学生などはもっと早い時期から頑張っている、と聞く。今後は、インターンシップ等、少しでも気になったら参加して、後悔しないようにしたいと思っている。(2回生)

- 3回生になったら留学したい。留学の勉強をしたい。行きたい国について学ぶことをしたい。自分探しもしたい。自分が何に向いているのか、就職に向けて、考えたい。積極的に、これまでやらなかったことをしたい。大学生になったら毎年海外に行きたいと思っていた。それを実行したい。(2回生)

- 多くの人と話をする機会を増やしていきたい。インターンシップでも営業のグループワークが多いのだが、緊張してなかなか普段の調子でしゃべることができない。今回の座談会参加も自分の成長につながると思い参加を決めた。学生、年代が近い人だけでなく離れた人との関わりも増やしていきたい。教育支援課法文学部チーム、学校の先生など、年上の方と関わ

る機会が今年は多かった。行動面で注意を受けることもあった。就活に役立つと思う面もあった。忙しくなるからこそ、今後、コミュニケーションを増やしていきたい。（3回生）

- TOEIC 等、頑張って、短期で良いから留学したい。大学院に進みたい。頑張って研究、卒論を進めていきたい。（3回生）

3　大学や教員への要望

- シラバスを見て、1時間目非同期、2時間目対面の授業を履修することにした。この通りであれば通学に問題は無かったが、授業がいざ始まると1時間目が同期型に変更。大学に来て受講しなければならなくなった。しかし、大学で1限に同期型授業を受けることの出来る場所が少ない。関連の情報が欲しい。リージョナルコモンズが8:30から使えると良い。
（※教員追記：2022年11月14日開催の「法文学部キャンパスライフ懇談会」において、同様の要望が出た。この要望を受け、11月16日から法文学部本館1階の自習室の開室している。）

- Moodle 活用により、教員から大量の資料を提供して頂ける。これは学習効率化につながる。Moodle での資料提供は続けて欲しい。

- 就職支援関係の対応について、以下の充実を求める。①エントリーシートの添削、②法文学部就職支援室では話を聞いてもらうばかりでなく、助言をいただきたい。③就職支援課のカウンセリング（外部のカウンセラーによるものと思われる）は、30分間と時間が限られているので、前回のデータを参照していただきたい。④個別の教員は、自宅でオンライン面接に支障が出る学生のために、空き教室を使えるなどと学生に伝えてほしい。学生からは、教員にこんなことを相談してよいのかと戸惑いがあるため。

【第２部】

調査結果を受けて教育コーディネーターの意見

法文学部におけるコロナ禍の学生生活への影響と今後の課題

水　野　　卓
法文学部　人文学履修コース

学生生活の中でも特に教務に関わる影響について、今年度も〈人文学履修コース〉（以下、〈人文コース〉）特有の「卒業論文（卒論）」を取り上げてみたい。従来、〈人文コース〉では、主に「専門演習」という授業やフィールドワーク（実地調査）、「実験室」などの共同スペースでの講読を通じて、卒論の指導が行われてきた。今の4回生は、1回生の時こそコロナ前であったため対面授業を経験した。しかし、コースに分かれて専門教育が始まった途端にコロナが流行し、演習の授業は2年間遠隔で行われ、実地調査や講読なども十分に行われないまま卒業を迎えた。つまり、指導教員による「直接的」な指導を受けて来なかった学生たちなのである。結果的に、人文コース全般で、あまり思わしくない卒論が散見された。この原因を学生自身に帰すことも可能だが、上記のような「直接的」な指導を受けられなかった面も考慮する必要があろう。

それに加えて、「遠隔授業」が卒論に影響していることも可能性として指摘しておきたい。遠隔授業では、基本的に毎回の課題を数百字程度でまとめて提出しており、それに慣れてしまった学生は、長文を書く機会がないまま、何万字という卒論を書くことになってしまったのである。これは指導教員としても想定外のことであり、内容もさることながら、長文を書く技術から指導することが必要となり、より一層、指導教員の卒論指導力が求められるようになったと思われる。

この今年度の卒論の「状況」について、ある程度予測できるのが、本事業の調査結果である。アンケートを見ると、対面授業を望む声がある一方で、遠隔授業を切望する学生が一定数いることがわかる。つまり、卒論指導に関しても、遠隔を望む声が出ているのである。確かに、遠隔授業には利点もあり、例えば、大人数の履修者がいる講義は、何度も資料を読み返すことができるとか、毎回の課題に対応することで知識が積み重ねられていくといった回答が示すように、遠隔授業が適しているようにも感じる。一方で、上記の卒論指導にも関わる演習科目や実地調査関連の科目に関しては、「直接的」な指導ができる対面授業が望ましいと言えよう。

今後の教務関係について言えば、学生の一部の意見にも見られるように、それぞれの講義に適した授業形態が選択できる形が理想的であるように思われる。ただし、すべて学生の意見を取り入れるのではなく、特に〈人文コース〉では「卒業論文」の作成が控えている以上、そこに向けてのカリキュラムに関しては、なるべく対面で行われるような工夫が必要となる。このバランスを今回の調査結果をもとに考えていかなければならないであろう。

法文学部におけるコロナ禍の学生生活への影響と今後の課題

泉　　日出男
法文学部　法学・政策学履修コース

2022年度より対面授業が原則となった。対面授業を心待ちにしていた学生も多かったと思う。以下、今回のコメントの対象の1つである「コロナ禍における法文学部の被災記録の収集と保存Ⅶ―2022年度学生を対象としたアンケート調査の単純集計結果―」（以下「収集と保存Ⅶ」）におけるアンケート結果を踏まえつつ私見を述べる。

収集と保存Ⅶにおいては、「原則、対面授業を受けるようになって良かったことを教えてください（複数回答可）」との問いが新設されている。同問いに対する回答については、「友人と一緒に授業を受けられ、授業や大学生活に関する情報を共有しやすくなった」325人（55.1%）が最も多く、「生活にメリハリがつき、大学生活にやる気が出た」270人（45.8%）が続いている。このように同問いに対する回答を見る限りにおいては、対面授業に対して好意的な意見が多いことが理解される。このような対面授業に対する好意的な意見は、私の授業を履修している学生の出席状況から見ても明らかである。法学・政策学履修コースにおいては、3回生から法政専門演習、いわゆるゼミが始まる。コロナ禍がはじまった2020年4月に入学した現3回生泉ゼミの出席状況であるが、前学期は欠席者なし、後学期はインターンシップのために1度欠席をした学生がいたのみであった。法文学部においてゼミを担当して7年になるが2022年度ほど欠席者が少なかったことはなかった。このような出席状況の傾向は講義科目においても同様であった。コロナ禍以前の2018年度後学期に開講した夜間主コース「競争法政策」における「出席が3分の2に満たない学生」の割合は約24%（登録者50名中12名）であったが、2022年度後学期に開講した同コース同科目における出席が3分の2に満たない学生の割合は約0.03%（登録者31名中1名）であった。このような出席状況に鑑みた場合、少なくとも私の授業を受講していた学生は、対面授業を好意的に捉えているのではないかと思われる。

なお収集と保存Ⅶにおいては、「原則、対面授業を受けるようになったことで困ったことを教えてください（複数回答可）」との問いも新設されている。同問いに対する回答については、「対面での授業が長く感じる」、「空コマや移動時間があるため、時間の融通が利かなくなった」との回答が275人（46.6%）と最も多かった。対面での授業が長く感じるとの回答については、コロナ禍になり対面授業が少なかったことが影響しているようである。このような回答に対しては、教員サイドも授業時間の中で休憩時間を設ける等の対応が求められよう（私も授業中に5分程度休憩時間を設けた）。

以上のように収集と保存Ⅶにおけるアンケート結果においても、私の肌感覚においても対面授業に対しては好意的な意見が多かったように思われる。しかしながら対面授業に対しては上記のような回答も見受けられるため、教員サイドには柔軟な対応が求められている。最後に、私自身も対面授業再開を心待ちにしていた教員の一人であった。とりあえず対面授業が再開され、ほっとしているというのが正直な感想である。

法文学部におけるコロナ禍の学生生活への影響と今後の課題

楢　林　建　司

法文学部　グローバル・スタディーズ履修コース

本小論では、アンケート結果を手がかりに、グローバル・スタディーズ履修コースに関係が深い授業で本稿執筆者が担当したものをふりかえることを通し、コースや学部の教育上の課題を示すことを試みたい。

第1は、「国際問題ワークショップ」（昼間主・後学期・1～4年次）である。この授業は、グループワークを柱とすることを標榜しているので、ほとんどの受講生は、この授業の利点をアンケート結果にある「グループディスカッションがしやすい」ことに見出していると考えられる。逆に、「グループディスカッションを負担に感じる」という学生は、受講を避けるであろう。

この授業の実質的受講者数は、2021年度が26名で2022年度が62名と、今年度は大幅に増えた。増えた原因は定かでない。グループワークに期待する学生が増えたからなのか、1年前と比べてコロナの状況が落ち着き、グループワークに対する学生の不安感が和らいだからなのか、あるいはその他の原因によるものなのかは、明らかでない。「with コロナ」の時期に入ると思われる今後において、グループワークに関する学生のニーズについても、注視していく必要があると考える。

過去になかったできごととして、授業前半部（7回）で、ほぼ空中分解したグループが出たことが挙げられる。相談に来た学生によると、グループ内連絡用の LINE で厳しい言葉のやりとりがあったそうだ。そういうことが起こった原因についてはいろいろ推測されうるが、グループワークでの人間関係創りに不慣れというコロナの影響があるかもしれない。

第2は、2022年9月に実施した「海外インターンシップ」（昼間主・前学期集中・2～3年次）である。この授業は、タイの協定校の全面的協力を得て行われるもので、3年ぶりの実施であった。受講者は実質6名である。

この授業においては、コロナの影響が大きく、例年行っていた高齢者ケア施設でのアクティビティへの参画や、中学校における模擬授業等を行うことができなかった。また、国際航空券の燃油サーチャージが高騰したことや、タイでコロナに感染した場合の予備費を用意しておかねばならないこと等により、学生の経済的負担が過去と比べてかなり重くなった。実際、「あと数万円」を用意することができず、直前になって渡航を断念する学生が出た。アンケートの経年分析からは、学生の経済状況は全体的傾向としては比較的安定してきていることが窺われるが、海外研修にまでは手が届かない学生もいる。

フィールドワーク等の利点として、アンケートでは人間関係形成を挙げる回答が最も多くなっている。この授業でも、学生は、さまざまな制約を受けるなか、種々の場面で前向きな人間関係を創ることができた。学生のこうした姿勢を後押しすべく、休止している国内外の体験型プログラムを慎重かつ着実に再開させることや、研修費用に関する学生への経済的支援をできるだけ充実させること等が求められる。

【第３部】

コロナ禍の学生支援と他大学の様子

法文学部相談室におけるコロナ禍の学生生活

栗　原　美　幸
愛媛大学法文学部カウンセラー

コロナ禍で相談活動を続けてきた中で、カウンセラーとして守秘義務を守りながら、私が感じた全体の印象を述べさせていただこうと思います。

学生たちは、通常でも大学入学という大きな変化の中、コロナという未知の物によってもっと大きな変化を受け入れなくてはならなくなりました。

そんな中、様々な事柄で学生の二極化が顕著になってきたのではないかと感じています。例えば、オンラインの授業にどうにか適応していく学生と適応できない学生。他の学生がどうしているのか情報を得られる学生と得られない学生。周りの人にヘルプが出せる学生と出せない学生。また対面授業が始まってからは、高校までの対人スキルがうまく使える学生と使えない学生などです。対面授業が始まれば、仲間づくりや居場所づくりもどうにかできるだろうと考えていた学生が、うまくスタートを切れなかった場合、その時の戸惑いやショックは計り知れないものだと考えられます。適応できにくい学生は、通常であれば学生生活を送る中で、少しずつ身につけることができたであろう社会性や対人スキルを得るための経験ができにくく、ますます孤立感を感じ、他の学生と距離を感じてしまうということが今も続いているのではないかと思われます。通常の学生生活が始まり、周りが華やいでくるほど、その孤独感はますます深まってきているのではないでしょうか。

そのような環境がまだ続いていると周囲の大人が考慮し、見守り、サポートの目を向けていくことがこれからも大切になっていくのではないかと思います。

また、うまく適応しているように見える学生であっても、本来あるはずだったキャンパスライフの喪失を体験していると思われます。そのことに気が付いていなくても、心の奥に鬱屈したものを抱えているのかもしれないと感じています。表面的には元気に過ごしている学生の中にも、注意をしなければならない行動を密かに続けていたり、ヘルプを求めて信号を出していたりすることもあるのではないでしょうか。そのことに早期に気づくには、どうすればよいのか悩んでいるところです。

コロナ禍の学生調査を何年か続けていただき、学生の統計的な傾向や生の声を届けていただけたことは、私にとってもとても有意義なことでした。少し落ち着いてきたと感じるこの頃ではありますが、上記のようなことから、もうしばらく調査を続けていただけたらと思っています。

就職活動の変遷と就職支援における今後の課題

岡　　靖　子
教育学生支援部就職支援課

13年ほど前から愛媛大学で就職支援を担当している。支援を始めた当時は、就職セミナー募集の案内を掲示するたび、就職支援課は申し込みに来た学生でいっぱいになっていた。「よくわからないけど友達について来てみた」「先輩から早く準備をした方がいいぞと聞いたので来てみた」など友人や先輩からの影響で就職活動の一歩を踏み出す学生も少なくなかった。

この十数年で大学生の就職活動は様変わりした。就職活動の開始時期は、数回の変遷を経て、現在は3月広報活動開始、6月選考開始である。教育の一環と位置づけられ数日間の職業体験として広がったインターンシップは、近年1～2日の短期間のものに形を変え採用の前段階の行事として拡大している。この頃から「いつから就職活動を始めるのか、何をすればいいのか」といった学生からの質問が増加した。かつてのように一斉に学生に情報を発信し、多くの学生がその情報をキャッチし行動するといった仕組みは機能しづらくなった。

また、情報伝達の方法もコロナ禍を経て大きく変わった。オンライン化が加速的に進み、就職支援課では学生が在宅でできる支援の方法を広げるため、LMS（Moodle）、SNS（Twitter）、WEB カタログ（オンライン上の掲示板）、WEB 会議システムなど多くのツールを導入し、必要な情報を学生に届けることは達成できた。その間、学生のもとには就職支援に限らず多くの情報が毎日届き、その中から必要な情報を自ら選択し、対応することは大変な作業であり、抜け落ちていく情報が多かったことは想像できる。

コロナ禍に入り「今から就職活動を始めても大丈夫ですか」「企業をどう選んでいいのかわかりません」このような声を聞くようになった。その声を反映し「じっくり就職相談会ー今から就職活動を始める方へー」「会社選び相談会」などニーズに合わせた就職相談を設定してみた。予想以上に反響があり、これまで就職支援を利用したことがないという学生が応募し、満席になった。この経験からわかったことは、「学生が必要と思う情報は届いている」ということである。発見であった。

また発信の方法について、すでに何度もオンラインで周知している情報を、対面の場面で学生に説明してみた。学生は初めて聞いたような反応をし、情報に興味を示したという場面に出会った。このヒントから直接伝えることの効果を改めて実感し、合同企業説明会への参加の周知を対面でも実施してみることにした。先生方にお願いし、授業や学生が集まる機会に出向き説明した。その結果、参加者は大幅に増加した。

コロナ禍を経て、情報を発信する仕組みは整った。しかし一斉発信の情報から「自分事」として受け取ることは難しく、その結果多くのチャンスを逃している学生がいることが危惧される。過保護とお叱りを受けるかもしれないが、友人や先輩の助言に頼ることができない環境で学生生活を過ごした学生に対し、学生の「自分事」に繋がる就職支援ができるよう研究と工夫を続けていきたいと考えている。

福岡大学法学部におけるコロナ禍の学生生活への影響：愛媛大学法文学部との比較の試み

小佐井　良　太
福岡大学法学部

コロナ禍における学生生活への影響は、愛媛大学法文学部と他大学とを比較してみた場合、その共通点や違いをどのような形で見出せるだろうか。以下では、愛媛大学法文学部の状況の相対的把握に寄与することを意図して、筆者が2022年4月から勤務している福岡大学法学部の状況を一教員の印象論ながら素描することにより、愛媛大学法文学部との比較をささやかながら試みることにしたい。

まず、福岡大学法学部の概要を簡単に紹介すると、学生数は法律学科と経営法学科の2学科を合わせた一学年の定員が630人であり、学部全体の学生数は2,541人である（2022年5月1日現在）。学部単体では愛媛大学法文学部の約1.5倍程度の学生数であり、大学全体では愛媛大学の約2.5倍程度（約2万人）となる。西日本地域でも有数のいわゆる「マンモス私大」の一つである。

福岡大学におけるコロナ禍の学生生活への影響について、最初に授業の実施形態からみていくと、2022年4月の時点で福岡大学法学部での授業形態は対面授業の実施を原則としていた（2021年度後期までは対面授業と遠隔授業が併用されていた）。対面授業の実施／受講に際しての注意事項等は、換気の実施やマスクの着用、着座位置の距離の確保や体調管理等であり、愛媛大学法文学部とほぼ変わらない形であった。異なる点を挙げると、学生にはGoogleフォームで作成された「着座位置確認用入力フォーム」への授業毎の入力が求められており、各教室に設置されている学生証による出席管理システムへの出席登録と合わせて活用されていた。これにより、教室での着座位置の距離の確保（とその意識付け）は概ね適切になされていたものと思われる。

少人数による演習科目のゼミでは、講義科目と同様に換気の実施やマスクの着用、体調管理等の対策を徹底した上で、教室での対面授業を実施した。私が担当する2年生、3年生のゼミではほぼ毎回、4人～5人程度に分かれてのグループディスカッションを行っていたが、学生たちの様子を見ると実に楽しそうに話をしている様子がうかがえた。そうした様子を見るにつけ、これまでのコロナ禍で学生たちが思うようにコミュニケーションをとることができなかったストレスをゼミの場でも思い切り発散しているような印象を受けた。

3年生ゼミでは、9月にゼミ生16名が参加して東日本大震災・津波被災訴訟事件に関するフィールドワークを実施することができた。愛媛大学在任中から私のゼミで行ってきた恒例のフィールドワークであるが、3つの訴訟事件被災現場への訪問調査を2泊3日の行程で行う以外にも、学生たちの中には前後の日程で仙台市内近郊の散策やプロ野球観戦（東北楽天ゴールデンイーグルスの本拠地スタジアムで福岡ソフトバンクホークス応援ユニフォームを着用したアウェー観戦）をする「強者」もおり、ゼミ生全員での会食等は控えざるを得なかったものの、学生たちにはそれなりに楽しんでいる様子がうかがわれ幸いだった。

次に、学生たちのサークル活動や運動部等の部活動の状況については、愛媛大学に比べて学生たちの活動に対する制限が緩和されている印象を受けた。4月にはマスク着用等の基本的な対策を行った上で、コロナ禍以前には愛媛大学でも普通に見られた形での新入生勧誘行事が連日キャンパス内で盛んに行われている様子を目にした。本プロジェクトではこれまで、愛媛大学法文学部生のかかわるサークル活動等が厳しい制約下に置かれ、サークル等によっては活動の継続が困難になっている深刻な状況も座談会や手記等で触れられていたことを考えると、私の見る限り、福岡大学における状況はそこまで深刻ではない／なかったように見受けられた（この点は、今後もう少し詳しく検証して比較してみたいと思う）。

もう一つ、学生祭の状況についても、福岡大学と愛媛大学では異なる様子だった。福岡大学の2022年度学生祭では、飲食物を提供するブース・出店等も普通に見られた。この点、愛媛大学ではそこまでの制限緩和はなされなかったと座談会等での学生の発言等から承知している。開催時期もほぼ同じ11月上旬頃で、当時の福岡県と愛媛県のコロナ禍の状況にさほど大きな違いはなかったようにも思われる中で、福岡大学と愛媛大学の判断の違いがどのようにして生じたのかは、可能であれば検証を試みるのもよいかもしれない。

最後に、福岡大学での3年次生の就職活動に関する状況に言及しておきたい。福岡大学では、コロナ禍の学生に寄り添った就職支援として、大学キャリアセンターの主催で「ガクチカが書けない」を解消するワークショップを初めて開催したことが、大学のプレスリリースでもトピックとしてとりあげられている（2022年11月22日付。ワークショップ実施は同28日。ガクチカ＝「学生時代に力を入れたこと」の略）。またその様子は、地元のテレビ局によるニュース報道等でも紹介された。2022年度の3年次生は、入学当初からコロナ禍に見舞われた学年であり、コロナ禍での学生生活への影響を最も大きく受けた学年と言えるだろう。こうした状況は、福岡大学に限らず愛媛大学でも、また他の全国の大学でも同様であると思われる。この点を意識して2022年度の学生座談会では、参加した愛媛大学法文学部の学生に「ガクチカ」問題を尋ねてみたが、一方でそれなりに対応に苦慮した様子がうかがえたのと同時に、他方では資格試験の勉強に打ち込んだプロセス等を上手にアピールするなど一定の「乗り越え方」を示していた様子が印象的だった。この辺りの状況を、福岡大学との比較でもう少し丁寧に調査して読み解いていくと、大学／学部／教員の学生に対する就職活動支援のあり方を考える上であるいは有益な示唆を得られるかもしれない。

以上ここまで、現在は愛媛大学を離れ他大学に勤務する一教員による大変雑駁な印象論ではあるが、コロナ禍における学生生活への影響に関する愛媛大学法文学部と福岡大学法学部との比較を試みてみた。こうした比較をより有意義なものとするには、両大学／学部でおそらく状況が大きく異なると思われる学生の通学形態・時間の違い（福岡大学法学部では1時間以上かけて電車通学等をしている学生が一定の割合を占めると思われる）等も適切に考慮した上で、可能であればアンケート調査、難しければ座談会の実施を通じて学生たちの実情や思いを把握し、その分析・検討を行うことが望ましい。今後、可能な範囲でこうした取り組みにチャレンジすることを約しつつ、本稿のむすびにかえることとしたい。

執筆者一覧（五十音順）

青木　理奈（あおき　りな）	愛媛大学法文学部助手
秋谷　裕幸（あきたに　ひろゆき）	愛媛大学法文学部教授
井口　秀作（いぐち　しゅうさく）	愛媛大学法文学部教授
石坂　晋哉（いしざか　しんや）	愛媛大学法文学部准教授
泉　日出男（いずみ　ひでお）	愛媛大学法文学部教授
太田　響子（おおた　きょうこ）	愛媛大学法文学部准教授
岡　　靖子（おか　やすこ）	愛媛大学教育学生支援部就職支援課
栗原　美幸（くりはら　みゆき）	愛媛大学法文学部カウンセラー
小佐井良太（こさい　りょうた）	福岡大学法学部教授／愛媛大学客員教授
菅谷　成子（すがや　なりこ）	愛媛大学名誉教授
鈴木　　靜（すずき　しずか）	愛媛大学法文学部教授
十河　宏行（そごう　ひろゆき）	愛媛大学法文学部教授
池　　貞姫（ち　ぢょんひ）	愛媛大学法文学部教授
中川　未来（なかがわ　みらい）	愛媛大学法文学部准教授
楢林　建司（ならばやし　たけし）	愛媛大学法文学部教授
野上さなみ（のがみ　さなみ）	愛媛大学法文学部准教授
野村　優子（のむら　ゆうこ）	愛媛大学法文学部准教授
福井　秀樹（ふくい　ひでき）	愛媛大学法文学部教授
水野　　卓（みずの　たく）	愛媛大学法文学部教授
MAUVAIS Eric（モヴェ・エリック）	愛媛大学教育・学生支援機構共通教育センター
諸田　龍美（もろた　たつみ）	愛媛大学法文学部教授
柳　　光子（やなぎ　みつこ）	愛媛大学法文学部教授

令和４年度「愛媛大学教育改革促進事業（愛大教育改革ＧＰ）」

「コロナ禍における法文学部学生の『被災』記録の収集、保存」成果報告書

2023年３月31日　発行

発　行　「コロナ禍における法文学部学生の『被災』記録の収集、保存」プロジェクト
研究代表　福井秀樹（愛媛大学法文学部人文社会学科）
〒790-8577　愛媛県松山市文京町３番　愛媛大学法文学部
電話（０８９）９２７－８２０８
E-mail：fukui.hideki.hz@ehime-u.ac.jp

印　刷　株式会社 松栄印刷所
〒790-0003　愛媛県松山市三番町７丁目９－２
電話　（０８９）９４１－３３３４